



岳 山

年 三 十 第

號 三 第



山 岳

第三十三號 第三十三年

登山案内者ノ改善

登山案内者ノ改善ハ、目捷ノ問題ニシテ將來ノ問題ニアラズ、山岳誌上如何ニ囂々ノ聲ヲナスト雖モ、登山者自身ノ努力後援ニ由ルニ非レバ其一步ヲ進ムル事難シ、登山案内者ノ進歩ハ登山ノ危険ヲ未前ニ防グ第一歩ナリ。

目次

(大正八年十月發行)

圖版

岩菅山頂より裏岩菅を望む

辻本満九氏撮影……… 八頁

西方の山麓より望める岩菅山及び裏岩菅山

同上…………… 八

岩菅山登路の一部平穩堰沿岸の潤葉樹林

武田久吉氏撮影……… 一六

南面の鞍部ノッキリ(乗切)より仰げる岩菅山巔

同上…………… 一六

東館北麓清水の小屋塙より仰げる岩菅山

同上…………… 一六

岩菅山梯子澤の二重瀑

同上…………… 一六

小佛峠の舊觀

辻本満九氏撮影……… 八〇

和田峠(案下峠)より連行峰を望む

同上…………… 八〇

本欄

信州岩菅山

工學博士 辻 本 満 九…………… 一頁

九州の山々

丹澤山塊

駒ヶ岳仙丈岳及鳳凰山塊

雁ヶ腹摺考

工學士 八代準……一

戸澤英一……三八

藤島敏男……四九

理學博士 武田久吉……六七

雜 錄

◇日光湯川の小瀑(八代準)◇白崩山の古道に就て(梅澤親光)◇北相の一角(武田久吉)◇机上談山(梅澤親光)◇高山植物雜記(三)(武田久吉)

山岳叢報(三)

◇常念山脈の冬登山◇松本より島々自動車運轉

登山案内者(三)

◇白馬岳登山案内者組合◇鳥川口と有明口組合◇甲斐柳澤近況

雜 報

◇富士登山の謎◇日本アルプス初登山◇常念方面支登登山一行無事下山す◇日本アルプスに石室を十箇所新設の長野縣の提案◇山上の物價◇伊吹山頂の觀測所

會 欄

◇本會規則の改正◇第十二回大會記事◇第四回小集會◇第廿一回有志晚餐會◇大阪に於ける山の會◇信濃山岳會と日本アルプス會成立◇登山消息◇會務報告◇會員諸君に

英文報

本號卷末英文附錄目次あり就て見られたし。

本會事務所の移轉

大正八年十月十五日より本會

事務所を左記に變更す。

東京市麴町區富士見町四丁目六番地

日本山岳會事務所

信州岩菅山

辻 本 満 丸

日本山岳會が創立されてから、第十四年を迎へた今年までの間に、『山岳』誌上で紹介せられた我邦の高山又は名山は随分多數に上るが、それでもまだ、それに漏れたものもあり、又餘り世間に知られない山岳で探査の價值あるものが、東京から比較的近距离の地方にも少からずある様に思ふ。岩菅山は古來信州の名山として廣く知られた山で一向珍しい方では無いが、是迄此山に關する一片の記文すら本誌に掲載せられたことが無いのは、寧ろ意外とすべきである。或は公知であるが爲に省畧されたのかも知れぬが、強ち其故とも考へられない。

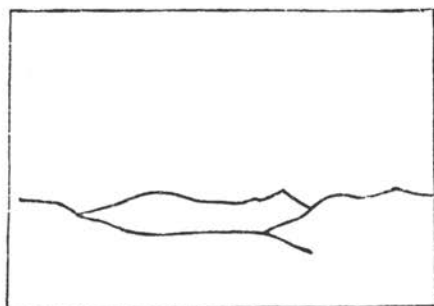
岩菅山は別名を岩簾山とも云ひ、高頭氏の『日本山岳志』に據ると、赤禿山と云ふ異名もある。岩簾と云ふ名は今でも用ひられてゐるが、赤禿の方は其山容から見て當らぬ様に思はれる。全然信州に屬する山で、悪い地圖に上信國界にある様になつてゐるのは勿論誤である。山麓の信州下高井郡平穩温泉の中、澁又は安代あんだいより五里弱、發補温泉からは凡そ二里程の距離にある。

此山は人の知る如く二峰に分れてゐる。即ち表岩菅は海拔二二九五米、裏岩菅は二三二九米で、裏岩菅は淺間以北の上信國界附近の山岳では四阿山に亞く高峰である。然し裏岩菅の東北には地圖に烏帽子岳(二三〇米)と記された可也高い山脈が連り、それ等も岩菅連嶺中に加すべき地勢をなしてゐるから、廣い意味に於ける岩菅山は單に二峰としてしまふ譯に行かぬかも知れぬ。山麓殊に信州の平穩村方面で云ふ岩菅山は専ら表岩菅のことで、裏岩菅の方には餘り重きを置てゐない。これは信州側から見た裏岩菅の山容が、表岩菅の圓錐形に較べて著明でないのも一原因であらう。兎に角平穩方

面の岩菅は表岩菅のことで、表と云ふことは殆んど用ひて居らぬ。それ故前岩菅と云ふことは勿論無い。例へば日光白根の前と云ひ、奥と云ふ如き從屬的關係とは餘程異つてゐる。此點に就き本誌第十一年四四一頁及び六八〇頁に木暮氏の用ひられた前岩菅山なる名稱に對しては聊か抗議の必要がある。五萬分一地圖の記し方は頗る當を得たものと云つて宜しい。それから又前年上信越界の白砂山を踏破せられた森喬氏の直話に據ると、上州入山方面では表岩菅を西覗き、裏岩菅を中覗き、又烏帽子岳を東覗きと云つてゐるさうである。これは岩菅連嶺の一方に傾いた山容を表してゐる面白い名稱であると思ふ。古い書物や地圖に據ると、表岩菅は凡そ二五〇〇米、裏岩菅は凡そ二七〇〇米の高邁なものになつてゐるが、實際此邊を歩いて他の山と比較して見ると夫程の高い山で無いことは凡そ分る。

岩菅山が凌雲閣や赤羽臺から遠望さるゝことが確定されたのは驚くべき事實であるが、汽車の窓から近く此山を望むことの出来るのは、信越線の長野附近から豊野邊まである。然し山が拔群に高い譯でなく、却て前山の間に遠く低く表はれるに過ぎないから、山容を知らぬと一寸識別し難い。豊野驛から見た形は此處に掲げた拙いスケッチの様な風で東館山（二二五米）と焼額山（約二〇〇〇米）の間に低く見える。右方の圓錐形が岩菅（表岩菅）で左の丸い形をしたのが裏岩菅である。此形は長野邊でも大して變らぬから、大體の形を知つて居れば容易にそれと指示することが出来る。

岩菅山に登るには、何と云つても發補温泉を出發點とする外、便宜な場所が無い。發補温泉は澁、安代邊から凡そ二里半許りも隔つた東館山の半腹、海拔約一六〇〇米程の高距にある。此處に至る路は先づ澁から



沓野を通つて、澁峠を越える草津街道に依り、波坂の曲折した坂路を登り、南無阿彌陀佛の松を路傍に見て、尙ほ登ると一里餘にして約一三〇〇米の高さにある沓打の茶屋に達する。一軒休茶屋があつて頗る穢いが、潤満瀧や、幕岩の見物客が必ず休む處で、名物幾代餅と云ふを味ふもよからう。茶屋の前には岩菅山の鳥居がある。其額に記された「岩菅山」の文字は殆んど判別し兼ねる程朽ちてゐる。又月山、湯殿山、羽黒山と刻した石碑もある。波坂の邊から、西方の眺望は非常に開豁となり、沓打に來ると、飯網の後から、白馬連山が雪の輝く頭を擡げ、それより以南、立山、鹿島槍、針木等は勿論、遠く槍ヶ岳の尖頭に至るまで一眸の裏に收めることが出来る。沓打から數町行つた處から、發補路は街道に分れて左に折れ、朝日山の西北を繞つて、琵琶池の北岸に出る。此間日本海を遠望する處がある。それから少しづつ下つて、横湯川を渡り、又急に登りとなつて程無く發補に着く。此降り路の邊からは、谷を隔てゝ左手に龐大な燒額山と、頂上の丸く突起した龍王山（一九〇〇米）が見え、當面には上信界の赤石山（二〇九米）を望む。此山は山頂に赤い岩があることから、其名を得たと云ふ話だが、形は先づ平凡の方で絶頂専門家の外は注意する人も餘りあるまい。志賀山（二〇三六米）は波坂の上から見え始め、發補に近づいては直ぐ近く見える。頂上は前志賀、向志賀の二峰に分れて獨立した火山の形を表し、其西北の裾は琵琶池方面に長く曳いてゐる。登路は此裾野（志賀の高原とは之を指すものであらう。小さい池が大分あると云ふ話で、牧場となつてゐる）から登れば多少笹や雜木の困難はあるとしても、絶頂に達し得ると云ふことを聞いた。然し山頂は樹木が繁つてゐるらしいから、開豁な眺望があるか否かは稍疑問である。

發補には天狗の湯と藥師の湯の二軒がある。私は何時も上の方の天狗の湯（關新作）に投宿して、下の方には行つたことがないが、人の話に據ると上の方が設備其他勝つてゐると云ふことである。天狗の湯には清潔な建物もある、湯も豊富で、又相當設備も整つてゐるから滞在するにも不便は無い。發

補温泉の特徴は眺望の非常に開豁なことである。西南の方面は實に氣持ち良く遠方が眺められる。三澤山（一五〇五米）や、朝日山（約一五二〇米）は、もう脚の下になつて其先方には長野市が見える。夜になると電燈の光も鮮に見える。其後方には飯綱の背面から天半に亘つて飛驒山脈の連峰が、波坂や沓打の茶屋から見たのよりも、一層高大に眺められる。又近く左の方には坊平山（一八四〇米、幕岩のある山）や、突兀たる笠ヶ岳（二〇七六米）の頂が指呼の間に見える。私は發補の眺望を温泉場としては珍らしいものゝ一つに思つてゐる。

發補から岩菅までは前に記した様に凡そ二里程で、約四時間を要する。途中少し下る處もあるから、海拔では約八百米程の登りとなるが、勿論大したものではない。只だ尾根に登り切る迄の梯子澤の稍歩み難いのだ、本山頂上附近の急斜とに骨が折れるに過ぎない。

登路は東館山の西北を迂回し、岩菅山頂の西南にある大雑魚川の支流、梯子澤に登り、連嶺の尾根に取りつき、北を指して絶頂に達するのである。『震災豫防調査會報告』第八號、毛無火山近傍地質調査報文（一六七頁）に據ると、「岩菅山には唯一の攀路あり。即ち魚野川の上流字アライタに落つる所の梯子澤よりす。此澤を昇り盡せば岩菅の長ツルネと稱する平原なり。此平原こそ岩菅が曳く所の裾の最上部にして熊笹繁茂し矮き松柏の之に交生し遠く南に及びて東館山に連る。此ツルネより岩菅頂に至る高距凡そ百五十米突餘、岩骨露出して頗る急峻なり」とある。此梯子澤は魚野川の支流であるらしいから、發補からの路にある大雑魚川の梯子澤とは、別のものとせねばならぬ。然し尾根上に登り着いた處は、孰れも同じらしい。同じ山脊を隔てゝ梯子澤と云ふ澤が二つあるのか。或は萬一本文の魚野川は雑魚川の誤植でもあるのか。アライタなる地點を確めれば分ることであるが、今は決定し兼ねる。

發補には案内者も人足も無いから、それ等の必要ある人は下から連れて來るのが安全である。旅店

の人や或は都合よく來合せた人が案内をして呉れる様なこともあらうが、それは餘り的にはならぬ。然し正確な地圖を持ち多少登山に經驗のある人ならば、殆んど案内者の必要は無い。途中稍紛らはしいのは梯子澤の入口を索めることであるが、これは豫め宿の人か山の様子を詳しい人から聞いて置けば宜しい。一度梯子澤に入ることが出来れば、それから先は一本道で殆んど迷ふ虞は無い。早朝發補を出發すれば裏岩菅まで行つて夕刻發補へ戻ることは容易である。

發補から岩菅に至る行路を昨年八月下旬に於ける私の經歷から、次にざつと記して見ることにする。先づ温泉場から直に近路を登り、數町にして高天ヶ原と呼はるゝ峠狀の平地に出る。此處は一七五六・五米の峰の東南に當る地點で、海拔約一六六〇米餘。短き笹の地を蔽つた間にウメバチサウやモウセンゴケが多い。白樺の大木もある。又岩菅山の第二の鳥居がある。振り返ると笠ヶ岳と志賀山が高く見え、前の方には焼額どりかぶの右に鳥甲どりかぶと云ふ山が見える。これは五萬分一苗場山圖幅の一八五二米の峰であるらしく、同圖の鳥甲山（二〇九八米、笠法師かさはら或は劍の峰）では無い。高天ヶ原から雜魚川の方へ移ると谷は廣くなり、傾斜も甚だ緩くなり、高原狀の景色となつて非常に變つた趣がある。それに山も相當深くなるので、落付いた氣分になれる。邊りは針葉樹と白樺の林がおほく、足元には笹の間に色々の草花が咲き亂れてゐる。一の瀬の小屋を前方に眺めるあたりから、右方に切れ込む。地圖に記された路は畧正しいと思ふ。こゝから用水の堰せきに沿ひつゝ東館の山麓を繞つて行く。（此用水は山に隧道を穿ち湯田中方面へ落すと云ふ話だが、何處をどう通るのか詳しいことは聞かなかつた）。發補から岩菅に登るには此東館山がある爲めに、甚だしい迂回をすることになる。然し亦此山の爲に岩菅が深山らしい奥行きを増すことはどの位であるか知れぬ。東館と云ふ山が二百米餘の高距を持ちながら、登山者を引きつけることの出来ぬのは、岩菅の前山と云ふ様な不利益の位置を占めてゐることの一つの原因であらう。

堰は其幅一間許りで水は淺く、其縁の堤防狀になつてゐる上が歩路となつてゐる。殆んど水平に近い位の緩い傾きについて溯ると、發補から一時間許りで小林の小屋と云ふに着く。此處は東館の北々西で、笹を曲げて造つた奇形の小屋が數軒ある。養蠶用具等に用ふる笹を採る爲めに人が泊つてゐた。此用水側の道路附近は、殆んど白樺の純林である。木の間から左に尨大な燒額の山容が見える。小林の小屋から尙ほ堰について溯ると中小屋と云ふ處を過ぎ、次に底清水（とくしみづ）の小屋がある。小林の小屋に似たものであるが、私の通つた時には無人であつた。底清水と云ふのは、用水の向ふ岸の岩間から清冽な水が湧出するからである。此處は地圖に點線で記された路の最北突出點の附近で、此邊から始めて岩菅の頂上を白樺の樹間に仰ぐ。頂上の神祠も良く見えて距離は近いが、前面には大難魚川の豁谷があるから、まだ中々近づき難い氣がせられる。底清水から少し行くと路傍の立木に「左岩菅道」と記された道標がある。此處から堰に分れ、深い笹の中につけられた左方の路を取つて谷に下ることゝなる。此分れ路は地圖上で云ふと、丁度底清水の突出點の次の突出部邊であるらしい。私は始め地圖上にある點線（路）の路（堰）を終點まで行くものと考へてゐたが、斯様に谷に下るとすると、假令高さで百米程の損失はあるが、山頂までの距離は餘程近くなる利益がある。

分岐點から難魚川に下る間は、針葉樹林の中の笹を切り開いた路で、途中から二つに分れる。左は梯子澤の落口の處に出る本道であるが、笹が繁つてゐて、右の方の別路の方が、却て良く切り開けられてあつたので、私達は誤て其方を下つた。これも矢張り難魚川に出る路で梯子澤の落口より少し許り上流に出るのに過ぎないが、私達は此處が落口よりも上であるか、下であるか分らなかつたので大分迷つた。案内の爲に連れて行つた沓野の馬方の角さんも、八年振の登山で様子が分らず、落口を尙上手にあるものと思つて、その方を尋ねに行つた。然し山頂の方向から考へると、梯子澤は眼前の山嘴を越した彼方にありさうに思へたので、丁度川の對岸につけられてある路らしいものを辿つて暫く

行く、果して稍大きな澤に下る様になつてゐた。これが梯子澤であらうと考へて、これを登つた。角さんは此澤を梯子澤よりも下手の澤であると思つてゐたらしかつたが、稍登つた處の立木に岩菅登路の道標があつたのと、昨夜山頂に一泊した平穩小學校の生徒に行き逢つたので、梯子澤であることが確定された。私達の此澤に入り込んだ處は落口から數町登つた處であつた。歸途此澤を落口まで下つた經驗に據ると、私達の登りに取つた路は損でない許りか、却て歩き易かつただけでも、捷路である様に思はれた。

梯子澤は岩菅山頂の南々西にある約二〇六〇米の峰の直北から、畧西北に向て刻まれた澤で、其大難魚川への落口は地圖上で一五四〇乃至一五六〇米の等高線の間、稍平坦な處であるらしい。此澤は幅も餘り廣くなく、溪流も脛を沒するに足らぬ程であるが、倒木、亂石の外、傾斜が稍急なので歩行は樂でない。特色は處々一枚岩の河床上を小さい飛瀑が奔下して居る事である。

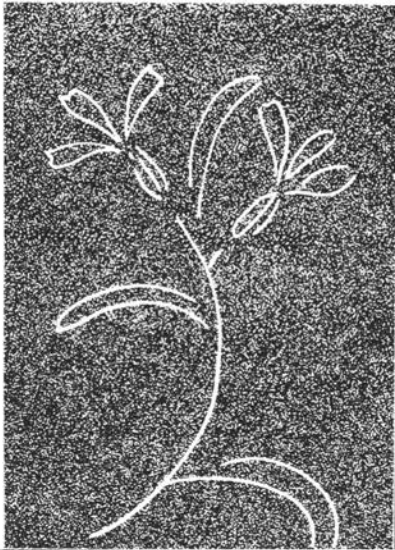
梯子澤の登りは約一時間半程かゝる。澤の兩側は森林で蔽はれてゐるから遠望はない。只後の方を振り向くと時々燒額山が見える許りである。上流にある小さい瀑の右手の岩壁を絡む處は一寸危険らしく思はれた。水は可也上流に至る迄ある。愈登つて山脊近くなると水の無い凹處を歩むことになつて、終に二〇六〇米の峰の北方の山脊上に出る。此梯子澤の登りは岩菅登山中の主なる部分で、此附近の火山の登路としては、此様な澤登りは例外の方である。燒額の登路は角堀澤(宛字)について登るのであるが、それは梯子澤に較べると遙に小さい。

山脊上に出ると東方の眺望は開け、岩菅の山頂は直ぐ頭上に聳え立つ。山勢は稍右方に傾き、其方に急な傾斜を見せてゐる。震災豫防調査會報告第八號(前出)に據ると、此邊に岩菅の長ツルチと稱する平原があるべき様に思はれるが、此處にはそれ程の餘地は無い。或は二〇六〇米の峰の南方を指すのかも知れぬが、切り明けが無い爲、其方へは行くことが出来なかつた。愈本山の登りにかゝると傾

斜は俄に急となり、笹の丈は短くなり、風雪に屈曲した針葉樹が處々に蔓つてゐる。山側の東面（魚野川側）には柱狀の岩石が露出し、途中それを踏で登る處がある。一步毎に眼界は廣くなり、山脊に出た處から約三十分で絶頂に達する。頂上は信州側の山麓から遠望すると尖つて見えるが、登つて見ると南北に長い。一等三角の標石の南に少し離れて、白木造りの神殿がある。六疊敷位の大さで、一方に毘沙門天の本像と白幣とが祀られてゐる。其他は土間で羽目板や入口の戸は、大分破損してゐるが、先づ風雨を凌ぐに足るから一泊する位には差支ない。

頂上には假松がある。其他どんな植物があつたか餘り注意しなかつたので忘れてしまつたが、所謂高山植物の類は甚だ豊富でない様に見受けた。これは時季の爲、又登山者の比較的多い爲もあらうが、先づその様に思はれた。（裏岩菅の方は不明）。山頂の西の斜面には頂上近くから何か樹木が繁つてゐた様に記憶する。東の方の斜面は主に短い笹であつたと思ふ。頂上には之と云ふ程の大きな岩などは現はれ居らぬが、稍高山らしい趣はある。

山頂の展望は頗る雄大である。先づ北方を眺めると、當面に近く裏岩菅がある。山麓から見た形とは異つて稍著しい峰狀をなし、山勢は少し右に傾いてゐる。其左には鳥甲山（笠法師或は劍の峰）の峻峰と、低い毛無火山とがある。日本海は霞んで判明しなかつたが、米山の尖頂は見下された。黒姫山（越後）らしいのも見えた。裏岩菅の右には烏帽子岳と記された連峰が鋭い傾斜を見せ、其上に苗場の宏大な草の斜面が蔽ひかぶさる。苗場の右方に遠く残雪のある丸い山を望んだ。多分中の岳か、駒ヶ岳（越後）であらう。東方には苗場から續く山脈の赤倉山（一九三八米）と二〇五二米の二つの凸起の次に、山頂の緩に隆起した佐武流山（二一九二米）の高峰がある。それから二千米以上の峰が連亘して、終に白砂山（二二四〇米）の頂となる。此山の頂は三つ許りの小さい尖峰に分れて人目を惹く。佐武流、白砂の間には上の合山（約二二二〇米）と忠次郎澤山（假稱、約二〇八〇米）が頭を出す。（此二山は白



(影撮氏丸満本注)む望み(右)山場苗び及(左)山甲島(央中)菅岩裏りよ頂山菅岩・上
(影撮氏丸満本注)山菅岩裏び及山菅岩るめ望りよ麓山の方西・下

砂川源頭西岸にあり。地圖に上の間山とあるは誤なりと云ふ。以上木暮氏に據る。又白砂と重つて八十三山と大倉山がある。(地圖の八十三山は誤にて、大倉山の東南に續き信州地籍にある約二二〇米の峰がそれであると云ふ)。木戸山、八間山も見えた筈である。又野反池の草地も少し見えた。(以上東方の眺望中に列記した山は、私には皆未見のものであつた。私が自身それと推定したのは、佐武流と白砂の二つのみで、其他は歸京後、當時撮影した寫眞を木暮氏の鑑査せられた結果に依つて記した)。是等の國境山脈の手前には、魚野川の深い且つ廣い谷がある。無人らしい凄い谷の様に思はれた。又遠く日光白根と覺しい峰を雲表に望んだ。南方には横手山の大きな根張りに重つて、赤石山が低く蹠り、横手の右方遙に四阿山の美しい兜狀の高峰が聳え、御飯ヶ岳(二二六〇米)の緩い左方の斜面が其下に曳いてゐる。我峰つゞきの東館山の上には、信州笠ヶ岳(二〇七六米)の九い頂が兀立する。又横手の左には草津白根の一部(水釜附近、絶頂は横手に遮らる)が赭色の恐しい色を見せる。淺間の頂は雲に蔽はれて見えなかつたが、小淺間、淺間隱邊から六里ヶ原及び草津附近の高原は一目に見下され、遠く榛名、赤城に至るまで眼を遮る何物もない。岩菅が東京附近から見えるのは、此東南方面が非常に闊豁である故と思はれた。秩父の連山も遠く望まれた。西方の眺望は私には餘り珍しいものでは無い。而かも飛驒山脈は密雲につつまれて何も見えなかつた。只妙高の後から覗いてゐる火打山に残雪の輝くのを尊く眺めたのみである。

震災豫防調査會報告第八號に據ると、岩菅連山は元と一大火山の遺物にて火口壁の一部が残つたものである。而して魚野川方面の傾斜の急なのは火口の内壁であるが爲だと云ふ。如何にも此山の西の半面は緩い斜面が長く引いて火山の形態を備へてゐる。岩菅から烏帽子に至る連山は随分長いものであるから、最初の火山の火口は頗る大きなものであつたことが想像される。

岩菅から裏岩菅に至る距離は、地圖上で直徑十一町許りで、其山脊には甚しい凹凸が無いから、峰

傳ひは容易らしく、二時間も費せばゆつくり往復が出来るであらう。私は同行者の都合で此日安代まで下ることにしたから、裏岩菅行は他日の再遊に譲ることにした。

下山には梯子澤を降り切つて大難魚川に出で、對岸の小屋の廢趾ある處から笹に埋れた路を登つて、今朝の岐れ路に出た。これは本道であるが、必ずしも近くもなく又歩み易くもないことは、前に記した通りである。午後三時發補に戻り、其日の夕刻には豫定の如く安代に歸着することを得た。今參考のため主な地點に到着した時間を記して見ると次の如くである。

午前六時十五分、發補發。同七時十分、小林の小屋。同七時四十五分、川に降る分れ路。同九時三十分、山頂南下の山脊。同十時十分、頂上着。同十一時二十分、頂上發。同十一時四十五分、山脊。午後一時十五分、梯子澤落口。同二時、小林の小屋。同三時、發補着。

近頃登山大流行の所謂日本アルプス地方とは異ひ、此邊の山には笹や樹木が繁つてゐるから、地圖上で計劃した縦走とか、縦斷とか云ふやうなことは、大抵の場合不可能である。然し三月下旬から殘雪の固る頃になれば、何處でも自由に歩けるさうで、岩菅から横手まで峰を傳つて行くのも困難でないといふ話である。

(附記)最近森喬氏の通信に據ると、上州方面から直接岩菅に登る者あり。野反池附近から千澤(野反池から發する澤)と魚野川との合流點まで大倉越の路を行き、魚野川を溯り、十六澤(三角點一五七五・四の上の澤)に入り裏岩菅にかゝる。其路は甚だ急峻險惡の由である。

今夏私は本山に第二回登山を試み且裏岩菅にも登つた。本年七月山頂に立派な石室が新造された。昨年私が登つた路は今本道となり梯子澤の落口から登る方の路は廢止せられてしまつた。梯子澤の畦にも危険の無い路が出来た。其他多少新しいことも見聞したが本文が已に印刷に附せられた後であつたから總て省畧することゝする。

九州の山々

八代 準

山

岳

題して九州の山々と云ふ、けれども澤山の山に登つて見たわけではない、明治四十四五年の頃、小僅か二十坐許に登つたのであつて、話は大分古い。僕は山に登ることは好であるが、準備的調査をしたり、記録を取つたりする、忙しい山登りをするのは嫌な方で、只何となく山に遊びに行く方の人間であるから、紀行等を書く資格のない男なのだ。然るに此男が筆を採つてこんな山話を書き出した譯は、近頃「山岳」の發行が段々と遅れて來る様になつた其原因の一つが、材料の不足にあると云ふ話であるし、又あまり面白くもない山の話でも、まだ「山岳」に出た事のない山のことなら、何等かの参考になることもあらうと考へたからである。それで「山岳」の初年からの其本欄及雜録を見渡したところで、九州の山でまだ記事の出で居ないと思ふ山の話をして見よう。尤も雜報や會報の欄は調べて見なかつたから、會員登山報等の中には、既に記事があるものもあるかも知れないが、そこまでは見なかつたから、若も重複する様なことがあつたら御許を願ふこととする。

御存知の通り九州の山は、其最高峰と云ふのが久住の一七八七米九と云ふ様な程度にあるのであるから、あまり有名でない山の話は、些か「飛鳥山を縦走して田端のカールに至る」式となる恐がある。それから古い記憶と日記等を合せて書き綴つたものであるから、皆大雜把の記事であつて、精密でない。甚だ無責任で相濟まぬが、時には誤もあるかもしれない、之等は豫め御許を願つて置く。

僕の登山はいつも佐世保が起點であつた。起點が九州の西北隅にあつて、僅かな暇を偷んで出掛るのであるから、遠くの方の山へはあまり登れなかつた。九州での面白さうな山は、比較的東部南部に

多い様であるが、以上の様な譯で、西北隅にある小さな山で我慢しなければならなかつた。これから登つた期日の順に山の話を書き列して見よう。地圖は常に陸地測量部の五萬分の一地形圖を用ひたから、此話も總て同圖によつてすることにする。

多 良 嶽

僕が始めて此山に御目に掛つたのは、明治四十年の夏であつた。北海道のマツカリヌブリに登つて、比良夫の停車場から長崎迄打通しに汽車（海峽は汽船であつたが）に乗つて、諫早を過る頃睡眼をこすりながら、過ぎ來た方を眺めると、尤大なる根を張つた、何處が頂上やら分らん様な山が車窓に見えた、之れが多良嶽であらうと思つて居たが、後で考へるとそれは五家原岳らしい。兎に角これに一度登つて見たいと考へて居た。多良嶽は何れの方面よりも登れる。北は鹿島の祐徳稻利又は嬉野温泉、東は多良、南は諫早町、西は大村町より登れる、其外にも多く登路がある事は、地圖を見ても分る通りであるが、鐵道沿線より登るには、西の方大村町よりするのが便利だ。即ち大村より少し北して郡川に沿ひ、東に折れ、中岳、黒木を経て、多良嶽と五家原岳との鞍部に登る道を探るのである。瀛軍が諫早を過て長崎の方に行く時、後方に見える尤大なる山の最高點はこの五家原岳の一〇五七米入の點らしい。多良嶽の最高峰なる經ヶ岳（一〇七五米六）は、錐形に尖つて居つて、汽車が大村町に入る前に、東に一寸見えるのがそれらしい。其後明治四十四年の四月一日に、佐世保で軍艦築摩の進水工事の際、徹夜した翌日の休暇を利用し、佐世保を出立して午前七時半に松原驛に下車した（長崎驛太村圖幅）。僕がこゝで汽車を下りたのは、決して順路ではないので、只物好に直線的の通路を採つて見様とした丈の事である。松原驛のすぐ南の踏切より東に坂を登る、地圖に東光寺と云ふ字の書てある邊より、前面に方つて松の黒き迄に繁つた圓錐狀の鉢卷山を仰ぎ、其南麓なる野岳に達する。これより重井田に至る間に於て、右手の谷間に裏見の瀧と云ふを瞰下することが出来る。瀧の水量は

少ないが、高さは相當にある。瀧壺近く瀧裏に岩窟があつて、其中には二三の人が莫塵を敷て坐り、何か拜んで居るのが人形を置た様に見える。重井田より坂路を下つて尙東し、地圖に三百米の等高線が切れて居る邊に達する（これより熊本號諫早圖幅に移る）。それより郡岳の南麓を通る小さな峠を越へて、北河内の方へ下る。峠の頂で、僕の行手を横切つて雑木林中に姿を隠した獸がある、どうも小さい野猪の様であるので、大分山らしくなつたと思つたが、峠を下ると又少し人家がある。これでは野猪と思つたのが逃げた豚になりさうだ。北河内迄下る前に崖を南に下りて、大村より黒木に通ずる本道へ出た。此道は可なりよい道であるが、夫れは黒木迄で、それから先は又細徑となる。黒木を過ぎて東の谷に入ると立派な杉林がある。此邊の杉材は、此地方での良材であると云ふ話だ。杉林の盡るところで細徑を左に入ると、潤葉樹針葉樹の混つた天然林となり、道も急になる。これから四百米許りの登りは、可なり急で、面白くないが山らしい気分になれる。漸くにして鞍部迄登り切ると、前面は急に開けて、一面茅の草斜面となる。此處にて東南に温泉嶽を展望し得る筈であるが、相憎此方面は霧で何も見えず、僅に有明海の諫早の入江の一部が瞰下されるのみで、愛津森山邊の海中埋立地が綠色に輝いて居るのが特に目立つ許りであつた。小憩して居る間に霧は益々廣がつて、全く眼界を閉し、雨がぼつ／＼やつて來た。急いで小徑を東して、金泉寺の庫裡に着た頃には、雨も大分烈しくなつて來た。丁度午後一時であつた。此日の中に經ヶ岳迄登つて來ると云ふ豫定が之れで駄目になつた。金泉寺は大分荒廢した寺であつて、和尚と若僧と寺男の三人が住んで居る。一夜の宿を頼んで内に入り、爐を圍んでいろ／＼話を聞いた。庫裡の茅葺屋根の一部には、大穴が開て居て雨が盛んに漏る。夕餉をすまして（勿論鐘詰を開く必要がある）いざ寝る段になると驚た、貸してくれた布団は只一枚で、然も葬式の時に死人に掛けたものらしく、白地に南無阿彌陀佛と筆太に書いてある布団だ。板の間に莫塵一枚敷て、其上に此布団を引かぶり、屋根の穴から空を見ながら寝なければならぬのだ。

テントの中の這松の香り高きベットの方がいくらよいか分らぬ、和尚や若僧はどうかを見ると、之れは又普通の夜具を三四枚も重ねて、ぬくぬくと寝て御坐る。死んだ氣になつて佛の布團を引掛け、枕元の豆洋燈を吹消すと何處からともなく其邊をこそ這ひ回るものがある、追々走り回る様になり、數も澤山になつてキツキツチュチュ等と叫んで、僕の腹の上で運動會を始めた。しまひには元來厚からぬ此顔の上へ土足で踏込む様になつた。鼠の足の冷たい事は此日初めて實感した。いや實に驚た。鼻でも嚙られては高からぬ奴が臺なしとなるから、止を得ず枕元の豆洋燈をつけ放しにして寝たが、少し暗い足元の方などでは盛に荒れる。暗い方から僕の寝顔を窺きに來る奴が居る。どうくまんじりともせずまた此夜も徹夜だ。

五月三日も相變らず雨であつた。四面霧で何も見えない。午前九時迄模様を見たが、止みさうもないので經ヶ岳登りはいよゝゝ斷念し、多良嶽神社丈に行くことにした。雨の小止みを見て庫裡を出て少しく東北に進む。此道は可なり廣くてよく分る。やがて天然石を重ねた石段の様な急坂を登る、迂る事甚しい。漸くにして多良嶽神社のある頂に達した。神社は木造で木柵を廻らし、小じんまりとした可なり立派な結構である。地圖で見ると、此東に九八二米七と云ふ多良嶽の三角點があるらしいが、霧で何も見えない。遂に何等の展望も得ずして、元の道を金泉寺迄戻り、預けて置たりゃクザツクを引かついで、ポツ／＼降つてゐる雨中を昨日登つて來た鞍部迄引返し、道を南に取り、五家原岳の東面に掛つて、雜木林中に小徑を求めて佛の辻まで來た。それから片木に出で諫早に下る豫定であつたが、佛の辻の北にある小徑の分岐點で、片方の方へ下る小徑が餘りに木が繁つて居つて通行困難であつたから、東に分岐する徑の易きに就たのが誤で、遂に小江村の方に下りる様な事になつた。道を暫く行くと尾根が常に左手にあるので、氣がついたが引返すのも面倒だから、其まゝ大速力で走り下つた。天氣ならば勿論こんな誤をする場所ではないのだ。暫く下ると雜木林は盡きて、茅草の斜面と

なり、天候も追々と回復して來て、有明灣が下に見える様になつて來た。地圖で見ると丁度小江村と云ふ字のある東を南北に通つて居る點線の小徑を下つたのであるが、之れが可なり長く感じた、いやな道であつた。漸くにして東宇戸に下り、横峰を通つて小江の海岸の大道へ出た。これから諫早平地を歩まねばならんかと思つて、いや／＼乍ら行くと、猿崎にて後よりがた馬車が走つて來たので、

天の助とこれに飛乗つて諫早の停車場迄馳け着け、午後二時の汽車で歸ることが出來た。

北郡岳より南五家原岳に至る尨大なる多良嶽群の山容は長崎線大草驛邊にて、大村灣の彼方に望み得る偉觀である。天草洋上より之を望むも、温泉、多良、八郎の三山は、肥前半島に於ける三秀峰なることを肯かしめる、而し僕には多良は睡い山だと云ふ感じが未だに残つて居る。

天山

佐賀の邊を汽車で通ると、北に並んでゐる山々の西に、象の寝た様な形をした一きわ高い禿山が見える、これが小城の天山である。明治四十四年五月六日午前七時半の汽車で佐世保を出發し、佐賀の一つ手前の驛久保田で唐津行の列車に乗換へ、十時に小城の停車場に下車した（熊本號武雄圖幅）。停車場のすぐ近くに櫻ヶ岡公園と云ふのがある。泉水築山の有様風雅で中々よい庭である。公園の北を東西に通ずる大道を西に進むこと十餘町で、出分と地圖に書てある邊に、道の右側に小學校がある、其先の小川に架した橋を渡つて、小川に沿つて小徑を右に曲り、上流の方に進み、晴氣より寒氣と云ふ方に登つて行く。本山の權現さまの石垣の下を廻つて、西に進むと徑が漸く急になる。此坂を登り切ると石釜山の鞍部に出るが、此邊は松や杉の森があつて、可なり心地のよい道である。之を少し下ると川内と云ふ一寒村に出る。此所より地圖の北の方九六〇米等高線の切れて居る邊に通ずる、點線で示した小徑を登るのであるが、少し登ると山は茅草の生へた禿山となる。此邊はごこを登つても差支はない。僕は展望を得る爲に、地圖に六五四米とある地點の少し北へ登つて行つた。南の方は一面に

佐賀の平野の水田が光つて見え、其中に佐賀の町が燐寸箱を並べた様に見える。筑後川の堤防も其並木が黒く繁つて、長蛇の如くつゞいて居るのでよく分る。有明海は薄鼠色に霞んで、遠方は雲烟漠々である。天山の頂にはいつの間にか雲が飛んで居るので、あまり道草を食ふ事はやめにして、北の方地圖に水溜りの記號ある點を指して登り、之れを登りつめると（小倉號濱崎圖幅に移る）、道は天山の最高點を右に見て北に下る様になるから、此邊で草原の中を最高點を目掛けて登つた。頂上の三角點に着たのは午後一時半である。晝食して居る間に空が可なり曇つて來て、雨がバラ／＼とやつて來た。展望がきかないから豫期して行つた唐津灣も見えなかつた。それで午後二時に三角點を出發して、眞東に向つて尾根を傳ひ出した。尾根は平で、歩行極めて安樂であるが、丁度此時僕の頭上に當つて雲の中に翼を張り乍ら孟禽が一羽地上を窺ひつゝ輪を描いて居るのを發見した。何だか今にもボルプラネで飛下りて來て、頭をコッソと見舞ひさうな氣がしてならぬ。そこで杖を打振り虚勢を示して、急いで尾根を東に走つた。地圖の八〇〇米等高線のある邊へ來ると尾根が急に下り始め、岩が表はれて下り悪くなつて來た。丁度此邊に西北より此尾根を登つて來る小徑があつたのでそれを下り、天山の眞北より東北に向つて市川の方に流るゝ小川に沿ふて更に東北に下り市川の方に達した。此邊の山の斜面には、石垣を築いて田畑が開墾してあるが、斜面が急で石垣が高く、之を飛下りるのが可なり足にこたへた。市川より東に向つて苴ぢやの水を通り、古湯の少し下で川上川が東に屈折する地點に下つて行つた。此所には川上川を横切つて水力電氣の堰堤が設けてある。此川は水量も多く且つ清麗で、谷川らしい心地のよい川である。古湯には温泉があつて、此地方で一寸名のある湯泉場であるが、明日の行程を急ぐので古湯には行かず、川上川の南岸の大道を東に下つて湯原ゆばらに到着したのが午後五時半であつた。東屋と云ふに宿を取つた。湯原も温泉があるが、錢湯式の共同浴場で湯が温い、大浴槽の側に小浴槽があり、其湯を火を焚て溫度を高めてある。小浴槽は湯の量が少くて甚だ不潔だ。浴客は始め大

2



4



1

3

(武田久吉氏撮影)

林樹葉闊の岸沿堰穩平 部一の路登山菅岩 1
 巖山菅岩るげ仰りよ(?切乗)リキッノ部鞍の面南 2
 び及(端右)山菅岩りよ場屋小の水清底麓北館東 3
 (のもるたれば巖に雲稍端左)山菅岩裏
 瀑重二の澤子梯山菅岩 4

浴槽の温湯に浸り、上る時に小浴槽に入つて暖を取り、又大浴槽に浸つて身體を清めて出ると云ふ譯になつて居る。

天山の話のついでに附加へて置くのは、高頭氏の日本山岳志を見ると、天山に清水瀧と云ふのがある。それは小城町より道を東北に取つて永泉寺を通り、彦岳の麓の清水観音と云ふに行くといふ瀧があるが、恐らくその事だらうと思ふ。此地には其年の秋、博多より唐津に至る九州の北海岸を歩いて見た歸りに、小閑を得て遊に行つて見た。小城で閑がある時は、遊に行つて見てもよい所だと思ふ。

脊 振 山

湯原の宿を朝五時半に出發し、川上川の北岸に渡つて東に進んだ(小倉號脊振山圖幅に移る)。三段田にて川上川と別れ、東北に折れて鳥羽院、腹巻、龍作、久保山等を経て、脊振山せふりやまに向つた。地圖を見ると此邊は小丘が起伏して居つて、歩き悪くさうだが、道は案外平坦で、何等困難はない、従つて面白味もない。久保山の脊振神社の先の方で、神社の御祭のために奥宮に登る山路を手入する村人達と一所になつたので、話ながら登つた。道は甚だ立派なもので、極めて樂である。地圖に二重點線で示してある道がそれである。登路の邊は潤葉樹が相當に繁つて心地がよい。日本山岳志を見ると「此山は中古より只管佛地となれり」とあるが、山の尾根に達して北に頂上に向ふ邊には、所々に石に刻んだ佛像が残つて居る。頂上に近くなると樹木の尤も低くなつて、神社の立派な石疊や石段が始まる。頂上に達したのは午前十時半であつた。神社は石造で石の玉垣を廻らし、石造としては結構も大きく立派なものである。神社のすぐ側の三角點に立てば、四望豁達である。特に北望がよろしい、玄海灘、博多、福岡はすぐ目の下に見え、志賀の島海中道の奇も、地圖を擴げた様である。東には筑紫山塊の山々起伏し、西北には此山の脈が少しく低下して、鬼ヶ鼻、金山、雷山と蜿蜒として連つてゐる。村

人はこゝより之等を縦走することが出来ると云ふた。十一時半に頂上を辭し、登つて來た尾根を少しく戻り、小徑を東に折れて板屋に下りた。此方の下りは少し急で道もありよくない。板屋より小川の西岸に沿って南し、小河内、七曲峠、古田原、俊部を通過して、午後三時半中原の停車場に出で、汽車で西に歸つた。

虚空藏山

汽車が長崎線の川棚驛に近づく頃より、マッターホルンに似た一奇峰を車窓に望むことが出来る。大村灣の岸の曲汀に沿ふて鐵路がうねつて居るので、此奇峰は忽にして右の車窓に忽にして左の車窓に現はれる。地圖を見ると（長崎號彼杵圖幅）これは虚空藏山と云ふ六〇八米の小丘に過ぎないが、其奇峰と大村灣の展望を恣にすることが出来さうなことが、登山の動機となつて、明治四十四年五月廿八日の日曜散歩に、佐世保を出發して川棚驛に下車した。道順から云ふと川棚川に沿って北に進み、石本より右折して木場川を溯り、木場より登るが順當であるとは思つたが、大村灣の展望を得ながら登りたいので、川棚驛の東北にある岩立の溜池から、眞東に高見岳の尾根を登ることにした。登るに従つて大村灣の長汀曲浦が目の下に展開し、針尾島、西彼杵の小丘も追々と低く見え出して來た。高見岳の西南なる五〇〇米六なる三角點のある突起の北側を通過して、高見岳に登つた。此邊は草山であるから、どこでも通過出来る。足元より雉が一羽飛出して僕を驚した外、下の方を馬を曳ながら馬子が銜へ煙管で通つて行く等、長閑なる春の山である。高見岳より眞北に虚空藏迄走る尾根を傳つて見たが、兩丘の鞍部から先は、切明が雜木林の繁茂した中に沒して、通過困難になつて來た。蜘蛛の巢に無暗と引かゝるのでやり切れない。西洋婦人の様に顔に網を張つて突進したが、遂に降參して元の鞍部迄引かへし、岩屋の方向に少しく小徑を西に下つて右折し、更に東北に小徑を登つて尾根の上に出で、蜘蛛の巢の難を避けた。それより又尾根傳ひに雜木林を分けて、虚空藏に突進したところ、

どうくマッターホルンの尖頭巖の直下に突當つた、絶壁でどう見ても登れない、右に左に岩を廻る工夫をしたがどうしてもいけない、そこで少しく後へ戻つて比較的通行し易い邊を求めて、右即ち東の方に迂廻して見たが、一度下つて又少し上り、一つの尾根を越すと何んだか無暗と下り出して、岩への登り口は見當らず、どうく長野と云ふに下りてしまつた。百姓家で茶をもらひ、辨當を平げながら話を聞くと、やはり初の考通りで、此岩へは北の方より登る口がある許りで、岩の上は狭いが、大村灣の展望は特によいと云ふことであつた。長野より登り直さうとも考へたが、汽車の時間もあるし、佐世保の近くでもあるから、再遊を期して其儘皿屋谷、牛ヶ岳、鬼木、井石、波佐見を経て有田に出で、汽車で歸つた。其後此山の東にある嬉野温泉に遊に行く爲に、此山の東北、東南を三度程通行したが、どうく此岩には登る機會なく過去つてしまつた。

寶 満 山

僕が此山を始めて望んだのは、明治卅七年の四月である。東京からわづく耶馬溪見物に出掛け、筑後川を船で下つて、歸りに二日市の天満宮に御詣りをした時、附近の山々に比して、一きは黒く立木の繁つて居る俊秀な姿をした此山を睨んで置たのである。明治四十四年の七月廿七日に長崎の三重沖で、驅逐艦山風の運轉をやつて、散々海を荒れ廻つたあけく、八幡の製鐵所に行く用が出来たので、其夜十一時半の汽車で長崎を出發し、翌朝早く二日市驛に下車した。あまり早いので馬車も何もない。止むなく天神様迄歩んで行つた（小倉號太宰府圖幅）。天神様の社に向つて左側の太宰府の細い町を北に進む。町はづれから東に折れて小流を渡り、少しく登ると竈門神社に達する。神主様が湧き水で朝のみそぎをして居る裸體のところを捕へて、いろく話を聞いたり道を教へて貰つた。神社の横手からすぐに登り始め、小徑を東北に進むと、暫くにして右下の方に溜池を望む。其少しく先に石の大鳥居があるから、それをくゞつて行くと道は追々急になつて、針葉樹のよく繁つた林の中を穿つととな

る。九折して東の方に登るとやがて寶満山ほうまんざんの尾根に達し、徑が少しく北に折れる。これより上は所々に岩が露出して居つて、崖の所には鎖が下けてあるが、崖を避けて側の木の根が段の様になつて居る所を登れば、鎖などに御厄介にならなくともよい。之れを登りつめると上に平な大磐石があつて、其上に竈門神社の奥宮がある。木造の可なり大きな結構で、雨風避けの板圍がしてある。神社の邊は比較的南望が開けてゐる丈で、展望の點に於てはあまり勝れたものではない。寶満山の最高點は、神社より東北に少しく登つた所にあつて、立派な石塔が一つ立つて居る。日本山岳志に據ると、佛頂山と云ふのがあつて、「竈門山奥の院と稱する開山心蓮上人が墓山頂にあり」とあるから、寶満山と云ふのは神社のある所を云ふので、最高點即ち地圖に八六八米七とある三角點のある所は、佛頂山と云ふのかも知れないが、聞く人も居ないので、其儘尾根を少し下つて三郡山さんぐんざんの方に進んだ。

三 郡 山

地圖を見ると左手の谷に難所ヶ瀑と云ふのがあるが、尾根からは木が繁つて居るので見えない。此邊より三郡山の頂迄の尾根は、茅草の生えた緩慢なる登りで、左右に見晴しがあつて心地のよい登り道である。地圖に頭巾山と云ふのがあるが、只漠然たる丸い高まりで、特に名をつけるのはどうかと思ふ様な山である。三郡山の頂は此邊での最高點で、南北に細長くなつて居る。筑豊炭田地方、英彦山、甘木地方、福岡、博多方面の展望が得られる。山頂にて辨當を平げ、暫時休憩の後、東の方山口に降る地圖に點線で示した徑を求めたが、雜木が繁つて見當らない。そこで東南の尾根を郡界線に沿て少しく下り、雜木林中比較的通行し易い場所を山口の方向にがさ／＼下ると、四百米の等高線の邊にて、地圖に示してある山頂より山口に通ずる小徑に出會つた。これを走り下つて山口の大道に合してからは、平路坦々、元吉、長尾、豆田、天道と通過して、飯塚の停車場に出で、汽車で八幡に向つた。

溫 泉 岳

肥前半島の盟主温泉岳は、之れを熊本線の車窓に望むも、天草洋上より望むも、其嚴然たるドームの如き山容は、實に西海の重鎮たる名に背かざるものなるを思はしめる。明治四十四年十月十五日、此ドームに參籠すべき時機が來た。朝五時五十分の汽車で佐世保を出發し、諫早で島原鐵道に乗換へ、九時に愛野村に着た（熊本號小濱圖幅）。今日では此鐵道は島原迄行つて居るさうであるが、當時は此愛野が終點であつた。愛津を経て大道を東南に進む。道はつま先上りに小松原の間を行く。東に三角形をした家根の如き鉢卷山を望み、鳥の歌を聞きながら高原を行くが如き心地にて歩むと、暫くにして道は突然千々岩灘に臨んだ崖上に突當る、眼界が急に開け、海を瞰下しながら向ふの釜山の翠巒に對し、景色が全く一變する。此所より道が左に折れ、崖上を海に沿てだら／＼と鹽谷に下る。鹽谷より千々岩迄の間は、海岸の松林の中を行く。昔賴山陽が飲み廻つたのは此邊であらうか。千々岩の村で道が東に折れ、少しく登りとなつて追々南に迂回する。温泉に登るにはこれより小濱に下り、小濱から非常によい道があるから、之れを登るが順であるけれども、近路をするために木場にて本道と別れ左に入る。東南に徑を取つて岳を過ぎ、地圖に六八〇米等高線の切れて居る邊に登つて行くのである（これより熊本號島原圖幅に移る）。やがて別所と云ふに達すると、路傍には硫化水素や水蒸氣を噴出して居る所謂地獄があつて、地表が糜爛した様になつたところが所々にある。此所より南に曲つて温泉を過ぎ、新湯に着たのが午後二時であつた。九州ホテルと云ふに宿る。日足がまだ高いから其邊を散歩した。所謂地獄は所々にあるが、殊に小地獄の池に熱湯の噴出する有様は中々盛んなものだ。新湯は主として洋人客を相手としてゐるので、ペンキ塗の家が多くて、日本の温泉場の様な氣がしない。其後口の津から愛野迄島原半島の西海岸を歩いて見た時、小濱にも立寄つて見たが、洋人に對する設備が多く、支那上海邊の洋人の保養地と云つた様な有様になつてゐる。

翌日午前六時に新湯を出發し、温泉より東に折れて登る。地圖に小濱村と書いてある村の字の邊よ

り、東北に妙見岳に向つて青々と草の生へて居る緩斜面に登るのである。朝日がうららかに輝き、靜に落付いた青毛氈の様な原を、一人氣儘に歩むのは實によい心地であつた。妙見岳に突當る様になるに徑が漸く急になつて、少し東の方に折れて登る。暫くにして妙見岳と野岳の鞍部に出る。此所での展望は中々壯大だ。北には深い谷を距てゝ温泉岳の最高峰たる普賢岳の樹木鬱蒼たるドームを仰ぎ、東は有明の海を越へて熊本の金峰山を望み、南は宇土半島の尖端に三角港の檣を指點し、西は千々岩灘より野母の八郎嶽を望む。十月の中旬であるに南國の常か、此邊の高さにも未だ紅葉せる樹木はなく、満目青々として夏の山に遊んで居る様である。暫時此展望を恣にして休んで居ると、忽にして千々岩灘の沖合遙かに雲の數團が湧き立ち、スクォール來ると見る間に三個の虹が懸橋の如く現れたのを瞰下した。こんな奇妙な天象はあまり見た事がない。僕は明治三十三年の夏富士に登つた歸途、須走口の砂走で、脚下に三重の虹が現れたのを見た事があるが、此虹は三重ではなく、離れては居るが錦帶橋の様になつて居つた。虹は暫くにして消えたが、千々岩の沖には一面に雲が湧いて來た。雨の來ぬ中に登らうと思つて、妙見岳の東面を北に向つて登つて行くと、空が一面に曇つて來て雨が既にぱつぱつやつて來た。普賢岳と國見岳の鞍部に達し、百米突程にて普賢の頂に至らんとする頃には、雨は烈しくなつて來て、普賢も國見も妙見も皆雲に包まれて何も見えず、猛烈な西風が吹いて居るのが分つた。残念ながら何處かで雨宿りをせねばならない、先刻登つて來た時に、妙見と野嶽との鞍部より少しく野嶽に寄れる東斜面に、小屋が一つあつた事を見て置たから、それにでも行こうと少しく戻ると妙見の蔭になつたと見えて、風は一向に吹かず、只雨が盛に降つてゐる。走つて妙見の蔭を抜けると又烈しい西風で、全く吹飛されさうだ。身をかゞめて小走りに漸く小屋の中に避難したが、雲は奔馬の荒るゝが如く鞍部を越へて、東の谷に下つて行き、雨は益々烈しく横に降るのである。三時間も此小屋に小さくなつて居たが中々止まぬ。相當の防寒衣は用意して來たが、風が烈しいので寒く、

身體がたゞ慄へ出して來た。地圖を見ると此所から東に向ふ可なり深い谷があつて、小徑が其底を通つてゐる。之に下れば必ず風を避ける事が出来ると思へたので、雨の小止を見て此小徑を求め、一直線に東の谷に走り下つた。少しく下ると果して風も當らず、氣温も高くなつて生還へつた様な氣分になつた。雨を合羽に凌ぎつゝ益々下る。大野木場に出た時分には、漸く雨も小降りになつて、遠くには青空が見えて來た。今朝見たうららかな高原も美麗なる虹も、皆此威嚇の前兆であつた。普賢は西風で僕を追拂つてどうくせ付けなかつた。大野木場で聞くと、僕が雨宿りをした小屋は、冬になると氷を結ばせるために設けた小屋であるさうだ。大野木場邊は地圖にもある通り、東南に向つて緩傾斜をなせる廣々とした押出しで、清麗なる水が幾條も溝となりて勢よく流れて居り、木蠟はなご探る槎はなごの木が盛に植えてあつて、其紅葉は實に見事であると言ふ話だ。大野木場より道を東北に取り、川原平、中木場、新港を経て、湊町より島原町に至り、城跡等を見物して、米屋と云ふに宿つた。斯くして温泉岳登りは終に失敗に終つた。

明る十月十七日には、新港町より汽船で有明灣を北上し、長州に渡り、汽車にて佐世保に歸つたが、海から見ると島原町の上には、奇しく崩れたる眉山の白き斷崖の聳へたる其上に、嚴然と普賢のドームが壓し覆さつて立つ様は、雄大な景色である。

黒 髮 山

昔から礪器で名高い有田の町の北には、ごつ／＼した岩山が幾つかあつて、松杉の類が繁つて黒く見える。有田の停車場のすぐ東で東北に谷を見上ると、其奥に頂に岩の聳立した一峰が一寸見える。これが黒髮山くろかみやまと云ふのである。又有田の東隣なる三間坂驛みまざかの附近から西北を望むと、黒髮山の北に同じ様な深い緑の色をした、蝶螺てつらに似た岩山がある、これは青蝶螺山あおてつらやまと云ふので、日曜の散歩には至極よさそうだ。明治四十四年十月廿二日に佐世保から遊に行つた。有田の停車場に下車したのは午前九時

頃であつた。有田の町は磁器を作る家が多い。所々に瀬戸物の破片が山積してあるところがある。此破片丈はごうも廢物利用の法がないらしい。有田の町の中程へ北の方から流れて来る白川谷と云ふのを上り、黒髮山より西に引く尾根の四七〇米地點の東に登つて行かうと云ふ考へで進む。白川谷を少し溯ると徑が二分する、右を取つて登る。此邊には所々に磁器を作る粘土を掘る穴が山腹に白く現はれてゐる。暫く登つて百五十米突も來たと思ふ時分に徑が急に丈なす草の中に没して、進行甚だ困難となつて來た。惡戦苦闘して進んで見たが、這松乗りよりは更に恐るべき事態が発生して來た。此叢中には蛇が澤山居る、暖國の常として蝮の居ることも承知して居るから一寸突進する勇氣が出ない、他の途を取ることに變更して退却し、比較的松が茂つて居て下草の少ない、黒髮山より眞南に曳て居る尾根に登り、それから黒髮に辿り行かんと決心して、此尾根を目掛けて眞東に登つて見たが、尾根の上は又盛んに繁つて居つて、通行困難であつた。いろ／＼工夫して見たが行かれぬ。またも退却と決定した。而し此邊をがさ／＼してゐた御蔭で、松茸二本の獲物があつた。此尾根からも撃退されたから、前の白川谷道の分岐迄戻つて左の徑に入り、少しく進むと左の方は應法へ越へる徑であるから、右を取つて登つた。此邊は薪を切り出して居るので、三百米位より上は山が赤裸になつて居るので、何等の困難もなく、地圖に點線で示してある小徑が中絶して居る尾根迄達することが出來た。此邊で三角の龍門を瞰下出來さうに思つたが、三角の谷は又盛んに木が繁つて居つて何も見えない。此尾根の有田側を東に傳つて、地圖の四七〇米の地點を過ぎ、漸く點線で示してある道に合し、これよりは甚だ容易に黒髮神社迄達することが出來た。實は有田停車場から一時間半もあれば登れるつもりで、黒髮より北に青螺、大川内山等を経て歸るつもりで居たのであるが、前記の様な次第で、黒髮神社に着たのが既に午後の二時であつた。實に馬鹿に時間を費したものである。青螺への道はやはり盛んに木が繁つて居て、通行困難の様子であるから、此日は行くのを止めた。黒髮神社は木造の社で、

其すぐ前に東南に向つて大きな薙が出来て居り、次の大雨には社が少し危険ではないかと思ふ程であつた。社の後には金峰山の五丈石の様に大きな岩が聳立して居る。此岩には登れると云ふ話であるが、僕は登つて見なかつた。地圖の五一八米と云ふ點は、此岩の上であるかどうか、一寸三角點が見當らなかつたから分らない。歸り途は神社の前の石段を下りて、東南に下つた。此道は至つてよい道で、神社の參詣道になつて居るらしい。大分下ると石の鳥居がある、それを過て古場、宮野を通り、三間坂驛から汽車で歸つた。

序に龍門と大川内山の事を少し書て置かう。其後大正二年五月十一日此邊を又散歩した。有田にて伊萬里線に乗換へ、藏宿驛（ぞうじやく）に下車し、廣瀬を通つて三角を溯り、龍門に行つて見た。龍門は青螺の西南の谷にある斷崖で、崖はかなり高い。崖の下には入口の廣い穴が二ヶ所ある。谷の奥の方が小さい穴で、佛が安置してある。手前の方の穴が大きくつて十數疊敷位の廣さがある。谷には大きな丸石がごろ／＼して居つて、其間に雜木が繁茂して居る。此所から青螺への登りは、やはり木が盛んに繁つて居るので不可能であると聞いたので、廣瀬迄戻り、正北に牧山の西側を辿つて、越の峠の入合目邊に出で、これより峠を東に越へて大川内村に行つた。村では磁器を作るのを業として居る家が多い。此所より數十級の石段を登ると、大川内山の權現に出る。此社は青螺の北にある崖の石門中に建てられた木造の社で、石門をくぐると崖の下に少しの平な所があつて、御祭等の行事をやる所である。取り立てゝ云ふ程の展望もなく、石門の他は至つて平凡なところである。大川内村よりは吉田、平尾を通り、伊萬里に出て歸つた。

八 幡 山

明治四十四年の三月二十二日に、伊萬里の西にある國見嶽に登つた時であつた、東の方を望むと低い富士形の腰嶽を抜いて、尖つた山が一坐際立つて見えた。此山には一つの特徴があるので覺えて居

つたが、佐賀、武雄邊を汽車にて度々往復する間に、此山が武雄の北にある八幡山であることを知つた（熊本號武雄圖幅）。此山の特色と云ふのは、其七合目邊に崖があつて、これがぐるりと山を鉢巻狀に窓てゐる様に見える點である。明治四十四年十月廿九日に佐世保を出發して、武雄驛に下車した。武雄は温泉場であるが、あまり品のよい温泉ではない。停車場の南に三船山と云ふ奇峰がある。遠見が一寸よいので、僕は同年十一月中旬に此山の東側も西側も通つて見たが、奇峰の間に茶店があつて、三昧線の音がすると云ふ次第なので、どう／＼登つても見なかつた。話が横道に外れたが、八幡山へ志して武雄の北にある柏嶽の東麓を北に指す大道を進み、黒尾にてこれと別れ、尙北を指して登ると、徳連山の窪にある松の岳と云ふ村に達する。それを少しく登ると峠の頂となる。此所より望んだ八幡山は一寸雄大である。例の鉢巻狀の崖は一層明に見えるので、あれをどう登らうかなどと考へる。右手に並んで瀬戸木場山が烏帽子形に聳へてゐる。峠を下つて平古場を過ぎ、大道を横切つて猪鹿に至るごそ／＼登りとなる。例の崖に近よると道は右に廻る、そして崖のない方を通つて池と云ふ寒村に達する。それから西に向つて、草の生へた尾根を二百米突も登ると八幡山の頂上に到着した。頂上は西南より東北に延びた扁平なる峰頭で、三角點は其西南端の方にある。此峰頭のすぐ西及東北に、これより少し低い峰頭が一つづつ頭を出して居る。展望は可なりよい。北は唐津灣、西北には象の寝た様な天山が一際高く、南は有明海を望み、西は伊萬里地方が見える。頂上では例の崖が山の周圍をどう云ふ風に捲いてるかよく見分けがつかなかつた。頂上で辨當を平げ、小憩の後元の道を池迄下り、少しく東北に進んで二つの溜池に達して、其間を東南に越へ、二重と云ふに出で、瀬戸木場山の東南面を東北に、八久保の上方を通過して船山に出で、横柴折の南方の緩斜面を東に下つて、あさみばる 勘原より十數町西北の方で大道に合した。此邊には小さい炭坑が澤山あつて、原の中などに廢坑の深い堅穴等がある。一寸驚かされる事がある。勘原驛から汽車で佐世保に歸つた。

韓國嶽

霧島山の記事は度々「山岳」に出たが、多くは高千穂峰の話で、最高峰たる韓國嶽からくだけに關しては、十一年二號に明石國助氏の紀行がある丈の様に思ふ。同氏は大正五年七月の末、牧園より霧島に向はれ、韓國嶽へは榮尾湯より大浪池を経て登り、明礬湯に下られたのである。僕は明治四十四年十二月卅日にやはり牧園より榮尾湯に行き、卅一日に韓國嶽へ登つて栗野の方に下りた。期節が冬であつたし、降路が少し異つてゐるから、重複しない様に冬の韓國嶽の話をして見よう。

正月の休暇に少し冬の山に登つて見ようと佐世保を出發し、鹿兒島に遊び、卅日の朝八時半鹿兒島を出發して、十時に牧園驛に下車した。鹿兒島號横川因幡（明治卅七年六月卅日發行）を見ると、牧園驛の位置が示してないが、驛は地圖に蘆谷原と書入のある邊に置かれてある様だ。冬は温泉行の客がないと見えて、通つて居る筈のがた馬車はない。（鹿兒島號小林因幡に移る）。宿窪田、石坂、寺原より九州種馬牧場を過ぎて、午後二時半に榮尾湯に到着し、榮尾館に宿を取り、直ちに宿の二歳にせ（若者の方言）を案内として大浪池迄登つて見た。此登りの下の方は森林であるが、頂に近くなると草原となる。火口壁の内面は甚だ急で、之れに樹木が一面に密生して居る。池の面は青く澄んで甚だ静かである。時間がなくて韓國嶽迄は行かれないから、池を一周して歸ることにした。左の方へ廻り始めたが、此日は北風が吹いて居つて、吹きさらしの火口壁の上は甚だ寒い。耳や鼻は襟巻で包んで居ても切れさうに冷たい。雪もちらく降つて來た。一周し終つた時は冬の日の短かく、既に薄暗くなつて來て、榮尾湯に下り着く迄には、大分暗い森林をがさ／＼歩いた。

卅一日の午前七時に里葛原某と云ふ四十五六歳の男を案内として、榮尾湯を出發し、再び大浪池に登つて左に池を半周し、東北に向つて火口壁を下り、大浪池と韓國嶽の鞍部に出た。少しく林の中を通つて韓國嶽に登り始める。三百米突程の登りは可なり急である。此邊には一面に躑躅が生へて居る。

山岳二年三號の西内金吾氏によれば、高千穂峯に八合目邊にある躑躅は霧島躑躅ではなく、霧島躑躅は麓の方に多いと云ふことであるから、此邊のも所謂霧島ではなく、何とか別種の躑躅かも知れないが、兎に角小さな木で、冬は葉もなく、小枝のみとなつて盆栽の様である。昨日の雪で此小枝が皆白珊瑚の様になつて居て甚だ奇麗だ。花時の美觀を幾度も案内者から聞かされた。韓國嶽の火口壁頂に登り着き、尙少しく之れを右に登つて、最高點に達したのは午前十一時であつた。天氣が晴であるので展望は中々よい。火口は一面に鹿の子斑の雪で一際凄く感ぜられる。明石氏の紀行にいろ／＼詳しく述べてあるから、此所には只僕が此山の展望の特色だと感じた點丈を述べて見たい。第一には霧島の山容である。高千穂の秀嶺と其御鉢より烟の天に冲する偉觀は云はずもがな、新燃、大浪池其他大小幾多の火口が、ぽかんと口をあけて居る有様を瞰下するのは、火山模型を見るが如く、月の表面に下り立つた様な心地がする。日本に火山はすゑふんあるが、此様な地形のところはあまりない様に考へる。第二に特筆すべきは南の展望である。冬の霧島裾野は黄褐色の毛氈を一面に敷た様で、其中に所所に常磐木の森林がぼつり／＼と緑の模様を浮出しに織出して居る。加治木國府の海には秀麗なる櫻島岳が聳へ、岳を越へて彼方に又鹿兒島灣の靑波を望み、靑螺の如き開嶽が其上に夢の如く浮び出で、大隅灘の外洋は雲烟縹糊として天に連つて居る。實に海山海山と五段の變化を一望の中に收め得る此の如き景色は、之れ亦類の少ないものであると思ふ。

韓國嶽の頂上で寒さに慄へながら晝食を済し、小憩の後西北に山を下り始めた。カサ湯の少し上手に來ると硫黃を採掘した跡がある。蝦野湯で案内者を放還したが、別れる時に兼て居つた霧島の椎茸の美事であることを思ひ出して、案内者に期節になつたら送つてくれる様にたのんで置た。蝦野湯から栗野の方に木馬道がある。地圖には示してないが、道は長江川上流の南にある斜面をうねつて西に進んで居る。木馬道を歩むのは中々骨が折れる。谷のある所は横に並べてある細い棧を、輕業の

様に飛び乍らひろい歩まねばならぬ。此様な場所が甚だ澤山あつて且中々長いのもある。足を踏み外して谷へ落ちてはたまらぬから、アイスアックスを槍の様に構へて持ちながら進む。此邊は森林が可なり深く樹も又大きい。小猿が二疋鳴て枝が枝へ渡るのを見た。地圖に國境で點線の徑が十字形に交叉して居る所があるが、其邊で木馬道はなくなつて、地圖に示してある道に合する様だ。これから先は草の斜面となり、西へ益々下つて栗野岳の南面八百米突程の所を通り、地圖に栗野村と書いてある字に沿ふた點線の道をたどつて田原に下り（鹿児島號横川圖幅に移る）、牧野を経て横川驛に着たのは午後二時半であつた。此所より汽車で熊本に向つた。

阿 蘇 山

阿蘇に登つた人は随分ある様だが、高嶽や根子岳に登つた話を書たものは未だ見た事がない、多くは噴火口窺きの話である。山岳二年二號にMT生氏が明治三十九年十二月十日に朽木くちのきより阿蘇に登り、火口を見て來た話が出て居る。僕は明治卅七年四月の春休暇に阿蘇に登つて見ようと思つて、東京から熊本迄來たが、途中耶馬溪等であまり道草をしたので休暇がなくなり、目的を達せずに歸つたので、甚だ残念に思つて居つたが、此度漸く登れる機會が來たのである。而し僕は御多分に漏れず火口窺き組であつて、高嶽や根子岳には登らなかつた。明治四十五年正月に朽木温泉から、長野、湯の谷、千里ヶ濱を経て火口に達したので、道も期節も殆んどMT生氏の登山と同じであるから書かぬ事とし、只下り路に東南高森の方に下りて見たから其話丈を書く事にする（大分號宮地圖幅）。朽木で案内をたのんだが、お正月で行き手がない。或百姓のお神さんで四十位の女が本堂迄は度々登つた事があるから、荷負人夫にと雇はれてくれた。午前八時に朽木を出發して十一時に本堂に着た、本堂の茶店には冬でも人が住んで居る。辨當を食しながら本堂の堂守に高森へ越へる道を聞いて出掛けた。本堂の裏を東に登るとすぐ火口に達する。高嶽の崖には雪が鹿の子斑に積つて居て、噴烟が北風になびくので見え

隠れする。天氣續きであるので、此日は噴烟が少ないと云ふ話だ。火口の西側中央にある突起に登つて、北に火口底を窺いて見たが、烟が自分の方になびくのでよく見えない。火口より高森の方に下るには、火口の西南に地圖に人字形の窪地が示してあるが、此窪地と火口との間を東南に抜けて、火口壁の様になつ居る小丘に登り、高嶽の南麓色見より西北に此小丘に向つて登つて来る徑を求めるのであるが、此日は北風で噴烟が此方向に流れてゐるから注意せねばならなかつた。

烟の絶へ間を望んで、黒砂糖で作つた汁粉を打まいて生乾きにした様な、泥土の火口縁を東南に向つて走る。迂ること甚しい。漸く小丘に登りつくとその外側には草が生へて居て、南郷谷の方が一面に瞰下することが出来る。地圖に示してある細徑を求めたが分らない。兎に角高嶽の崖の南端にある火口の銚子口の様なギャップを東南に渡らなければならない。本堂で聞たところに依ると、此銚子口より南に向ふ谷を牛鬼谷と云ふさうだ。字は上記の如くであるかどうか判然しなかつた。此ギャップには澤山の丈なす茅薄の類が生へて居り、其上一面に噴火の灰が積つて居る。此中をがさ／＼歩くと黒い灰は、目鼻耳襟首と所嫌はす入り込んで實に苦しい。灰が硫黄を含んで居るから呼吸すると咳が盛に出る。咳をすると益々灰を吸ふ。終には咳があまり出て吐氣を催す様になつた。身體中灰だらけとなつて漸く谷を渡り、向ふの尾根に上ると細徑が見付かつた。咳をしなからこれを少しく下ると草の丈も低くなり、高嶽の蔭となるので灰もなくなつて漸く樂になつた。身體の灰を拂ひ落して尙下る。道はやがて南の方に向ひ尾根の上を傳ふ。千米突位迄下るといふ／＼細徑が分れて、道が分らなくなるが、黄褐色の草山の中に、東南の方遙か下に松の三四本生へた一叢がよく見えるから、それを目當に下れば自然と色見に出る。色見の農家の軒下には、一面に黄金色の玉蜀黍がつるしてあつて實に美麗だ。色見より尙南下して火尾峠の大道に合し（大分號高森圖幅に移る）、左折し上村山に達したのが午後三時であつた。願れば根子岳の巍峨たる山骨の中天に聳へたる左に、火尾峠の鞍部を隔てゝ高嶽

を仰ぎ、其左肩より北風になびく噴烟の立ち昂るを望む。阿蘇はその數萬の人口を養ふ廣大なる火口原と、中嶽の火口噴烟等にて世界的に有名な山となつて居るが、登山趣味の方から考へると、高嶽や根子岳に登るべきである。此邊で阿蘇を望んで特に感じたのである。上村山より東に越える村山峠を登つて、阿蘇の外輪山の外側に出で、高尾野、赤羽根、中村、祭場、藏地と平凡な火山灰の泥濘路を歩んで（大分號三田井圖幅に移る）、津留町に到着したのが夜の八時であつた。大丸屋と云ふ宿に投じた。御客は僕一人である。主人はお正月なので、其友人である祖母山の樺蟲と綽名された樺山の持主と共に、爐邊に酒を傾けてゐる。僕にも爐邊に來て家族になれと云ふ、主人夫婦と樺蟲君の手厚き歡迎を受け、晩飯を共にし乍ら祖母山そぼろさんの話わたりごとを澤山聞いた。

祖母山

昨夜宿に頼んで置た案内が朝七時に漸くやつて來た、五十四五の赭顔の大男である。案内に雇はれながら獵銃を携へ犬をつれて居る。少し氣にくはぬが、銃と獵とに對して注意を與へて出發する。津留町の大道を東に進み、道が國境を越へて急に右折する點にて大道と別れ、左折して東北に進む。上津留を経て（大分縣竹田圖幅に移る）、神原かみはらに至る。之より小徑が東南に向つて登りとなる。材木を出す木馬道を少しく登ると徑がなくなつて、下草の少ない森林の斜面を登る様になる。此邊が樺蟲君自慢の森林であらう。祖母山の尾根から越敷嶽に曳いた豊後と肥後の國境尾根の西で、千二百米突の等高線が切れて居る邊に登つて行き（又三田井圖幅に移る）、國境線の西に出て居る尾根の斜面を登り、切ると森がなくなつて、日向と肥後の國境及び日向と豊後の國境線に沿て東に走り、祖母山に達する小徑が地圖に示してあるが、其徑に合する事が出來た。此國境の尾根は草地であるから歩行容易だ。只高くなつたと見え、雪が二三寸積もつて居て可なり寒い。銀世界中の人となるのは愉快であるが、天氣がよいので日光が反射して目が痛い。暫く進むと國境の尾根が祖母山の頂上に向つて、東南に屈折

せんとする少し手前に小さな立石がある。之を左に下ると^{うばだけ}姫嶽村の^{かづばる}神原に出る事が分る。祖母山の頂上への登りは至つて樂である。丁度十二時に頂上に達した。小さな石の社と二三の小さな石碑様のもがあるきりである。頂上の東面は一帶の崖の様であるが、樹木が繁茂して居てよく見えない。尾平の谷は可なり深く、且つ一面の森林である。展望は豫期して居た程でもない。東に^{かたむき}傾山の頂が少し低く見えるが、頂上の傾て居る工合は、此方面ではよく見えない。竹田の町の方からはよく見えると云ふ話だ。南の方は同じ位の山がごちや／＼して居て面白味がない。西には阿蘇根子岳の奇峰が、平な高原性に見える其外輪山の上に、ぎざ／＼の頭を出して居る。只北望丈は可なり雄大で、丘陵起伏する竹田の低地を距て、九州第一の高峰久住山及大船山が、二つのドームの様に嚴然と聳へ、茶褐色の裾を長く引て居るのが望まれる。

頂上の雪の中で立ながら辨當を平げる。案内の赭顔の大男が寒いと云ふて慄へ出し、早く下山しようど催促する。見掛けによらぬ弱い男だ。犬も空腹だと見えて慄へて居る。辨當を少し分けてやると漸く元氣づいた。登つて來た道を立石迄戻り、これから豊後肥後の國境線の東に沿ふて、緩木山のすぐ東にある小川の合流點で終つて居る尾根を北に下るのである。徑と云ふものはないが、森林の下草のない斜面を下るのであるから、急ではあるが困難はない。小川の合流點より細徑がある。之れより川に沿ふて畑に出で、^{うばだけ}姫嶽神社の石段を左に見て、神原に下りたのが午後の三時であつた。案内者を放還し、神原川に添ひ、長小野、猿口、吉田、玉來を経て、竹田に着たのが、夜の八時で、増田屋と云ふに宿つた。長小野、竹田近邊には、清麗なる小川が勢よく流れて居る。阿蘇外輪山東斜面の水であるが、温泉岳の大野木場邊と能く似てゐるのは、何か火山の地質構造に關係があるものであらう。翌日はがた馬車で大分に出る豫定であつたが、お正月で宿屋が寢坊した／＼め馬車に乗りそこなつた。焼半分で十一里の平地を大分迄歩いたが、防寒具のつまつたリュックサックは肩にめり込み、役

をしなかつたアイスアックスが邪魔になつて甚だ閉口した。大分より汽車にて別府に出て、米屋で連日の疲勞と阿蘇の灰を洗ひ落し、温泉に浸つて居ると由布と鶴見に登るのが面倒になつて來た。正月の休暇も既になくなつた事であるから、由布鶴見はお止めにして、其儘佐世保に歸つた。

御前嶽

暫く登らなかつたので少し病氣が起つて來た、何處此處ささがした末、睨んだのが御前嶽と英彦山である。明治四十五年五月廿三日の夜半佐世保を出發し、廿四日早朝羽犬塚驛に下車した（熊本號久留米圖幅）。がた馬車で福島、山内、本分を過ぎ、黒木にて馬車を捨て、矢部川の上流に溯る。當時は矢部川金鑛の風説が盛んな時であつたから、行人は僕の服裝から見て、金鑛探検ですかなど度々尋ねる。木屋原を過ぎて寄平邊に行く、山が川に迫つて來る。大淵、桑鶴と過ぎ（熊本號豆田圖幅）、尙東に進むとやがて筑後耶馬溪の稱ある日向神岩の奇勝に出る。大道と別れ川を渡つて、奥日向神岩の方に入つて見る。此方は水がないからあまりよくない。少しく奥に進むと山が又平凡になるので、元の道に戻つてやはり矢部川に沿ふて溯る（熊本號八方嶽圖幅に移る）。笹又邊で川は又平凡になる。中村にて道を左に取り、御側川に沿ふて東北に溯り、女鹿野を過て（熊本號豆田圖幅に移る）下御側に達し、急坂を上つて良成親王の御墓に詣で、下御側で一泊した。

翌朝七時に下御側を出發し、御側川に沿ふて溯り、左より來る三つ目の澤を入り、五百米突程も登ると御前嶽の頂上に達した、午前八時半である。頂上には數坪の平地があつて、小さな木の祠があり、鐵で打た鎌槍の様なものが二つ三つ奉納してある。展望は廣いが、山が高くないのであまり遠方は見えない。釋迦嶽は東にすぐ手に取る位に見えて、頂は此所より少し高い。南の方は同じ位の山が澤山あつて、高い岡が続いて居る様に見える。只噴烟によつて阿蘇の存在が認められる位だ。東南には久住のドームが一際高い。北の方には英彦山を望むことが出来る。小憩の後北の方高瀬川の谷に下

らうと思つて徑を求めた。始め釋迦嶽につゞく尾根を東に下つた、可なり行つても徑は依然として東に向ひしかもあり下らぬから其誤なるを知つて引返し、尙よく調べるゝ御前嶽の頂上より、此尾根に少し下るとすぐに北の方に折れて下る小徑があるのを發見した。之を下ると地圖にある通りの地形を通過するので、其正しきを知つた。即ち東北を指して小さな尾根を一つ越すと、徑は益下つて遂に田代に出た。それより出野に下り、高瀬川の沿岸を傳つて、柚木、松金、荒平を経て隈に出た。此沿岸は矢部川沿岸より、遙に谷川らしくて心地がよい。隈は明治卅七年の四月、筑後川を舟で下つた時、岸の柳の糸が縁に蒨えてゐる下より、朝霧こめた川面に舟を出した町であつて、晝の様な感じを持つて居た所であつたが、此日通つて見るとそれ程でもなく、却て當時の美しき思出でを打毀した様で、惜い様に思つた。前に宿つた事のある豆田町の松榮館と云ふのに一泊した。明日は英彦山に登るつもりである。

英彦山

英彦山えひこさんは九州の名山であるから、山嶽にも既に記事が澤山ある様だ。九年一號には古家實三氏が、十月初旬耶馬溪の守實から登られた記事があり、三年一號には手島漂泊氏が、豆田より嶽滅鬼がめき峠を越て登られた記事がある。僕の登つた道も手島氏の登路と全く同一であるから書かぬ事にする。但し僕は前日靴の具合で足を少しいためた爲、藤山邊迄人力車に乗ることにした（小倉號吉井圖幅）。此道は耶馬溪から大石峠を越へて、豆田に來た時に通つた事のある道で、知つて居たから車に乗つたが、車夫は藤山よりまだ先の方迄車で行けると云ふので、どうく嶽滅鬼峠のすぐ下の中山迄人力車で行つた。尤も藤山から先は可なり尻の跳上る道であつた。英彦山での僕の感じを云ふて見ると、山らしい感のするのは、嶽滅鬼峠を越してから彦山の登りにかゝる迄の間にある森林帶一寸の間丈で、英彦山自身は名山で待期が大きかつたせいかも知れないが、思つたより面白味のない山で、展望も左程で

ない。唯だ思つたより大きくて立派であつたのは、頂上の（三角點のある最高點とは別の峯になつて居て少し低い）英彦山神社と彦山町の奉幣殿であつた（小倉號後藤寺圖幅に移る）。僕は彦山町から北に今川に沿ふて油須原驛に出で、汽車で行橋を経て佐世保に歸つたが、彦山町から油須原驛迄の道は、變化がなく長くて可なり飽きた。

市 房 山

球磨川の奥に隠れて居る此山に登つて見たならば、日向の山地や、有名な五家の莊地方の地形を窺ふ事は出来るだらうと思つて、大正二年四月廿九日の夕刻佐世保を出發し、卅日の朝六時半に人吉驛に下車した（八代號人吉圖幅）。朝早過ぎるので、多良木行のがた馬車はまだ出ない。球磨川に架した大橋を渡つて人吉の城跡を左に見、爪先上りに蟹作まで來ると後からがた馬車が追付いて來たので、之れに乗つて無田原、清尾、五本松と走る。山間の平野を貫く大道で、兩側には巨大なる杉の並木があつて、霧に誘はれて軽い杉の香のする程に、具合よく濕氣を持つた空氣が實に心地よい。堀角、築地を過て多良木に着き、馬車を捨て、町を東北に進む。田舎の町にしては清潔で道路も廣い。此所より植木迄の間にある杉並木は特に立派で、亭々雲を摩し、日光の杉街道を行く様な心地がする。中里で大道から左に下つて球磨川を渡る。川も此邊に來ると細くなつて居る。橋が落ちて居るので船で渡る。向ふ岸の里防から山の裾を東北に進んで、岩野、高瀬と過ぎ（延岡號村所圖幅）、幸野邊に來ると川は谷川の相を備へてくる。五家の莊へ入る道の下江代の下で、球磨川と湯山川の落合近く架した橋を渡つて球磨川と別れ、湯山川に沿ふて行くと、暫くにして湯山村に着く。江並旅館と云ふが村第一のホテルである。此地には地圖に温泉の記號があるから、もつとよい温泉宿でもあるかと思つて、雨が降つて來たにも拘らず村を一巡して見たが、温泉とは名のみで、とてもは入れさうにもないから、元の江並旅館に宿ることにした。お客は勿論僕一人である。雨が烈しく降り出して來たので悲觀せざる得な

い。

翌五月一日も強い雨だ。空しく天を睨んで居ると午前十一時頃になつて、漸く晴れさうになつて來た。急に支度をし、案内を雇つて宿を出た。村の學校の先から右に小徑を下つて川を渡り、裾野の様な緩斜面を東北に向つて登る。丁度地圖に水上村とある水と上との間を通つて居る點線で示した徑である。可なり登つて湯山村が下に見える様になると、徑は少しく下つて、小川に架した丸木橋を渡る。それより道は東に向ひ、森林の中を穿つて急に登る様になる。湯山より一時間半程で市房神社に達した。可なり大きな結構で、拜殿は荒廢して居たが、本殿は近頃改築したものと思えて新しいものであつた。小憩して後、本殿のすぐ後の横より、徑の分らない森林中を登る。これより七百米突許りの登りは甚だ急で、手と足を働かす必要がある。生憎霧が深いので何も見えない。森の下草は多くはないが、雨上りであるから全身濡鼠の如くになつた。頂上に近づくに傾斜は少し緩くなつて來て、大きな木が少なくなり、草が多くなつて來る。神社より一時間半許りで遂に頂上の三角點に達した。頂上は東北より東南に細長くなつて居て、社の様なものは見當らない。何しろ霧が深くて數間先は見えないのだからよく分らぬ。全く霧を見に來た様なものだ。時間がないから小憩の後登つて來た道を下り始めた。此度は手が使へないから足のがくがぐる事甚しい。おまけによく迂るので閉口した。神社から下の緩斜面になつてからはごん／＼走り出した。裾野の様な原に來た時は、夕陽が雲間に洩れて、緑の原の露に映じて實に美しかつた。夕六時に湯山村に歸り着た。今夜も江並木賃ホテルに宿るのは閉口だから、明るい中に少しでも下らうと思つて、昨日來た道を二里半許り走つて（人吉圖幅に移る）、岩野の西旅館と云ふに投じた、江並ホテルよりは少しでした。

翌日朝六時半岩野を出發し、此度は球磨川の北岸に沿て下つた。市房はまだ霧で見えなかつたが、球磨川の百太郎堰に來た時、漸く其雄姿を雲表に現はした。乗鞍の様な形をして青く見える。昨日は

御若勞様と云はぬ許である。残念ながら後振返り見つゝ茂原に出で、南に折れ川を渡つて再び多良木に出た。がた馬車に乗つて人吉に着たのは午前十一時半である。

人吉の西半里程の所に林温泉と云ふのがある（八代號佐敷圖幅）地圖に球磨川の岸に湯本としてあるのがそれである。翌嵐樓と云ふ温泉宿がよい、浴場も立派で中々居心地がよい。こゝから球磨川下りも出来るし、香魚の候には川狩も面白いと云ふ事だ。對岸の少し山奥に鹿目八重瀧と云ふのがある。岩の有様が一風變つた、類の少ないもので、遊覽の價値があると思つたが、僕は行かなかつた。翌日は、球磨川を下つて（八代號日奈久圖幅に移る）破木より西に入り、大門、瀬野、田崎を通つて櫛山を越へ、日奈久温泉に出て、金波樓で温泉に浸り、連日の勞を洗ひ流した。

之れで僕の九州の山話はおしまひとする。國見嶽、烏帽子嶽、西嶽、正觀嶽、弓張嶽、愛宕山等にも登つて見たが、是等は皆佐世保要塞地帯に屬する山々であるから書かぬ事とする。終りに九州の山に就ての僕の感想を一寸述べて見よう。明石國助氏の言はれた如く、九州は火山を見るに宜しいとは僕も甚だ同感である。登つて面白い山は皆火山である。又同氏に榮尾湯の主人が話した様に、九州の山は草木の繁茂蛇蝮類の害等が行路難の最たるもので、此ために小さな山でも思はざる失敗をやる事がある。甲斐信濃邊の山々の様な地形上の行路難は甚だ少ない様だ。隨て險絶とか威嚇とか云ふ様な恐ろしい文字のはいつた痛快性を帯びた紀行等は、書かうと思つてもあまり書けない。僕は九州の山には夏は登るべきでないと思ふ、寒い時の方が登山趣味の方から云へばたしかに面白いと思ふ。僕は前記の山々に皆靴で登つた、而して何等の不都合を感じなかつた。冬でも少しの防寒具さへ準備すればよい、雪道具の如きは不要であらうと思ふが、是等は皆貧弱なる僕の經驗から出た感想に過ぎないのだから、あまり常にはならんものと御承知を願ひたい。（終）

◎丹澤山塊 戸澤、藤島

三八

丹澤山塊

戸澤英一
藤島敏男

一
武藏野の雜木林に木枯が吹き、秩父の連山に幾條かの白い縞が入り、富士が雪の厚化粧をしてくる。丹澤一帯の山塊は、一際人の眼をひくやうになる。それが郊野の彷徨者にとつては、一種云ふ可からざる懷し味となり、其懷しきは臚て抑え難き登山の念に變つて行く。冬といふ恐しい手に押しつけられながらも「登り度いな」と思つたことは、一再ではなかつた。殊に菜の花が匂ふ頃、相州大山の頂上に立つて、すぐ眼の前に其の黒い大きな姿を眺めた時などは、翌日にでもと思つたが、夫も果すことが出來ずに今日迄過ぎて仕舞つた。ところが、或る山好きの會合があつた夜、偶然の事から自分等二人の間に、丹澤山塊踏破の相談が成立して、遂に蛭ヶ岳（一六七三米突）、丹澤山（一五六七米突）、塔ヶ岳（一四九一米突）の三山に草鞋のあとをつけることが出來て、茲に年來の宿望が達せられたのである。

愈々決行ときまつた時は、梅澤さんの様に、中央線で上野原迄行き、青根村から登つて、相州秦野へ下る豫定であつたのが、どうせ行くならば、玄倉川（いづみ）の溪谷を見たいといふ慾が出てきて、急に日程變更となつた。丁度幸にも、玄倉村の奥の熊木に製板所があると、友人から聞いたので、夫を目的にして出掛けることにした。さて困つた事は熊木なる名稱は、參謀本部の地圖は勿論、高野氏の「塔ヶ岳」の紀行（「山岳」第一年第一號所載）にも無い。照會するのも面倒なので、行けば判るだらう位で、大正七年五月十一日午前八時四十五分の汽車は、不安と希望とに満ちた自分等二人を乗せて帝都を後に

した。

昨夜まで悲観の種であつた雨は、からりと晴れて初夏の美しい陽光が、珊々として樹々の若葉にそそいでゐる。紺碧の空には名残りの白い雲が流れてゐるが、心配になる程でもない。大山あたりの山が鼠色の姿を見せて遠い野を限つてゐる。露營の必要でもありはせぬかと懸念して、携帶して來た天幕と、飯盒、褌衣等で一杯になつたリュックサックとが、近づきつゝある夏の山旅に想像を走らせて、心臓が頻りとをどつてくる。海を越へて天城が見え、箱根火山群が車窓に隱見して、間もなく汽車は山北驛に着いた。

どつしりと重い荷物を引きづるやうにして、驛前の荒物屋に入り、草鞋の紐を結びながら、早速製板所の話を持ち出したが、薩張り要領を得ない。己を得ないので玄倉までいも人夫を雇はうとしたが、誰も行き手がなないので、主婦の言葉に従つて、村へ歸へる駄馬を頼むことにして此處を出た。もう本當に旅の心持になる。丹澤附近の村から炭を積んでくる馬車や駄馬の集る炭間屋迄は、可なりの道程があつた。馬子の一人に、玄倉歸りの馬があるかと訊ねてみたが、まだ今日は來ないと云ふ。馬が無ければ人に倚るより他に仕様がないので、色々交渉を重ねたが應ずる者はない。愈々無ければ荷は自分達が負ふて行くばかりと決心して、例の熊木の事を聞いて見る。大勢の中には誰か一人位は知つてゐさうなものだが、知つた者はない。愚圖くしてゐる中には用捨なく時間は過ぎて、天幕は交代に持つことに極め、坦々砥の如き道を神繩村へ向つた時は既に十二時を過ぎること二十分。最初は山北から直ちに山越しに市間、高杉を経て、玄倉村へ出る豫定であつた所、案内者がなくては道が判り悪い事や、荷を持つては却つて損だと云ふ事などで、急がば廻れと正道をどつて、先づ神繩村へと發足したのである。

薰風が快く頬を撫でゝすぎる。足は軽々と新緑の裡を行く。平常は夜汽車で素通りする酒匂川の風

物も、今日は殊のほか目に目について、脚下の溪流も四圍の峯巒も、生々として動いてゐる。箱根の端山でさへ此の通りだから、丹澤山塊の青葉若葉はどんなに美事であらうと、肌が汗ばむで來たのも知らずにひたすら道を急ぐ。鐵道線路から離れて、道を北にこり河内川を左手にする。十分毎に交代する天幕入の袋が持ち悪いので、早く其の苦痛から脱れたい爲に、僅か十分の時間も随分長いものに思はれた。空の藍色と若葉の綠色とを涵して、靜かに囁いてゐる川には、幾つかの吊橋がかゝつてゐる。奔湍の連續恰かも黒部川に架つてゐる吊橋を回想せしめて、去年の劍行の旅の様を互に話し合つた。神繩村の家々が見え、炭を積んだ駄馬が路傍に繋がれて、道は漸く勾配をあらはしてくる。神繩村迄は可なり立派な道が通じ、まだ木の香の残つてゐる宿屋があつたりなぞして、さして不便な所でもないらしい。石の出た小さな坂の途中で子供に玄倉への道を尋ねる。右すれば玄倉村、左を走れば中川村への路の岐れる所で、一汗拭ふた自分等は、瘦せた桑畑と貧しい杉木立の中を先へ先へと急ぐ。途中印絆天の三人づれと玄倉川の奥の話をしたが、土地の者ではない彼等のことゝて、唯だ玄倉の奥に安藤製材所といふのがあつて、誰れでも泊めてくれるとの事だけ判つたに過ぎない。そして彼等も其處へ行きつゝあるのであつた。艶の無いひからびた様な玄倉の村は、寒村らしい趣を呈して、茅葺きの家は階段狀に並んで、夫に稻田と畑とを交へてゐる。廐の隣りで旅商人が小間物をひろげてゐる。村を過ぎて山腹につけられた細徑を辿る。之は寄村への通路で、細いながらも迷ふ懼れはない。清水が所々に湧き、自分等の渴した咽喉を濕すに都合よく、傾斜も至つて緩かである。いつしか西に傾きかけた太陽の光を浴びて、雪を冠つた富士が畏しいまでに崇高雄偉な山容を雲間にあらはし、愛鷹山のすんなりとした空線が浮彫の様に大空を刻んでゐる。カラスアゲハにジャカウアゲハが交つて、茂みの中を翩々として舞つてゐる。山神さんじん迄は仲々困難な山道だと前の三人づれが云ふので、荷物さへなければ駆けあがつて仕舞ふと答へてやると、妙な顔して黙つて木蔭に休んだ。山神峠の青空が木の間にチ

ラ／＼する頃は、黄昏近い光がそこなく漂ふて來た。さら／＼と鳴る葉摺れの音も何とはなしに寂寥を帯びてゐる。峠の兩側には山神と水神との小さな祠が二つ立つてゐる。

行く手の空に蛭ヶ嶽のとりすました様な圓い峰頭が、茶色になりかけた夕陽を浴びて、劃然と浮び出てゐる、道は山腹を迂曲しながら下つて行く。伐り倒された木の間に炭焼小屋が造られて、紫色の細烟が昇つてゐる。無言の儘で歩み續けてゐるうちに、やがて再び玄倉川の流に出た。深く重り合つた此の溪谷の森林は、如何にも立派な幽邃なものである。薬研の底から仰ぎ見る様な狭い空と、日本アルプスの如き岩と水とは、これが東京近傍の山水であるとはどうしても想像がつかない。玄倉の谷はよいと兼ねて耳にしてはゐたが、斯くまで山らしい氣分の豊かに出てゐる所とは考へなかつた。名も知らぬ鳴禽が梢から梢へと囀づり、河鹿の銀鈴の様な聲が床しく靜かに聞えてくる。道が河原に出た所が即ち逆木で、地圖では道の印の終つてゐる所にあたつてゐるらしい。

川を渡らずに五六丁遡ると諸士平（諸平とも略稱す）に出る、安藤製板所の新しい小舎が散在して、夕の烟がゆるやかに昇つてゐる。木屑が道を埋めて歩くさふ／＼する。水車がゴト／＼と疲れ切つた音をたて、水は勢よく流れてゐる。時計の針は六時十五分を指してゐる。ほんどうの夕暮になつた。汽車の辨當だけの事とて非常に空腹を覺えたので、事務所に入つて夕食の馳走になる。然し今日の目的地たる熊木が未だに判然としないので、少しも落着かない。事務所の人の話によると、猶ほ上流（さかき）に云ふ製板所があるが、夫ではないかと云ふことだ。其處迄はまだ可なりの里程もあるし、もう夜になつたから、一晚泊つたらどうかと親切に勧められたが、明日の事が不安なので、五寸位に伸びた杉の苗圃に圍まれた官宅（御料林の役人の休憩所）を尋ねて、詳しい事を確かめ、そこまで云ふ爺さんと一緒に、とぼ／＼と出掛けた。夜は凡てのものを包んで、寂しい水の音のみが活動をつ

諸士平から北に出てゐる湧津澤を渡り、再び本谷の獨木橋をすぎ、官宅からの使の者を返へして、銀砂子の様な星夜を、かすかな提灯の光をたよりにして無意識に歩いた。晝間であつたら、さぞ美しいであらうと思はれる玄倉川の谷の左岸を四五十分行くと、螢の光の様に赤い灯がちら／＼して來た。あれこそ熊木に違ひないと、今迄の不安な心の雲が一時に消えて、晴々した氣持になつて足も自づと早くなり、急ぐまゝに石に躓きながら二三回川を渡つた。教へられた事務所には、明るく洋燈がともされてゐる。元締の山本琴三郎氏に面會し、丹澤山塊登山の希望を話して、一夜の宿を乞ふた所、すぐさま快諾せられたので草鞋の紐を解いた。炉邊に招せられて、「こんなに遅くまでお歩きになつて、随分御空腹のことでせう」と食膳をすゝめられた。自分等はすゝめられるまゝに第二回の夕食をとつた。窓外に雨のやうな水聲をきゝながら、洋燈の下で爐にあたりつゝ、丹澤山塊に就いて四方山の話に耳を傾けてゐると、いつしか夜は深々と更けて十一時に近かつた。降つて來さうな無數の青い星赤い星は、明日の快晴を語つてゐる。浴後の清々しい身軀を厚い蒲團にくるまると、ブーンとよい香が鼻をうつ。ふと見ると、土間に生椎茸が山の様に積まれてゐる。

熊木といふ所は、玄倉村との交渉は極めて稀で、却つて寄村との關係が深く、製板所の駄馬は直接に毎日午後二時此處を出て、村へ薪炭を運ぶと云ふことである。夫で今は寄村の製炭商會の經營にかゝり、大正二年から開られた數棟の製板小舎では、絶えず製板機が動いてゐる。二萬分の一塔岳圖幅で、玄倉川が塔岳と蛭岳の兩方に分かれるところ（即ち熊木澤と箒杉澤の合流點）に、二等邊三角形の洲がある所が夫である。此處は丹澤山塊即ち蛭岳、丹澤山、塔岳へ登山するのに唯一の、而かも理想的の根據地である。

二

枕に近く溪聲に目ざめて、雨戸を繰ると、まばゆい朝の光が清澄な空氣と共に、水のやうに流れ込

んでくる。鶯が二聲三聲鳴いた。「上天氣だ」と直覺した時の喜悅は、殊に山へ登る者にとつては、たとへやうもなく大きい。感激の念に満ちた胸に、滴るやうな嵐氣を呼吸しつゝ、若葉に埋もれた峰の彼方に聳えてゐる蛭岳——丹澤山塊の主峰——の圓頂を仰いだ。「素敵な天氣だ。早くあの頂上に行つて見度い」と話したのは、白い花をつけたヤシヤビシヤクの盆栽の置かれてある洗面所であつた。

何時もながら旅の朝は食が進まないのを無理にたべて、仕度にかゝる。遅くも夕方迄には歸つて來られるといふので、辨當一つの輕装で、山本氏の世話して呉れた甚藏といふ獵師を案内に、熊本の事務所を出發したのが丁度午前七時であつた。

自分達は所謂「ハンギ」道と云つて、材木運搬用に設けられた枕木ばかりの道に惱まされながら、熊木澤(熊木から蛭ヶ岳への澤)を傳ふ。甚藏のつれた二匹の犬は、嬉しげに先に立つて道案内をする。三十分もしてから愈々澤に入つて、一直線に蛭の頂上を目がけて登つた。ごぼ／＼と咽ぶ澤の私語を聞いてゐる間は、傾斜もゆるく足の踏場も悪くはなかつたが、谷が段々狭ばめられ、岩をくゞる水の音も微すかになるにつれて、崩石が不安定になり、勾配も著しく増してくる。青白い肌の山毛櫨の太木に混つて豆櫻の小さな花がしのびやかに笑ひ、所々に牡丹色の杜鵑花が鮮かに咲匂つてゐる。知更鳥の朗かな囀りと夢のやうな郭公の鳴き聲とが、山を如何にも深いものとした。澤は幾つかに別れて益々小さくなつて行くが、自分等は唯だ左へ左へと登る。右へ行くと澤があつて困難だといふことである。案内者に之から上には孫佛(そぶつ)さんまで水がないと注意されてから、大分時間も経過したが、未だ頂上にはならなかつた。青い蘚苔の蒸した岩の上にコイハザクラの紅花が點々として麗しさを誇つてゐる。そつと手を伸ばして二三株ノートの間に挟んだ。秋から冬にかけての獵の話を引きながら、三十五度位の空澤を這ふやうにして登る。振り返へると製板所の新しい家根と、夫を圍む端山とが眼に映ずる。岩に嚙り付き、木の根に支へられて、ひとしきり喘ぎ、熊木から二時間を費して蛭ヶ岳の頂上に辿り

着いた。

◎丹澤山塊 戸澤、藤島

四四

一面に小さな草が生えて、エンレイサウやキクザキイチリンサウが花を開き、矮小なブナの本が蔽ひかぶさつてゐる。かうした中に一六七三米突の三角點の標石が、宛も取り残されたやうに、しょんぼりと立つてゐる。そして其處には青根からの登山道が來てゐる。真正面に照りつける日光は熱いが、足を投げ出して横になる。蛭ヶ岳の頂は丹澤山や塔岳に比較して、すつと狭く、眺望も一番勝れてゐる。然し生憎く薄い雲に妨げられて、富士や南アルプスの大觀に接することが出來ず、遺憾至極ではあつたが、箱根連山や附近の山々は、立派に見ることが出來た。丹澤といふと必ず天氣が悪くなるといふのに、自分等は例外的の恩恵に浴したわけである。山中湖は見えないかと訊ねた所、丹澤へ行く途中でなくては駄目だと答へた。不動の峰（約一六〇〇米の無名の一峰）が間近に大きく、丹澤山の平たい頭が左に、塔岳の尖頂が右に、夫を連ねる山稜は大きな弧線を描いて行手の遠いのを思はせた。羚羊を見付けて追掛けて行つたコマ（犬の名）も歸へつて來たので、休息三十分にして尾根傳ひに丹澤に向つた。

流石に山はまだ春である。夏の山登りに經驗する壓迫を感じる様な草氣もなければ、丈に餘るス、キの障礙物も無い。山稜を上下して蜿蜒と走つてゐる細徑（切明と云ふ程のものに非ず）は、明瞭に認められて、間違ひたくとも如何ともする事が出來ない。ひどいと聞いて恐れてゐた笹もさして多くはなく、苦しめられずに掻き分けて進む事を得た。隆起部に立つて前途を見渡したとき、山の色が黒味を帯びてゐない所は、きつと笹の部分か、若しくはス、キの枯れた所である。霞のやうな雲が湧いてゐる爲に、北側の展望が利かない。三つ程隆起を越えろと、不動ノ峰である。此處にも山毛櫨が勢力を占めてゐる。蛭岳からは可なり遠方に見えた丹澤の頭も、大分近くなつて、尾根も大體に於て下り氣味である。ちりちりと照りつける太陽の爲めに、襟のまはりには汗が光つてゐる。秋のまゝの枯

葉の間から、可憐なキクザキイチリンサウの薄紫の花が咲き、アヅマイチゲも此の山塊を通じて見られた花の一つであつた。叡山董も所々に切込の深い葉をひろげてゐた。

五月十五日は孫佛様の縁日で、多くの參詣人が塔岳の頂上集り、水が一杯二錢で賣れると云ふ話をきいた自分等は、今日あたり人に遇ひはせぬかと話してゐると、何處かで人聲がする氣配がある。其時自分等は既に、不動ノ峰から丹澤山の領域にかゝつてゐた。木立とスズ(笹の一種)をきり抜けて、ひよつくりと丹澤の絶巔に出ると、洋服を着けた登山者の一團がある。矢張り山で人に遇ふと云ふ特有の懐しさと親しみの情に驅られて、挨拶も忽々に、名刺の交換を行ひ、お互に好きな山の話に耽る。この人々は横濱の山岳會員北澤基幸、加山龍之助諸氏の一行で、朝の二時に秦野から先づ塔へ、更に丹澤に來られた所であつた。小學校時代から頭に泌み込んでゐた丹澤山に、かうして登つて見ると、一種の幻滅の悲哀を覺えるのを禁じられぬ。山がつまらないからではない、只ださうした感情になるのであつた。南北に廣い頂上は却つて四方の眺望を邪魔してゐる。夏にでもなつたならばス、キが高くなつて何物も見えなくなりはせぬかとあやぶまれる。一時見えた富士もかくれ、箱根も姿を隠し、僅かに塔岳と玄倉川の谷を覗くばかりである。自分等は一足先に失禮して、更に尾根傳ひに塔ヶ岳へ。所々に大な木が伐られた儘に道をふさいでゐる。之は駒鳥捕が罔にする仕掛である。此のあたりでは鳴き聲の確かな駒鳥は、一羽七十錢位の相場だといふ事である。金字塔形の大山には、白い雲が二三條たなびいてゐる。笹の中に隠れた倒木に惱まされながらも、一氣に塔ヶ岳に着く。霧が蓬々と湧きあがつて、天も地も屢々白濛々と化する。日光を遮られた山上の風は冷やりとする。箱庭然とした頂上には、北澤氏一行中の某氏が居られたので、暫らく霧の晴れ間を待ち乍ら、日本アルプスの話に花が咲く。時には霧が破れて、馬入川が銀蛇と輝くことはあつたが、執拗な雲は遂に去るべくもないので、水の得られる所まで下つて、晝の辨當を開いた。其處は頂上から四五丁熊木側によつた所で、苔

清水が樋を通つて落ちてゐる。一杯二錢の清水が之であらう。其藏は「孫佛様の御籠場」と云つてゐたが、成る程傍に倒壊した小舎らしいものがあつた。孫佛様といふのは二三丁離れた所に在る五丈位の岩で、上には阿彌陀様の石像が安置されてゐる。

充分に休んだ自分等は、杜鵑花の散りかゝるはいきすず常杉澤の尾根を降る。可なり急峻な坂路のことゝて膝關節が痛んでくる。木の間を通して、常杉澤と幾棟かの製板所の建物が見られた。落葉を踏む音に驚かされてか、櫻鳥が突然不快な聲をあげて飛びたつた後は、土の崩れる音と淙々たる流の響とが、却つて更に山の静寂を増すばかりであつた。鍋割澤との合流點に出てからは、木挽小舎があらはれたり、材木を積んだトロッを押す夫婦者に會つたりする。顧ると塔岳の方の峰は高く高く屏風のやうに立つてゐる。熊木の製板所の鋸のうめきを聞いたのが三時であつた。製板所の人々は自分等三人の歸へのりの早いのに驚いてゐた。自分等もこれほど容易に登つて來られようとは想像することさへ出来なかつたのであつた。

縁に腰掛けて熱い茶をすゝつてゐると、たつた今丹澤の山々を廻つて來たことが夢の様にしか思へない。久戀の丹澤山塊を踏破した喜びは、標高の大きさに比して小さなものではない。併しそれが意外に樂々と遂行することの出來たのは、天幕や飯盒の手前はづかしいやうな氣もする。まだ夕暮迄には大分時間があるので、松田迄出ることに極め、厚く禮をして快い印象の熊木を後にした。其藏は峠まで荷を持つて送つてくれた。谷を三四丁上流に溯つて道は南へと折れる。之は地圖上の徑と少しく相違してゐて、「一一〇五」の數字のある隆起の西側へ登り、峠でおほはれたなだらかな山腹を迂曲して行くのである。躑躅をつけた熊木通ひの馬に一度逢つたきり、稻郷迄人の影を見ない。夕の空には函嶺の連山が淡く浮んでゐる。桑畑などを過ぎ、紫雲英の咲いた稻田の中を横切つて道は峽の間に入る。黒い大きな夜の幔はいつしか垂れて、黙々として辿る自分達の背後の空には、上弦の月が力なげ

に光を投げてゐる。歩み厭きたので自然とはや汽笛は聞えはせぬかと耳を敬てるが、飽くまで沈黙の静けさを守つた夜は、微風のそよ音さへしない。八時になつて漸く人家の灯を見た時はほつと太息をついた。

三十分程して自分等は松田の町へ入つて行つた。

三

丹澤山塊に關する地圖は、陸地測量部五萬分之一「松田總領圖幅」一枚でよろしい。二萬分之一「中川村」「蛭岳」「塔岳」があれば更に結構であるが、地名や澤の名は出てゐない。自分等が費した時間は次の通りであるが、色々重い荷があつたので可なり餘分な時間を費した様に思はれる。尤も山を上した時は空身であつた。

(第一日) 山北驛出發十二時二十分。神繩村一時四十五分。玄倉村三時十五分。山神峠五時五分。諸士平六時十五分。同所發七時二十分。熊木八時三十分。

(第二日) 熊木發七時五分。蛭岳九時十分(休息二十五分)。不動峰十時十五分。丹澤山十一時(三十分休憩)。塔ヶ岳十二時半。孫佛籠堂發二時。熊木歸着三時。同所發四時。松田總領八時三十分。

丹澤と云ふ名は可なり廣く世の中に知られてゐるが、山その物に付いては、未だ餘り知られてゐないやうである。丹澤山塊へ登つたと云ふ様な話は随分稀であるらしい。況んや夫に關する紀行をや。日本山岳志にも塔ヶ岳(或は孫佛山、尊佛山)と蛭ヶ岳とは、五六行位づゝ載つてゐるが、丹澤山塊なる名稱の起源である丹澤山は出てゐない。また「山岳」に載つてゐる記事でも僅かに、第一年第一號に高野氏の「塔岳」第八年第三號に武田博士の「丹澤山」第十一年第三號に梅澤氏の「相州蛭岳」の三文があるに過ぎない。そして高野氏は玄倉方面から、武田博士は秦野から、梅澤氏は青根村から夫々登山せられてゐる。今度自分等の選らんだ玄倉村方面に關しては、「塔ヶ岳」の記事中諸士平迄は大體

變りがない様である。只逆木から一回の徒歩もせず諸士平へ行かれる。湧津澤から熊木迄は約半里。諸士平に安藤製板所があつて頼めば宿泊が出来る。逆木から熊木までの玄倉川の谷は、幽邃で山らしい趣を呈してゐるが、大分伐採してゐるので、荒れはせぬかと心配される。殊に熊木附近では山の肌が露らはれてゐて、其の後に植林した杉や檜などは赤く立枯れしてゐた。熊木の事は前に書いた通りであるが、案内者は矢張山本甚藏が適當であらう。年は五十三とか。平生は製板所の仕事をしておるのであるから、賃金は一圓二十錢であつた。おとなしい忠實な好案内者で荷も可なり擔へるし足も丈夫だ。日光へ外國人の供をして獵に出掛けた事を大分自慢してゐた。

登山の期節は三月下旬から五月下旬位迄がよい。此頃ならば草も小さく、暑さも烈しくなし、五月頃ならば滿山の若葉が美しい。併し春のことであるから、どんよりと霞んで遠望が利かぬ憾みはある。秋の紅葉もよいさうであるが、ス、キなどが大きくなつてゐて、随分歩き悪いことであらう。千五六百米の標高であるから、草いきれがしたり、草が伸びてゐたりして夏の登山は却つて苦痛の種であらう。要するに丹澤山塊は全體としてゆつたりとしてゐて、山稜の上下も少いので歩き易い。熊木澤を蛭ヶ岳迄は一寸急峻ではあるが、短い距離であるから疲れた頃には頂上に立つ事が出来る。山本氏は蛭ヶ岳を薬師岳とも云ふが、別に薬師様は無いと話された。「山嶽志」にも、「薬師岳」(別稱毘盧岳)、相模國津久井、足柄上の二郡に跨る。津久井郡鳥屋村宇宮前より四里にして其の山頂に達す。全山第三紀層より成るものゝ如し。標高四千九百七十四尺」とある。甚藏は塔ヶ岳のことを、孫佛山と呼び、塔岳なる名は大群山へ續く一峰に冠らせてゐたが、之は果して如何なるものであらうか。水は丹澤の山頂附近と塔岳とから出てゐる、蛭にしろ丹澤にしろ下り度い時は、何處からでも下ることが出来るから至極暢氣である。東京から全二日あれば充分であるし、一寸遊びに行くにしても箱根などのやうに俗化して居らず、山も深味があるので遙かに面白く、また割合に容易で、何等の仕度を要しないですむ

のである。往路は山北驛から玄倉村に出て熊木に一泊、翌朝早目に三山を登り（矢張り蛭岳を先にするが便利である）、熊木迄戻らずに、寄村から松田總領に出で、汽車で歸京するのである。知更鳥の銀線をならすやうな鳴き聲は、未だに聞えるやうな氣がする。麗はしいコイハザクテと、あらゆる緑色を配合した若葉とが強い印象となつて残つてゐる。自分等は諸君に是非此の山塊に遊ばれんことをお勧めして止まない。猶ほ自分等の計畫遂行に對して尠からざる御援助に預つた熊木の山本氏に厚く御禮を申して置く。（七・五・二四）

駒岳仙丈岳及鳳凰山塊

一、出 發

柳 直 次 郎

七月十五日の午後十一時三十分には東京行急行列車に乗り込んで、名古屋驛から中央線に乗り換え、甲州日野春驛に下車したのは、明るる十六日の午後四時四十分であつた。驛には柳澤から水石春吉の弟の林八が迎ひに来てゐて呉れた。初對面ではあつたが挨拶などはそこくにして、直ぐ山の話聞く。驛前の茶店に立ち寄つて、荷物の整理が済むと柳澤を指して出發した。

驛前の廣場から間もなく赤松の木立に入り、南へ四五町下つて坂路へ出ると、此處からは駒岳山脈が真正面に見える。左方を願れば遙か群巒の上に、富士の六合目あたりから頂上までの半身の姿が、うす紫の色を帯びて、朧に夢のやうに見えてゐる。釜無川の河原に下ると渡船場がある。渡船には慈

善箱を備付けて、渡錢の代りに喜捨を請けるやうにしてある。對岸へ渡つてから、甲信往還の牧原に出で、そこから約一里程往けば、大武川の右岸柳澤村に達する、河原の灼熱した砂礫と、村道の乾き切つた砂埃の中とは、堪へがたい程暑いので、實は少々閉口したが、それでもひぐらしの鳴き盛る中を山の話に耽けりながら、別に無聊を感ずることもなく、六時には柳澤に辿り着いた。村は可なり廣いやうで、小池屋までは二三町も在つたと思ふ。

小池屋の主人は淺吉と云ふて、雜貨と旅宿とを兼業してゐる。低い二階の一室に通つて、昨日來の汗づいた衣を軽い浴衣に寛いだ。道路の向側に離家があつて、裏には小流を控え、背の高い赤松の木立が廣々と續いて、其前に植木の鉢物などを並べた空地に風呂桶を据ゑ、木の根の洗ひ臺で汗を洗ひ流す趣は、なか／＼の風流である。浴後窓に凭ると山村の夕風は流石に涼しい。夕餐えの駒岳山脈から裾山かけて靡く暮靄を眺めて、暗い洋燈の光で晚餐の膳に就いた。瓜と茄子の外に罐詰の鮭が添えてある。酒は飲まないが恐らくは頭へピンと来るものであらう、それでも空腹には大牢の味で、喫しつた頃には月の遅い夜の山々は臙になつて、空模様が多少氣懸になる、そこへ主人が林八と兄の春吉を連れて來たので、早速明日からの旅程を協議する、食糧品の買入や炊事用の鍋等の事は主人に任せ、罐詰は店に在るので自身選擇する、彼是と取集めると中々の荷嵩となるので、春吉林八の二人でもあまり輕量の事もないらしい、蒸し暑い夜は遂に驟雨となつたが、一過した後は月光鮮かに夜涼溢れて、枕頭には早や蟲の音を聴いた。

二、屏風小屋

七月十七日。午前七時出發、天氣は快晴で、駒岳の山脈には搖曳の雲もない、稻葉の露を亘る朝風に氣も足も自から軽く、大武川を渡つて横手の村を過ぎ、暫く往くと水田は盡きて、赤松林の中を通

じた廣い路を、駒岳神社の前宮に出る、社務所には老嫗が寂しく留守番をして、登山者を接待してゐるのが、何か昔の傳説の山嫗を想はしめる。自分が繪葉書を求て通信を認めてゐる間に、春吉等は老嫗と頻りに話をしてゐる。聞く耳を立てると矢張話は山の事で、東京の某が臺ヶ原から新道を開鑿し、七丈に小屋を建てる云ふが、未だ其筋の認可を得ないので着手はせぬ、しかし早晚屏風小屋は打撃を蒙るだらうと云ふのであつた。山の中でも生存上の競争は免かれぬと思つた。

是から路は前宮の左へ迂回して山路に懸る。春吉兄弟は重い荷物を脊負つて居るので、上りへかゝると身輕な自分よりは自然と後れて来る。最初はあまり二人と離れぬやうに注意して上つたが、夫からの途は別に紛らほしい所もなく、左へさへ執つて往けば間違ひないと聞たので、急ぐともなく遂に離れて了つた。深林を自拔けると路も埋む許りに熊笹が繁茂して、可なり急峻の勾配の所となる。暫く往くと伐木を運ぶ索道の下の稍平坦な廣場へ出る、此邊が笹の平と云ふのださうな。此下の谷を十四五間も下れば、其處には清冷なる湧泉があつて、晝飯には好箇の場所である、時間も十時だからさう早くもないし、殊に屏風小屋まで一滴の水もないと云ふ事だから、兎も角も此處で腰を据ゑる。自分荷物の全部は勿論、晝の辨當まで人夫に委してあるから、待合す爲に三十分餘も休憩してゐた。兩人はなか／＼登つて來ない。此折にはまだ左程空腹を感じてもゐないので、待飽きて到頭出發した。此様な場合に何故か自分は前途をあせらすにはゐられないのである。昨年も白馬登山の折に案内者と離れた爲に、白馬尻の小屋に正午から二時迄も待たれて、空腹の憂目に遇つた。案内者とは離れて歩くものでない云ふ苦い経験を、今日も亦繰返すのかと苦笑を禁じ得ない。

笹の平の登りは蜿蜒として九天に通ずる趣がある、午に近い太陽は會釋もなく眞額から照り付けて、流汗淋漓たる有様に、黒戸の木蔭が戀しいので、可なりの速度で急峻な前途を急いだ。而し此邊一帯は眼に遮る樹木が少ないだけに展望は可なり良い、中にも八ヶ岳の左右に裾を張つた姿が極めて雄大

である。近くは釜無、尾白、大武の諸川が砂白き河原を帶のやうに曳き、柳澤、臺ヶ原の人家は點々と小さく瞰下さる。

此處を登詰ると針葉樹林が現れる。是からは山稜急に狭く蹙まつて、路は數々峭立した岩壁の背梁を渡る、左右は大武尾白の深谷が鬱茂たる森林に蔽はれて、遙の底から聞ゆるは水聲か青風か。前屏風の下を右に廻つて、木の根岩角を足掛りに此岩壁を攀上る。登れば黒戸の小祠の所で途は左右に分岐し、右方は荒廢した舊路で今は通ふ人もない、其處には伐倒した木を削つて其由を書いてある。左の方本路を執つて進めば、途はさして險惡の所もなく、黒戸の右側の山腹を辿つて行く。昔は此黒戸の頂上を越えて屏風小屋へ達する途も在つたさうである。山側の平坦な途を約一時間も進み、鬱林を抜けて漸次下りとなる、駒ヶ岳一帯の山容は目睫の間に迫つて、頭上より壓するが如くに展開してゐる。屏風小屋に到着したのは午後一時三十分。

屏風小屋の所在地は、黒戸山と駒ヶ岳とを連接する低下した鞍部で、駒ヶ岳へは屏風小屋より前面に峨然壁立した屏風岩を攀ち、殆ど筍形に聳立してゐる隆起を越えるので、小屋から仰ぎ見た許りでは、取付き所も無いやうに見える。二時半頃には春吉等も來着した。小屋は昨日開いたばかりで、まだ屋根の修理などしてゐる。小屋から右方の小徑を半町程下ると、岩間から清泉が湧出してゐる。此小屋唯一の飲料水で、又此小徑は黒戸の小祠から右方に岐れ來る廢路に通ずるものであるといふ。其處には廢路の痕跡を存してゐる。

日は未だ高いが何も所作がないから、盛に焚火をして、山の話聞きながら寝轉むでゐると、いつか眠氣を催して來る。目の醒めた頃には早や夕餉の仕度が出來てゐた。夕風に誘はれた雲や霧は次第に溪谷から峰へと擴がつて、夜の幔は閉されて行くのであつた。

三、絶頂 仙水峠 北澤の小屋

七月十八日。昨夜は隙間漏る風もなく、穩かに結んだ夢も曉方の寒さに醒めて、午前四時には一同起床した、春吉等は早や朝餉の仕度にかゝる。自分は手拭を提げて、曉風の身に泌む外へ出た。晴亘つた大空は、残の星が一つ二つと消えて行く、名も知らぬ小鳥の鳴き聲が晴れた朝の快さを語つてゐる。澄渡つた山容を眺め、切るやうに冷い水で顔を洗つて、朝餉に取りかゝる。野路の味噌汁はことに匂がよかつた。一人前十五錢の小屋代を拂つて出發したのは六時である。小屋から少し降つて直ぐ屏風岩の下に出る。梯子を攀ちて屏風岩を上り、右へ岩壁を傳ひて又左へ登る。日影も漏さぬ密林の中には幾年來の落葉が腐蝕して、滑り易い足を金剛杖に支えながら進む。途は次第に急峻なる登りとなつて、鐵鎖を手繰つて懸崖に縋つて岩壁を傳ひ、左に七丈の瀑聲を聞く頃には、喬樹漸く稀疏となつて頭上が明るくなつて來た。七丈の小屋場を過れば、途は偃松の裡に通じて、眞向に登りとなる、八合目の石の鳥居は直ぐ上で、此處へ着いたのは七時三十分。駒ヶ岳の絶巔は巨頭を右方に擡げてゐるが、まだ中々に遠く見える。其處へ續く山稜は巨岩の重疊と石筍の簇立とで、何邊に途が通じてゐるか全く想像し得ない程である。三十分程も休憩して春吉等を待合す間に、大武尾白の兩溪谷よりは濛々たる霧を吐いて、須叟の裡に甲信の眺望を奪去つた。自分は柔い灌木の上に大の字なりに仰臥して天を仰いでゐると、不知不識の裡に偉大なる宇宙に同化する様な氣になる。人夫も來たので八時過ぎにまた登りへとこゝつた。危岩の間を傳ひ、樹根岩角に縋り付き、一步毎に喘ぎながら目に入る汗を拭ふ暇もなく、漸く鳥帽子岩に達して一息入れる。此岩を穿ちて一大鐵鈕が植ゑてある、行手の山稜が急に削れて鋭刃の如き所へ來た、左方は懸崖千仞底も得知れぬ地嶽谷で、雲を吐く大武川の谿谷は奈落へ續いてゐることも見え、右方は尾白の深谷が魔境の如く靜まりかへつてゐる。此處を越えてなほ登れば、

右方の岩間より糸の如き清水が湧出して居る所がある。春吉等は口を付けて頻りに吸ふ。二三町行くに「水雨天」の標石を過ぎて小祠の前へ出る、祭神は大己貴命で、石垣を積んで周りを圍つてある。記念の名刺を納め前途の幸を祈り、一憩の間もなく、雪の如き白砂を踏むで頂上に達したのは、九時過ぎであつた。

頂上は花崗の巨岩が簇立して、南に向けて所謂白崩の崩岩をなだれ落してゐる。馬頭観音の銅像と二三の石像が寂しげに建てゝ在るばかりで、高山植物には殊に見る物もない位であるが、九千餘尺の峰頭に立つた展望は實に雄大の極みである。惜いかな信飛方面の北アルプス連峰は雲の冠を戴き、僅かに腰部以下を露はすのみで、槍も穂高もいづれとも見分け難い。西駒ヶ岳山脈の上には、御嶽、乗鞍岳が殘の雪を輝かして見える、間近き仙丈岳より南に延く白峰の方面は鹽見岳邊りまで、意地悪く立草むる霧の間に隠見する。西北は烏帽子岳、大岩山、鞍掛、不動の諸峰で、こゝからは白妙の山稜に因つて結付られ、殊に怪奇なる鋸岳の赭巖の姿が著しく目を惹き付ける。其下には信州戸臺よりの登路赤河原が其名の如く赭色の帶を引いて、末は遙の森の中に消てゐる。

岩蔭の白砂の上に蹲居して晝飯を済す。時間に餘裕があるので、緩々と寐轉びながら春吉等の話を聞く。五六日以前に鋸裏から赤河原方面へ入込んだ柳澤の岩蕒採が歸る日取だからと、不動の手前の戸臺からの登路を注意してゐる。九時半頃に人影らしい二個の黒點を認めたが、動とも動ぬとも判然とは分らぬので、林八は其方面へ偵察に出懸けた。約一時間も過ぎて眞下の岩蔭から荷を背負つた二人の姿が、林八と共に頂上目懸けて登つて来る、待構えて居つた春吉は、炊事用の手鍋を取替たり、色々の用談を果てゝ、十一時過に自分等は分袂し、夫々結束して白崩の絶嶮へと向ふ。白妙の砂は霏爛して雪と輝き、足溜りもなき大斜面は、素より定つた途はないから、恰も飛ぶ如くに遮二無二降る。程なく巨巖の累積した所へ降り着いた。是が六方石と云ふのださうだ。岩窪には焚火の跡がある。此邊

からは最早砂の姿は失せて、稜々たる巨岩の上を傳ふのである。戦のく足を踏しめながら岩稜に足場を搜つて徐ろに下る。岩角は磨ぎ澄した刃のやうに鋭い。其上凹突高低が甚しいから、偃松を力に跳り越えたり、小灌木の根に縋つて峴皺を匍ひ下るなど、中々容易な事ではない、而も左右は峭立した懸崖なので一歩も油斷が出来ない。最善の注意と努力とを以て、漸く此難關を切抜けたが、二三箇所は通過してからほつと胸を撫つた場所も在つた。

登山者は高山の絶巔を窮めた時、又は難所を踏破し得た時、さきの戦のき恐れた事をも忘れて、恰も自然を征服したかの如く、大なる誇を感じるのであるが、考へると人間も存外罪のない者だと、獨り微笑を禁し得ない。茲からはもう難所はないから、自分等も聊か得意となる、程なく花崗岩が無くなる。古生層の岩片が現れて、稍平坦な鞍部になつてゐる。又少し登ると偃松の切明がある。暫くは此切明の中を辿つて行く。懸て山脈が二つに分岐する。前方の切明を傳つて南西に行けば、池の平へ下れる。つまり信州戸臺から北澤に入込む通路の頂上で、北澤峠の名があり仙丈岳への登口となつてゐる。自分等は稍左方に途を執つて、仙水峠を目懸けて切明を蕩下する。以前偃松に切明のなかつた頃は、大に困難であつたさうだが、今でも偃松の殘骸狼籍たる中は決して歩きよくはない。それでも宙に吊されたり、落込んで泳ぎ出せなかつたりする懼は更にならない。偃松帶を過ぎて針葉樹林に入ると、此處にも切明が在つて、一直線に仙水峠まで續いてゐる。さして密生した林中ではないが、樹枝の交錯は適當に日光を遮斷して呉れるから、汗も引込む程に涼しい。腐蝕土の急斜面を勢に乗つて下ると數々滑轉する。仙水峠へ降り着いたのは午後一時頃。丁度十一時から二時間を費して下つた事になる。白崩の砂走りから亂岩傳ひの下りには、一時間以上を費してゐることと思ふ。

五分程休憩して仙水峠を北澤の方へ下り始めた。こゝからは焼石の如き黝紫色の崩岩で、朝興岳への登りも同じ色の亂石である、右の山側の斜面に沿ふて、岩崩を踏んで少し往けば仙水の小池の邊へ

出る。今は水も枯渴し、底には青草が茂つて池の面影もない。午後の烈日は眞額より照付けて、木蔭の無い石原はなかくに熱い。額の汗を拭ひながらも進むと北澤の水聲が聞える。今度は左方の朝與側の森林中へ入つて、途らしき痕跡を辿り、暫く往くと北澤の流れへ出た。澤は荒れて随分惡い、清流な水は氷の如く冷たい。渴き切つた咽喉に音をたて、飲む。池の平を右に見て、伐採當時の鐵砲の跡を過ぎ、幾度か徒渉を繰返すと右岸に北澤の小屋が現はれる。此處は河原が急に廣くなつて、流木や土石の大堆積が小山の如くなつてゐる。小屋の構造は大きな物であつたらしいが、伐採引揚の際に焼拂つた爲め、今は殆んど殘骸のみで、僅に燒残つた一部を取繕つてやゝ小屋らしい物にしてある。

小屋へ到着したのは三時である。今夜は兎も角も此小屋を金殿玉樓と頼んで、一夜を明さなければならぬ。林八は荷を取卸すと共に惶しく釣道具を持出し、澤の下流へ岩魚釣にと出懸けた、春吉は焚火の用意を爲て、材料の蒐集に忙しい。他に用の無い自分は、朝からの汗を洗ふべく裸躰となつて流に飛込んだ。清冷水の如き水は、久しく漬つてゐると全身の知覺がなくなる。小屋に歸つて下縋絆を取替へ、外套を上に着て焚火の側へ寄添つた心持は、實に類の無い爽快さである。約一時間半も経過した頃に、林八は尺餘もある岩魚を獲て莞爾と歸つて來た。僅に一尾であつたが、味噌焼にして晩の乏しい食膳を賑はした。此頃ではもう北澤には岩魚がゐないさうだから、是も珍物として賞味すべきものだ。明日の仙丈登山に天候を氣遣ひながらも、八時頃早々寢に就く。夜半に目が醒めると、魔鏡の如く凄い月が天心に澄んで、神秘の夜は無限に靜かに唯北澤の瀬の音のみが枕に傳はつて來る。時折焚火の影が明滅すると共に、氷の如き冷風のひやりと襟元にあたるのを覺えた。

四、仙丈岳

七月十九日。目を醒すとはや人夫は炊烟を靡かしてゐる。時計を見ると四時を過ぎてゐるので其儘

起出る。早曉の氣澄み亘り、嵐氣肌に泌みて身も心も引締る。楊子を啣へながら河原へ下りて、一入冷たい朝の溪水に慄え、漱ぎ顔洗ひなどして歸ると、朝餉の用意は調つてゐた。天氣がいゝので元氣も自から充溢して急ぎ出立の用意に取懸る。今日の案内役は春吉が勤め、林八は今夜は宿と頼むべき小屋の修理や、野呂川本流邊までも岩魚を漁ると云ふ役目で居残る。

晝の握飯が出来上ると、空瓶に飲用水を詰め、果物や副食物の罐詰を取出して、それゝ春吉が携帶し、午前六時に小屋を出發した。今日は春吉が今年初めて探見した無名の小澤から登ると云ふ前觸に頗る興味を惹き、隨て足の進みも自から軽い心地で、小屋から北澤を約一町程溯れば、直ぐ右岸に水量のさまで多くない小澤が落下してゐる。乃ち此小澤を上るので、水源は池の平から續く尾根から出てゐる。路程を比較して概算して見ると、小屋から池の平まで北澤を溯り、この小澤の上の尾根へ達するには、約一里以上の大迂回となるから、時間にすれば一時間半位の相違は慥に在ると思ふ。自分には記憶に便利なやうに、此澤を水石澤とか春吉澤とか名付けて置きたいと思つて春吉に相談した。然しどの澤でも水と石とのない所はあるまいと云ふ、尤至極な抗議に春吉澤と呼ぶ事にした。澤の傾斜は餘程急であるから屢々水の洗禮を受ける。其上岩質の脆い觸るとぼろゝに崩壊する岩壁に、小瀑布を懸けてゐる所が二三箇所ある、別に危険と云ふ程度のもではないが、其都度手を執つて引揚げられた。唯澤が水嵩を増した時は、登攀困難であらうと思ふ。はね懸る水を避けながら約一町程も登ると澤は分岐して、右方の源流からは潺々たる水聲が遙か上の方から来る。左方は自分等の攀づる空澤で、堆積した磊石の上を匍ひ上るのである。澤が盡きると薙ぎ落ちた崖を攀ちて、適宜に密林の中へと這入る、伐り倒されたまゝの木や自然の朽木が、しだらなく横たはつてゐる下を潜つたり上を乗越えたりして、手足に纏はる丈なす草むらの中を踏分けながらひた上りに登り、最初から四十分餘も奮闘を續けて、池の平から登る尾根の路に合した。これからは國境の切明を傳つて何處までも尾根を上

るのである。倒木や朽木の障碍物は依然として多く、途は追々急峻になつて陰森とした日影も漏さぬ密林の中でも、汗は絞るやうに出るので、森林帯を抜けるまでに一時間半も費した。夫から偃松帯に入り、間もなく前仙丈の頂上に着いた、左方仙丈澤の上の偉大なるカールと、右方蘆川の上のカールとが、雄大なる形を眼下に展開する、前仙丈より一度低下した山稜は、再び馬の脊の如く峭立して、蜿蜒長蛇の如く奥仙丈の頂上へと續く。堆石を踏み岩壁をへづり、残骸の執念くまつはる偃松の中を通抜けて、頂上の三角點に達したのは、九時四十五分であつた。

絶頂はさして廣くもなく、碎石の磊々たるのみで何等の奇趣もない。前岳三柱大明神と刻した小石碑が樹てゝある。執念深い霧は今日も付纏つて、間近い白峰一帯の裏山が見える外には更に展望がない。晝飯を済すと春吉は焚火の側に横になり、直ぐ鼾聲を立てゝ眠に落ちた。信州方面からは盛に霧を吹上げるのみで、眼界は依然として晴れさうにもない、焚火が消えて薄ら寒くなつたので、紀念の名刺を空罐に入れて石碑の傍に置き、春吉を促して十時四十分には頂上を辭した。時間に餘裕があるから池の平へ廻つて、午後一時四十五分に小屋へ歸着した。

小屋の修理は出来上つたので、屋根も板垣も稍々完全になつてゐる。此後暫くは北澤へ来る人の爲にまづ恰好の宿營地であらう。林八は釣から歸つてゐたが、心待の岩魚は不漁なので、少なからず失望した。今日は殆んど半日の休養であるから、汗染みた白襯衣などを、北澤の冷たい水で雪とも冴えよご洗濯する。後は水浴して好い氣持で晝寢をする。目が醒めると粉ミルクでコ、アを飲んだり、秘藏のキヤラメルを振舞つたりして、焚火の側で半日を送つた。夕方狭い谷間から霧が湧いて、遠雷の音が次第に近づき、驚破と云ふ間もなく覆盆の雨は、銀絲と亂れて猛然殺到し、板屋を叩く盤渉の響は耳を聳するばかりに、隙間を漏り来る點滴は頭から脊に傳はるといふ騒になつたので少からず狼狽したが、夫も何時しか晴渡つて元の靜寂に反り、晦冥の夜は次第に更けて、夢魂徒らに山野を驅廻るの

であつた。

五、仙水峠 朝與岳 廣河原

七月二十日。拂曉の仙丈岳は半腹以上雲の幕に隠れ、狭い北澤の峽谷には未練らしい霧が、消えも果てず風のまに／＼徂徠する。春吉等も氣遣しげに雲の行衛を見守りながら朝餉を濟した。折から安心せよと許り雲の斷層から日光が漏れて、谷間の狹霧も次第に薄れて來た。午前六時過ぎ小屋に別を告げ、前日の行程を逆に北澤を溯つて仙水峠に向ふ。

仙水峠の岩の斜面へ懸る頃から、重々しかつた空も名残なく霽れて、日光は眩ゆいまで照り亘り、葉末の露は玉と輝き、名も知らぬ小鳥が晴を喜んで囀つてゐる。

七時二十分、山裾の堆石を踏みしめて、朝與岳の登りへ第一歩を進めた。岩崩れの傾斜面を過ぎて針葉樹の林中に入り、切明を辿つて途は次第に急峻となり、林中を出抜けると又岩崩れの所へ出るが、此處は左程に長くはなく、直に偃松の海に入つた。偃松は丈が高くなく切明けてない。もう此邊から途は餘程悪くなつて來る。巨岩を越えたり岩壁を傳つたりして、兎ある一峰の頂上へと出たが、絶頂は未だ隆起した二三の峰の彼方に在る、何の事はない此處までお出で甘酒進上と云ふ格だ。又勇を鼓して岳樺や偃松のもつれ合つた、亂石の堆積から成る同じやうな二三の峰頭を上下して、絶頂の三角點に達したのは十時であつた。今度の登山は初日から霧に附纏れた悪線今に盡ないで、今日も信飛方面は全く見えず、白峰仙丈だけが纔に顔を見せ、手近では野呂川の溪谷と、駒ヶ岳の裏山とが晴れてゐただけである。朝與岳の絶頂は岩塊の狭い堆積であつて、三角點は一段低い平坦な場所にある。春吉は三角標石の附近の石の下から、一握の名刺を探出して來た。風餐雨蝕にも損せず文字は分明に讀まれる、皆懐かしい末見の山岳會の先輩の名前で、辻本満丸、星忠芳、高木伊八、大槻禎郎四氏の

名刺であるが、讀んであると無限の感興が起る。辻本星雨氏のは、明治四十四の七月に通過せられた時のものであらうし、大槻氏は前後二回通過されたさうだから、多分は最近大正三年の時のものだらうと思ふ、特に同氏のに對しては追悼の念に堪えない。晝飯後空罐の中へ諸氏の名刺と共に自分の者も納め、三角標石の傍に石を蔽ふて伏せ置いたが、いつまで残ることであらうか。

最初の計畫では早川尾根の南側で泊る豫定であつたが、今朝出發間際に、野呂川の廣河原へ下りて、適當な場所を選んで泊る事に變更した。白峰へ登るには到底時日の制限が許さぬから、せめて野呂川の奔流を見て白峰の麓で寝て見たいと云ふ望と、今一つは春吉が早川尾根まで行かずに野呂川へ下つて見ようと提議したので、嘗て辻本氏の縦斷記で見た、ミヨシ澤へ下る途を想起して、多分夫を下るのに相違あるまいと内心に思つたその好奇心とから、廣河原泊りを思立つたのである。

絶頂を十一時過ぎに辭して、早川尾根への山稜を下り、岳樺や偃松の枯骨に蔽はれた岩塊の一二峰を過ぎて、約三十分位で兎ある一峰の手前の、少しく平坦な草原の所へ出た。左方大武川の谷は霧が深く鎖して、澤の展望は全くきかない。右方野呂川に面した谷は、柔かい青草の生えた急峻なる崖が、下方の密林に續いて遠く底までは見透せない。春吉は此密林中に入れば、獵師の通る途は在るといふ。即ちミヨシ澤と野呂川との合流點へ下るので、今自分等は早川尾根と朝與岳の中間の尾根に佇立して居るのである。此處から早川尾根へは未だ一時間は要するさうだ。兎も角も自分等は此取付き所の無いやうな草の崖を降る事に決定する。

崖には無論途の痕跡だにない。唯青草の根に縋つて一向にすり下つた。足溜がないので幾度も尻餅を突き、其都度いつも一二間は滑り落ちる。又時には隠れた石に躓いて飛上る程の痛い思をする。此難場を下るのは樂ではなかつたが、漸く間近き左手の針葉樹の密林へ取付いて、やれくそ一息吐く。此の密林は急峻な斜面ではあるが、峰頭へ續く尾根の一部分をなしてゐる。最初は通過に困難な位下

枝が交錯し、小樹木が茂生してゐたが、進むに随つて次第に樂に通れるやうになつて來た。春吉は恰も獲物を探す獵犬の如くに眼を八方に配つて、獸の足痕其他を注意して行先の見當を付ける。その努力と熟練とは誠に感服の外はなかつたが、然し或場所へ來た時に右方に途らしい痕跡を認めたに關らず、左に近く澤の音を聞いた爲めに其方向へ下つた。是が少し逸まり過ぎたので、夫から先は非常に惡戰苦闘を續ける様になつたのは、所謂千慮の一失とでも云ふべきであらうか。最初は水音を頼つて下ると遂に絶崖の上へ出た。是はミヨシ澤の中尾根へ行當つたので、正面の絶壁ミヨシ澤の中尾根からは、澤の水が飛瀑となつて簾を懸けたる如くに落下してゐる、下の澤は元より險惡であるから徒涉して降る譯にも行かぬ。進退谷つた自分等は失敗つたと許り、流石の春吉も困つた顔付をする。詰り先きの途を右へ執れば仔細はなかつたのだ。三人は無言のまゝ澤を見詰めて、暫くは動かずにゐた。後戻するのは時間が損のみでなく業腹であるから、行ける處まで行かうと、上へは登らず其儘澤について右へと林中を一直線に進む。暫くすると密林は一寸と絶えて、空澤の上の薙の如き所へ出た。此薙の上方は密林に續いてゐるから、多分先きの途を右方に執つて進めば、此密林中を通過する事になると想ふ。何分見透せないの的確確に見當が付けれられない。此空澤も末はミヨシ澤へ落合ふのであらう。自分等は先づ取敢ず此薙を越えて、前方の森林中に竊入するより外に策はない。其距離も僅に五六間足らずと見えるが、赤兀げた地盤が急峻な斜面をなして、少しの足懸りもないから、春吉が先導となつて足場を作りながら渡り、自分は其後に引添ひ、林八が殿となつて、難なく向の林中へ辿り着くことを得た。此密林も同じ針葉樹で下草の茂みはないが、倒木や朽木が交互錯綜して、下は軟かい腐蝕土であるから、岩の隙間などへ苔が蒸して、思も寄らぬ陷穽へ足を踏込み、しばしば轉ぶことがある。又樹根を力に岩角を這上つたり、金剛杖に足場を計つて斜面を下りたりすることが多いので、蝸牛の歩みよりも遅々として歩取らぬ。然も満身の注意と努力を要するので非常に疲勞を覺える。其

上午の頃からの不快な蒸暑さが到底白雨となつて、遠雷の音と共に襲來した。雨具を取出す暇もなく非常な大降りとなつたので、兎ある木蔭で辛くも支度を調へた。重き足元に纏はる雨具の裾は、邪魔になるので殊更長いやうに感じた。濡れに濡れたる三人は無言の儘に強行する。其中に途は新しい伐採の跡のある所へ出た。此處からは慥に人の踏んだ形跡があるので、倒木の縦横した中を通抜けると、果して一條の途は微かながらも下に通じて、藪の如き草叢の裡に骨ばかりの伐採小屋が現はれる。安堵の胸を撫つた自分等是不思會心の笑を浮めた。急な斜面を驀地に下つて廢屋の側を過ぎ、遂に目指すミヨシ澤と野呂川の合流點へ出た。こゝで直ぐミヨシ澤を徒渉して、崩壊した對岸の崖を上ると、此處にも稍完全な小屋がある。野呂川からは左岸に當つてゐる。折節雨も次第に晴れて來たので、蘇生の思をなしつつ小屋で休憩した。時計を見ると三時二十分であつた。

今宵自分等の野營すべき廣河原は、まだ一里餘も下流であるから、緩り休憩してゐる譯にも行かぬ。初めて見た野呂川の谿谷も、此邊では大した事もない。小屋の後からは雨後の露滋き山裾の路を薊に賣られながら、野呂川の左岸に沿ふて下る。約三十分程で河原への下り口へ出た。小さい澤の雨に熱れた崖を滑り下り、浅い水を徒渉して河原へと下る。此邊からは河原の幅も著しく廣くなり、彌増る水嵩は奔湍の勢をなして、白峰仙丈朝與などより落つる不斷の水を集め、末は名にし負ふ早川の急瀬となるのも理かなど首肯される。暫く下つて廣河原の小屋場へ着いたが、小屋の所在が分ちぬので、對岸に居る岩魚釣を見付けて、様子を糺さん爲に春吉等は向ふ側へ渡つた。間もなく小屋はないと云ふ心細い報告を齎して歸つて來た。己むを得ないから小太郎澤の下流にある鐵砲の下で一泊する事に評議して、疲れた足を引摺りながら三四町を下り、五時過に目的地に到着した。

今日は春吉等も未踏の箇所が在つたので、豫想外の困難にも遭遇したが、去りてて決して無謀の舉では無かつた。周到なる注意を拂へば、多少の困難はあつても、二時間位で充分に降り得る。唯朝與

岳と早川尾根の中間から最初に下りた草の崖は、非常に急峻であるから、此處を降り得るとは氣付かずに通過するかも知れぬが、其他は概ね密林中を通過するので、途の痕跡をさへ注意して、方向を間違はないやうにすれば、健脚者に執つては格別恐るゝに足らない。

此鐵砲の下は是迄も宿泊した者があると見えて、湯沸の自在釣も釣つて在り。柔かい草の褥までが人待顔に敷残してある。然し野呂川の水が足元まで來てゐるから、雨でも降ると少し險脊である。焚火の側に寝轉んで晚餐の仕度の出來るのを待つ。先の岩魚釣が河下の自分の小屋へ歸りがけに寄途をして、春吉等と色々な話をした。岩魚は生憎一尾も釣れてゐないので、鹽焼の美味も終に空想に終つた。日没頃から兩脚がまた繁くなつて、今度は水責の杞憂が實現されるのではないかと惧れつゝも、疲労した自分等は何時しか夢裡の人となつた。半夜屢々眼が覺めたのは、焚火が餘り近過ぎた爲であらう。轉々反側の裡に雨や水の音を耳にしながらも、起て見る勇氣もなく、到頭夜の明ける迄も眠つて居た。

六、ゴロ澤頭より蘆安迄

七月二十一日。曉の空は重く曇つて白峰も霧に包まれてゐる。雨は止んだが天氣模様は面白くない。白峰登攀は時間上の制限の爲めに放棄してはゐるが、その麓で寢た一夜を思へば未練がないでもない。唯だ野呂川で川留に遭れた諸氏の記事から思ひ合せて、天氣模様の良くない時に無理する事もないと諦める。朝餉を済した時は六時を過ぎてゐた。兎も角も雨は降つてゐないから出發と決する。昨日下つた河原を四五町溯つて、右方の空澤を登つた。此澤は岩石がゴロゴロと押出して全で山の如くに積つてゐる。澤の姿を見て此處がゴロ澤かと春吉に尋ねたが、確答を得なかつた。

空澤を左寄に方向を執つて上り、遂に左方の尾根の一端へ取付くと、針葉樹林の急な斜面を刻む如

くに喘ぎつゝ登つた。下枝の交錯や倒木の障碍で歩行は可なり困難であるが、途らしき痕跡は存して居るから、夫を便りに二時間餘りを費して、八時過に漸く大尾根の上へ達した。此處は山脊の狭い鞍部で、褥の如き柔い草が一面に繁茂して、誠に居るゝの良、野營でも出來さうな所であるが、附近に水を得る便宜はあるまい。大武川寄りの谿谷は、例の霧に立蔽はれて、澤の方向などは皆目分らぬが、矢張此處は大武川の谷から野呂川への乗越になるので、丁度早川尾根とゴロ澤頭の尾根の間に當つてゐる。重々しい空も名残なく霽れ亘つて來たので、氣も心も引立ち、自然と自分の口からも軽い戯談も出るやうになる。然し今日の行程を案ずれば、中々に前途遼遠であるから、あまり緩つくりする暇もなく出發する。

こゝからゴロ澤頭は未だ見えないが、鋭い山稜を傳つて、二三の急峻な峰を越える所を見ると餘程距離はあるらしい。草原から針葉樹林へ入ると暫くは登りとなる。其處を抜けると途は、偃松や岳樺の生えた岩稜の上に通じて、切明けられた偃松の幹や枝は、鋭尖なる鎗襖を作つて、いざと許りに待構てゐる。殊に急峻な斜面を上る時には、鎗のやうに尖つた切口の爲に突戻されたり、はじき飛ばされたり、散々の憂目を見た。春吉等は巧みに渡つて行く。此偃松の切明けられない以前は、今より幾倍の困難で在つたかと思はれる。登山は好きでも此様な難場の上りには閉口する。殊にゴロ澤頭の手前の峰頭へ續く此鎗襖の大難場で、疲れた足は思はずも凍んでしまふ。

ゴロ澤頭への登りも、矢張亂石と偃松の中の急峻な切明を攀ち上るので、頂上間近にある丈の低い岳樺の茂みを右へ絡んで上れば、直ぐ三角點の在る頂上へ達する。一坪位な幅の狭い亂石の堆積で、朝與岳の頂上に似た所がある。時間は十一時過ぎなので、此處で晝飯を喫する事にして焚火を始めた。前面には雄大なる地藏岳や藥師觀音岳などが見える。鳳凰山の地藏佛は生憎濃霧に隠れて、其尊容を拜めない。顧みると白峰連嶺の方は好く晴れて、北岳間の岳農鳥山から鹽見嶽に到る大山脈

が蜿蜒として天際に聳立してゐる。唯だ北アルプス連峰に見る如き萬年雪の輝きを見ないのは、雄大を感ずる裡にも崇高の念の起らないのを遺憾とする。

ゴロ澤頭を下つて山脊を傳ひ行けば、途は何時しか花崗岩の崩砂の白き斜面へ出る。此處を上ると一峰の頭で、其處には數多き石地藏を安置してある。賽の河原と云ふ所であらう。此處から鳳凰山へ通ずる途も、鳳凰山そのものゝ姿も、立單むる濃霧に閉されて分明せぬ。賽の河原で暫く休んだ。所作の無きに石佛の數を讀むと三十位ある、殊に首の缺けたのが多いので石を接いだりして二十分程も待つてゐると、流石に執念深い霧も次第に晴れて、眼前に地藏佛が露れた。しかし今日の行程を顧みると大分時間を喰込むでゐる。是から地藏藥師觀音を経て蘆安まで出るには、夜になる惧があるので、残念ながら地藏佛は基部まで往つて、見上げたのみで割愛し、直に引返して地藏岳の登りに加つた。

地藏岳は花崗岩の累積した隆起で、三角標がある。これから南に山稜を傳つて偃松の中を下り、又山脊を上れば觀音岳で、山頂は巨岩峙立して其處に一つの石佛がある。藥師岳は其次で、約十分位で達し得るが、頂上は岩石のみで何物もない。少し下つた岩陰で第二回の晝飯を濟す。時計は二時三十分を示してゐる。時間が大分後れたので間もなく出發した。觀音岳の畧ぼ下まで戻つて、東南に下れば砂拂の岩山である。峰頭の岩塊が鳳凰山上の地藏佛の如くに兀立して頗る見事である。又此邊一帶は花崗岩の霏爛した眞白な砂地で、高山植物が美しく點綴し、誠に心地の好い廣々とした所であるから、何時迄も遊んで居たいやうな氣もする。此處を過ぎて森林の中に入ると、程なく急峻な坂路の上へ出る。勾配は急でも降りだから飛ぶ如くに進むと、直ぐに御室の小屋場に達する。清冷な水が樋を溢れて滾々と流れてゐる。自分等は汗を拭ふ隙も惜みて飽まで之を飲んだ。もう四時であるが、蘆はまだ四里以上の行程であるから、腰を落付けて休む暇もなく出發する。右は野呂川へ通ずる途で、

左は青木湯から龍王驛へ達するものである。自分等は眞直に蘆安への途を取る。これから高嶺の登りとなつて、樺や針葉樹の森林中へ入る。急傾斜ではないが、羊腸迂曲を極めた、實に飽果る程の長い森林中を漸く出抜けると、降り一方でもう殆んど登りはないが、降雨の爲に崩壊した路は、空澤を下るやうな悪い所がある。疲れ切つた足は少しでも登りになると皆小言を云ふ。辻の小屋場、杖立、堀切り邊は無我無中に過ぎて、山神の小祠の前へ腰を下して息を入れる。夕靄は早や四方に立籠めて來た。いらだつ心に急ぎ立てられて一息の後荏苒の坂路へ懸る。此邊は野呂川と御勅使川との流域の分水嶺であるといふ。春吉等は清水権現の靈泉を一掬したが、別に憩ふこともなく、一行はますます歩調を早めてやがて草ばかりの急坂の上に立つた。目の前に展開した谷間は夕靄に閉されて、木々の梢のみが夢の如く浮いて見える。急な降りを下りて谷底に立つと、こゝは最早夜の領であつた。僅に星明を便りてシヨ澤を横切り、車地藏の森も是かと許りに、漸く蘆安村の清水旅館を尋ね當た時は既に八時を過ぎてゐた。安心すると共に空腹と疲労とが一時に責め寄せて來る。清水旅館は元の蘆安温泉主の住宅で、温泉は去年かの荒れで崩壊全滅して今はない。随つて旅館と云ふも普通の農家の櫓で、あまり廣くもなし、何かの準備も手薄のやうであるから、多勢の宿泊は困難であらうと思ふ。温泉はないと聞いて覺悟はして來たが、風呂の如きも元よりないので、下山の疲労も醫し難い。僅に汗に汚れた身體を水で拭つて我慢した。然し温い飯に熱い汁は太宰の味である。携帯のウイスキイの瓶を開けて、無事豫定の行程を終へた祝杯を舉げて寢に就いた。

七月二十二日は韭崎から汽車に乗り、日野春で春吉林八の兩人と分袂して、自分は上諏訪温泉で積日の勞を休め、二十三日には又引返して大月驛から吉田に一泊し、二十四日は河口湖から西湖を経て精進に宿り、二十五日は本栖湖岸より裾野を経て大宮驛に出て、東海道線にて歸宅此行を終つた。

雁ヶ腹摺考

武田久吉

山峰の名、又は山中の地名で、鳥に因縁ある者を索めならば、其數は蓋し僅少なものであるまい。差當り思附いた者のみを舉げて、十や十五を數ふる事は容易である。雞頂山、鶏冠山の雞にちなめる、鷺ヶ峰、鷺羽岳の鷺を冠せる、其他白鷹山、大鷹山、鷹ノ巢山、鳶形山、大鳶山、鳥岳、燕山、鳳凰山、鶴ヶ鳥屋山、雛鶴峠、鴻ノ山の如き、何れも鳥に關係のある者である。勿論是等の中には、單に發音を借りて字を當嵌めたに過ぎない者もあるであらうが、又事實上の關係——殘雪又は山の形が似てゐる等のことは別としても——あるが爲に名を得たものも決して少くはあるまいと信する。

次に雁字を有する山名を列舉すると、雁回山（肥後）、雁飛山（長門）、雁股山（豊前）、雁俣山（肥後）、雁又山（阿波）雁ヶ峯（甲斐越後）等の低い、そしてあまり耳なれない山々を初めとして、最有名な雁坂峠や、其東南に方つて雁峠があり、又山中の地名としては、甲州の日向山に雁ヶ原なる所もある。而も前記の山名に用ゐられた諸鳥の名は、其用ゐ方皆比較的平凡なるを免れないのであるが、標題に掲げた雁ヶ腹摺に至つては、甚だ其趣を異にして、類例の少い雅致ある用法であると言へやう。即ち山峰天に聳え、爲に飛雁の腹を摩すといふに出でたものであらうと思はれる。此の外甲斐國南都留郡に雁道峠といふ地名があるが、これは古くは強盜峠又は強盜坂と書かれたもので、夫がいつの間にか雁道と書かれるやうになつてしまつた。しかし雁に直接關係を生じた爲に字を變更したのではあるまい、唯だ發音を借りて當てはめたものであらう。斯様な例は稀ではない。

ところで、雁ヶ腹摺と云ふ山は何處に在るもので、其標高等は如何といふ問題であるが、これ

前兎角明瞭でなかつた。唯同人の間には、甲州大菩薩峠の南方で、陸測五万（丹波圖幅）に二〇一四米と測られた峰に、一先づ此名が充てられて居たのである。（「山岳」第八年第二號卷頭畫参照）。

自分が初めて此の名を知つたのは、明治二十一年印行農商務省地質調査所發行の二十万分一甲府圖幅（地質調査鈴木敏、製圖若林平三郎）で、これには大菩薩峠の南方で、其の連脈中の一峰一九九米と測られたものに雁ヶ腹摺山と明記してある。明治三十九年二月印行の日本山嶽志（六六頁）には、雁ヶ腹摺嶺を以て初鹿野山の別稱として取扱てあるが爲めに、それについては何等特別の記事はない。

自分は明治三十九年の春大菩薩峠をこえたが、其の折は誰も案内者として伴はず、又山麓の民は、大菩薩峠は柳澤峠の新道が立派に出来て以來、通行する者も稀であるといふ様な事を話して呉れるものが多かつた位で、隨て雁ヶ腹摺山に關しては毛頭知ることは出来なかつた。同年九月の初旬、梅澤君、山川君、市河三喜君の驥尾に附して相州毘盧ヶ岳へ志した折、山麓の上青根で傭つた獵師の杉本斧吉（當時五十歳）と山談の中に、復雁ヶ腹摺に關するものがあつた。同人の言を歸京後所持の山嶽志に記入して置いたのを抄出すると『大藤近傍ヨリ雁ヶ腹摺山ヲ越エテ小菅及ビ西原ニ通ズベシ山路夷ナラザレドモ馬ヲ通ズト云フ（杉本斧吉）』といふのである。しかしこれは本當の雁ヶ腹摺山ではなくて、大菩薩峠に充たること疑ふの餘地はないのである。

其の後昨年の始まで、自分は東京近傍の山岳に親しむ機會がなかつたので、雁ヶ腹摺山に關する知識は依然たるものであつた。然るに昨年一月頃から、大菩薩以南の山嶺を縦走しやうといふ計畫が、木暮君との間に萌え出した。狭小ではあるが、同人間にはテラ インコグニタである地方の跋涉を、自分は大なる期待を以て夢みて居たのである。此の舉は天候や其の他の事故の爲めに、晩秋まで實行の機がなかつたが、自分は其の間に、雁ヶ腹摺に關する材料を多少蒐め得たのであつた。

順序上、此處で地質調査所の甲府圖幅を引合に出さねばならないが、此の圖は如何なる地形測量に

基いたものか自分は知らなう、随分杜撰なものと言はねばならない。勿論陸地測量部の輯製二十万よりも餘程事實に近いが、存在しない山岳を記したり、又は其の反對に、ある可き溪流が全然削除されてあるなど、驚く可き點が少くない。従つて問題の雁ヶ腹摺山一九九九・〇米なる山岳も、此の地圖だけでは到底其の位置を判定することが出来ない。今此の圖に表はれた大菩薩峠の位置は正確なものとすると、其の東南に連つて初鹿野山といふがあり、其處から山脈は急に西南に曲つて一峰を起し、一鞍部を過ぎると、脈は略正南に向ふが、そこに雁ヶ腹摺山なるものが位置して居る。故に之を陸測五万の二〇一四・四米の峰に充てたのは、この兩圖を比較して見れば大に首肯出来ることである。そして第八年第二號の巻頭書に二〇一四米として描かれて居る峰は、名稱は別として、正に此の二等三角標點のある峰に相違ないのである。

しかし調査所の圖にある雁ヶ腹摺から東南に流れ出る水は、眞木川まぎの源をなす様に記してあるに係らず、陸測五万の二〇一四米の峰から東方に出る水は、委く葛野川かつのの上流金澤かねざわに流れ入るのである。而も此の澤は調査所の甲府圖幅には全然省略されてしまつて、葛野川の上流は只土室川かと思はれる澤一つで代表されて居る始末である。陸測五万には、眞木川は一九八七・五米と測れた、小金澤山なるものから發して居るが、此の川には名は記してなく、又その上流には水は入れてない。實際眞木川を溯ると其の本流は此の小金澤山なるものゝ東南面から發して居つて、この邊を本澤と呼ぶこと、猶本澤御料地の稱あるによつてもわかるのである。(但し此山林は今縣の恩賜林の一である)。

大菩薩連嶺の縦走が未だ實行されなかつた昨年の五月、自分は甲州の丹波から飛龍(大洞山)に登つたが、あの親川おや(一名後山川又小川)の南に曳く長大なる尾根に登りついて、萌え出でた許りの新緑の間から南方を眺めた時、大菩薩の連嶺は、其の最北に陣取つた盟主大菩薩岳の左に縦列を作つて一々の峰を明確に指すことは困難であつたが、其の連嶺の南端かとも思はれる邊から、左(即ち

東)に凸出した金字塔形の山が見えて、それが連嶺と續く所は中々低い鞍部をなして居るのであつた。其の時の案内者は此の峰の名を知らなかつたが、その鞍部を雁ヶ腹摺峠と呼ぶと教へて呉れた。此の峰は丹波圖幅に所謂小金澤山から東に來たもので、標高は一八八〇米餘を算し、其の間の鞍部は一六〇〇米を僅にこえて居る。

其の後には文献の上で雁ヶ腹摺を搜索して見ると、此の名は決して新しいものではなくて、文化三年に起稿して同十一年(西曆一八一四年)脱稿した松平伊豫守定能編輯の甲斐國志にも見えて居る。其の中雁ヶ腹摺に關係のある點を抄出すると次の様なものである。

一〔笹子坂〕峠ヨリ黒野田驛へ至ルマデ一里十二町。西北ハ八代郡ニシテ、駒飼驛へ出ヅ。中腹ニ古杉アリ、圍二丈三尺九寸、矢立杉ト云。^{○中}又下リテ追分ヨリ北ノ山間ニ入ルコト數町、ヨケ澤ト

云地アリ、其所ニ十國岩ト云巖窟アリ、廣方八丈許。其傍ニ飛泉一流アリ、其澗流ヲ瀧ノ澤ト云。嶺ノ北ノ高所ニ烽火臺ノ古趾アリ。此ヨリ丑ノ方ヘ向ヒテ、峯續キ三里餘、鎮西ケ丸ニ至ル、此ハ眞木、白野ノ界ナリ。又西北三里餘ニシテアカヤ山ニ至ル、アカヤ權現ノ小祠アリ、眞木村ニ屬ス。權現ヨリ北ヘ峯續キ一里餘ニシテ、眞木山、瀬戸山ノ界ニ至ル。此峰ノ東ニ高嶺アリ、雁ガハラス

リト云、是小金澤ノ極ナリ。^{○下}(山川部第十六、中)

一、鎮西ケ丸ヨリ戌ノ方峰續キ一里半許ニシテ、白ヤノ丸ニ至ル。此間中グラ、コロボ澤、ヒナタジャクシ等ノ數峰アリ。此ヨリ赤屋權現ニ至ルマデ、亦山澤多シ、一一筆シ難シ、赤屋權現ノ石祠アリ、何神ヲ祭ルコトヲ不知。神號ハ地名ニ取レリ。眞木村ヨリ此ニ至ルマデ山峰三里餘、此ヨリ又西北ヘ方リ黒嶽山アリ、高山ナリ。峰ニテ望メバ、武州ヨリ東海船舶ノ往來スル者明ニ見ユ、是八代郡ノ界ナリ。赤屋ヨリ峯續キ北ヘ行クコト半里許ニシテ、眞木、瀬戸村界ノ峯ニ至ル。此ヨリ辰ノ方ニ高峰アリ、丸岳ト云フ、界ノ峰ヨリ此ニ至ル高峰ヲ雁カ腹スリト云ふ。^{○下}(同上)

一「葛野川」雁ヶ腹摺ノ嶺東ノ深谷ヨリ發源シ。略下（山川部 第十六 下）
 一「奈良子川」雁ヶ腹スリ山ノ南谷ヨリ發源シ。略下（同上）

是等の記事によつても其の位置の大體を察することが出来るが、郡村誌も亦多少の参考となる記事がある故、次に二三を掲出する。

北都留郡七保村の條には

谷川

奈良子川 源ヲ北方奈良子山ノ内字雁カ腹摺ニ發ス云々

山岳

雁ヶ腹摺峰、村ノ北方ニ有テ、東山梨郡初鹿野村ト峰ヲ界ス。姥子山 山脈ハ雁ノ腹摺峰ヨリ續ク云々。

以上の記事によると、雁ヶ腹摺山と云ふ峰は、姥子山に連るもので、奈良子川及び葛野川の發源地であり、又一方には黒嶽山及丸岳の附近にあるものと云ふことになるのである。その中姥子山は陸測五万にも出て居るが、黒嶽山及丸嶽は、これや調査所の地圖には載て居らない。種々考究の結果（これに關しては更に記す機會が多分あることと思ふ）

（一）黒嶽山とは五万の地圖に小金澤山と記してある一九八七・五と測られた峰、即ち眞木川の發源地で、丸嶽といふは姥子山の北微に西に當り、奈良子川の水源の一を距てゝ聳える一七七六・七を測られた峰であることが判明した。これだけの見當がつけば、雁ヶ腹摺の位置は、自然と決定して来る、即ち丸嶽と姥子山との脈が會合する所に聳立してゐる高峰海拔一八八〇米餘を算するもので、昨春自分



（筆氏暮木）望西のりよ峰野佐

が飛龍から望んだものも亦これに外ならない。此の峰を雁ヶ腹摺と呼んで誤ないことは、眞木村の人々に糺した結果とも吻合するから、最早疑を挟む可き餘地はないのである。

これに關聯して記して置きたいのは、雁ヶ腹摺山と黒嶽山との間の鞍部である。これは眞木村では大峠と呼んで居るが、丹波山や小菅方面では雁ヶ腹摺峠と呼んで居る。これは多分其の東に雁ヶ腹摺山があるので、山名を峠に應用してしまつたので、而も峠を主とし、峰には少しも重きを置かない様になつたものかと推測する。

雁ヶ腹摺山の位置はこれで確定した様なものであるが、然しこれは調査所の圖上の位置とは甚しくかけ離れて居る。それ故或は尙別に同名の地が此の附近にあるのではないかと想像して、更に探究の範圍を擴げると、郡村誌東山梨郡奥野田村の條に左の様な記事がある。

原野 牛奥山

民有ニ屬ス

東西五里南北一里

字大洞

北洞

穴ノ澤

柚坂

境澤

牛ノ鼻毛

雁ノ腹摺

即ち牛奥山の一部にも雁ヶ腹摺なる地名がある。牛奥山とは初鹿野山や萩原山と同様に一箇の山ではなくて、奥野田村の山地をかく總稱するものと見ゆる、甲斐國志(山川部第四)には左の記事がある。

一〔牛奥山〕村ノ東五里餘ニ在リ、東方初鹿野山へ續ケリ。大洞、北洞、源氏ヶ岳、牛ノ鼻木等ノ分名アリ云々。

右の中源氏ヶ嶽とあるのは五万の地圖に源次郎岳と記す者らしく、又牛ノ鼻毛は鼻木の誤である。しかしこれだけの記事では雁ヶ腹摺の位置は分明しかねるが、奥野田村で糺した處によると、黒嶽山の北肩一九二〇米の地で、日川から小徑が此の尾根に上つて、稍東南に曲つて急に消滅して居るあたりを指してかく呼ぶのである。其の理由とする處は、黒嶽山は其の名の示すが如く黒木の山であるが、北肩の前記の地點は、スダケや他の禾本類が繁茂するのみで、一向に樹木がない、これは飛雁が腹を摺つて其の爲に樹木が生じないのだとしてある。此の地點から直に北に續くヒラは復黒木の林であ

る。しかしこれならば調査所の圖上に記してあるものと劇しい差はないのであるから、同圖に現はれた雁ヶ腹摺山なるものは、蓋しこゝを指したものであらうと考へられる。尙此の邊の地勢については何れ木暮君が詳密に書かれる筈であるから、自分はこれで筆を擱くこととする。

終りに臨んで前記の記事の要を摘めば左の如くである。

雁ヶ腹摺山（廣里村方面稱呼）——黒嶽山（陸測五万に小金澤山と誤記する者、頂に一等三角標石あり）の東、姥子山の西北、高距約一八八〇米餘。

雁ヶ腹摺峠（丹波山村及小菅村にての稱呼）——眞木の雁ヶ腹摺山と黒嶽山との間の鞍部、高距約一六〇〇米、眞木村にてはこれを大峠と呼ぶ。

雁ヶ腹摺（牛奥山の字）——黒嶽山の北肩にて樹木の生せざる稍平坦なる地、高距約一九二〇米、特別の一峰をなさざるが故に、之を雁ヶ腹摺山と呼ぶは不可也。

雜

錄

日光湯川の小瀧

「山岳」十三年第一號の武田久吉君の詳細なる日光山の瀑布と云ふ記事に一小瀑布を追加しよう、湯川筋の湯瀑の下流二三丁のところに小瀧と云ふのがあるを兼て見て居つたが行つて見なかつた。大正六年の夏湯本に遊に行つた時も遂に見に行かなかつたが、大正七年の夏外山澤（やまざは）より千手（せんじゆ）の方に遊に行つて熊窪より龍頭の瀧に出で、湯川に沿って溯り濕地の葦原をガサ／＼やつて、泉門（いづみかど）より湯本道に向ふ小徑が湯川を渡る點に來ると立派な林道が湯川に沿って切開いてあるのを發見した。此林道は大正六年の秋切開いたと云ふ話である、清く靜に流るゝ湯川を左に見て青葉瀘の光線を浴みながら土の軟き林道を蹈むのは何とも云へぬよい心地

である。此様な感じのするところは先づ上高地の或部分の外には得られまいかと僕は思ふ。暫く進むと林道が急に右に曲り坂を登る、登るとすぐ左に目の下に立木の間から小瀧を望むことが出来る。湯川が幅一ばいに瀧になつて居るので落差は七八尺位であるがホースシューになつて簾の様に水が落ちて居る。瀧の上流川筋の渦紋が青葉瀘の光線で緑にゆるぐ様は此瀧の美觀を増す一つだと思ふ。此林道を尙二三丁進むと湯瀑下の茶屋のすぐ横手に出る。此道には紅葉が澤山あるから秋は川筋が錦に燃える事だらうと思ふ。(八代)

白崩山の古道に就て

幾度も同じ様な事を繰返すと言つた氣味はある

が、少しでも疑の起る點は、成可く明かにする工夫をした方が、宜しいと思ふので、又々此問題を取扱ふ事とする。

白崩山—甲斐の駒ヶ岳の信州方面の一異名である—の登路に就ては、本誌では第二年第一號百五十一頁に且、T氏が發表されたのが最初の記文であると思ふ。それは同氏が白崩山に甲州方面から登つて、その頂上から、信州方面を瞰下して臆測された説であつて、實地を踏まれたものではないが、參考の爲に一寸紹介すると、『戸臺から黒川を溯り、右折して野呂、黒兩川の分水脊に達し、左折して尾根傳ひに白崩山の頂上に近づく』と云ふ案である。それが實際に信州方面から行つて見たら、本誌第三年第一號及び第二號に載せた記行の如く、『黒川を溯つて左へ切れ、尾白、黒兩川の分水脊に達し、右折して尾根傳ひに白崩山の頂上に行く』のが登路であつたのである。

處が本誌第七年百二十六頁に紹介した、高橋白山氏の登白崩嶽記にある白崩嶽の登路に此路が該當し無い様に思はれる。尤も其由は右記文を

紹介した折に附記しておいた。此白崩嶽が白崩山を指すものだ云ふ事は疑ふ餘地は無いのであるが、其登路が一致し無いらしいと云ふ事は、一寸妙に思はれてならぬのである。で其の一致し無いと云ふ點は、分水脊に到つた時に『至是河水見二派、東流者爲甲斐早川、西流者、即小黑川也』とある點である、此小黑河は自分の云ふ黒川と同一の者であるから、此記文は前記且、T氏の臆測説——此説は實は大部分白山氏の紀行から導かれたのである——に勢力を添へるのであるが、其處に於て『山皆白砂、松皆五葉』である云ふ序景があるの、それが如何にも都合が悪い事になつて、且、T氏の臆測説に自分は一致し兼ねて居たのである、と云ふのは、且、T氏の説は黒川から目下北澤峠として知られた路を登つて（分水脊は池ノ平に當る事となる）更に尾根傳ひに登つて行くものと考へたので、池ノ平では其序景がまるで該當し無いからである。

然るに、昨年武田、木暮兩氏が夏の旅行の一部に於て、前岳及び白崩山に登られたので、其折の

話を武田君に伺つた處、池ノ平から白崩山に登る路に於て、駒津峰を経て後、白崩の本岳へかゝると、花崗岩の大塊の間を登るので、其岩上處々に、石の佛像様のものがあるとの事であつた。而して武田氏は細かに調べられなかつたので、年代等は分らぬが、兎に角、決して新しい品では無いと云ふ話であつた。

左様すると以前に、白崩山を其西面から登つた人がある事は確かで、石佛を置く位であれば、其數も少なくはなかつた事が推測されるのである。此事の結果は益々H、T氏の臆測説を扶ける事になる。處で武田氏の説によると、同氏の所見では、黒川を其源迄溯つて、駒津峰と白崩山との間に登つて來る事は、不可能で無いらしい、この事である。其處で、白山氏の路は黒川を溯つて、白崩本岳の直下迄來て、其處で「河水見二派」事となつたとすれば、『山皆白砂、松皆五葉』も充分符合する事になつて、甚だよいと思ふ。

即白崩山には黒川を溯つて、右折しないで、直に白崩の下に達し、西面からヒラを登つて頂上に

達する登路が、昔はあつたと推斷されるのである、斯くすれば白山氏の記文は充分それと合ふ事を認め得る様に思はれる。

然し、白山氏は數年前迄健全で居られた御方故、其紀行は非常に古いとは思へない、『辛巳秋』とあるから文政四年で、ともあらうかと思ふが、左様すれば九十八年前の事である。で自分が前に書いた黒川から左折して登る路を案内して貰つた男は、今から五十年餘り前から白崩に登つたので、白崩行者の案内した男であるから、自分の通つた路は、やはり以前から存したので、又其途中の祭神などから推して、決して誤つた路では無いと思へる。而して其案内著——高遠の篠田興一——は他に白崩山としてこの登路がある事は知ら無かつたのである。

すると石佛迄置く位に榮えて居た白崩の古道が、白山氏の登つた折には確かに知られて居たのに、それから四十年たゝぬ中に人が知らぬ迄になつて、他に登路が求められたと云ふ事になる。登山路は折々變るとは云條、これは如何も妙に思は

れるが、妙だからと云つて、白山氏の記文を誤りだとするには當らないと思ふ。

篠田老人は尾白、黒の分水脊に登りついた處——此所に刀利權現が祠つてある——から頂上を経ずに摩利支天の峰へ行く「お中道」と呼ぶ路があつたと自分に話した——此路は本誌第七百二十三頁に紹介しておいたが、頂上の右にしても、左にしても、偃松の盛な様子から考へて、それをからむ路は甚だ覺束ない。之が自分の聽をこないで、黒川から刀利權現へ登る口——こゝに垢離場があつて、何か祭神があつたと思ふが、充分記憶して居ない——から頂上を経ずに直接摩利支天の峯——白崩山の奥ノ院——へ行く路が昔あつたが、今は荒廢した、と云ふのであつたらば、それは此古道——頂上に着く前に右折して直接に摩利支天へ行く事の可能な事は、昨夏武田君がそれを實行された事に據て明白である、木暮君は曲らずに頂上に登られたから頂上に行き得る事も明かだが——の事を指したものに當つて甚具合はいゝのだが、自分は聴き違へたとは思はぬし、「お中道」の名が夫では少々不

當ではあるまいかと思はれる故、古道として、更に此「お中道」の存在を加へるべき事になると思ふ。

黒川を其奥迄溯る事は、嘗て木暮氏が誤つて之を遡り、七八町も骨を折つて辿つて見たが、非常に困難であつて、殆ど不可能の様に思へた、と木暮氏は自分に話されたが、川添ひの路は年々崩れ方等が異なるから、これは古道の存在を否定する材料には成るまい、古道が何故に廢されたかを語る材料にはなるであらうが。

自分の通つた登路も、其後更に甚しく荒れたと云ふ事であるから、目下では寧ろ黒川から右折して北澤峠に登り、池ノ平から左折して登る路が最よい白崩山の登路で、刀利權現を経る路も追ては古道になるのであらうかと思はれる。

序に記しておくが、原口亨氏は「赤石白峰山脈縦横記」の十三頁に「……駒ヶ岳は、人も知る有名なる白崩山である……」と書かれたが、白崩山と云ふ名は通用する範圍が甚狭い名で、今では寧ろ一古名と云つた方がよい位の名である、自分の調べた所では斷言し得るので、決して有名な名で

はないのである。此記文に於て自分が其名を用ひたのは引用の便宜上であつて、決して信州方面で此名が廣く通用すると云ふ事を示すものではないのである。高遠邊では、東駒又は東岳と云ふ名の方が通つて居る。(梅澤親光)

北相の一角

去年の冬は暮のうちから飛出して、年賀といふ虚禮を避けると同時に、憶れて居た山々谷々の景色に、都會の空氣に疲れ切た頭惱を一新しやうと豫てから地圖を相手に大計畫をたてゝ居たが、旅行者を左右する一大威力である天候は、出發を一日々々と遅らせてしまつて、とかくする間に新年となつてしまつた。それも元日の午後から暴風雨が起るといつた天候で、毛頭新春らしい氣分にもなれず、病上りとも言つた調子で一兩日を過すうちに、俗用といふ奴は遠慮なく襲つて来る。自分の唯一の慰安は、裏の小高い地溜に上つて、雪化粧をした秩父の山々や大菩薩の連嶺を、双眼鏡を

通して窺ふ外なかつた。三日四日五日と晴天が続く。六日の朝も例によつて山を眺めると、黒嶽山頂の東に面したガレは、眞白く瀑を懸けた様に現はれて、其の周圍の黒木立さへ大分雪を被つてか餘程白味がゝつて居る。一千五百米突を僅に突破する三頭山は積雪の模様もなく、其の後に屏風の如く聳える大菩薩の連嶺とは自ら色を異にして、斜に投げ懸けられた朝日の光に照らされて、常よりも浮出して見える。其の右方に頭を擡げる御前、大岳の兩山は、暮に降つた雪も残りなく消えたのか、晩秋の頃と同じ様な色彩で、まだ冬の味を知らぬと言つた調子である。仙元峠の方は高距は少いが、さすがに秩父の關門であると共に、附近に相應の尤物を控へる爲か、鹿子斑の程度はもう通りこして居る。七日八日も晴れては居たが、寒中にも似ず辰巳の風が吹いて、寒詣りの喜びさうな薄ら暖い陽氣に、再び天候の變化を氣づかへたが、八日の夜は月が被つた大きな傘に、果然翌日は雨となつて、其の夜は而も強い風さへ吹きつた。十日も寒い北東風が雨を飛ばして、山では

また雪だらうと思はせる。其の夜は東風に雲切れた空に、九日の月が瞬時顯れたのみで、十一日は復雨を以て始まつた。其の夕風はまたも辰巳に變つて、月光は折々雲間を漏れたが、十二日も曇り勝で小雨さへ降るといふ頼もしからぬ天氣。それでも夜には西南西の風に空模様も稍恢復の徵が見えて、月影さへ力強く輝いた。

都會に降た四日の雨は、山では果して雪であつた。雨上りの美しい十三日の朝、双眼鏡を手にして例の地瘤に登つて見ると、積つたもく山といふ山盡く白装して居らぬものはない位。推測するどころ一千米突以上の地點は盡く多少の雪に蔽はれて居る。十四日は東北の寒い強風に頬を切られる思をして、双眼鏡の中に魂を打ち込んだが、春から秋までは何となく平凡に見える低い山々さへ、時を得たりと言はん許りに威厳を示して居る。雨にぬれて弛んだ神経が急にピンと張つて來て、自分の魂は煤烟に濁つた空氣を突抜けてもう雪に白い山の膚に觸れる様な氣がする。『北に遠ざかりて雪白き山あり』どころではない、西に近く雪白き

山があるのだもの。

小 佛 越 え

十五日の雪空は東京だけであつたらしい。西の山々は雲にも包まれず輪廓は淡いながらも判然と認められる。低い所の雪は充分溶けたらしいが、御前の肩から風張峠に引いた長い尾根は未だ中々白く光つて一日や二日では山麓の陰や枯葉の下では消去らうとも思はれない。都の空を蔽ふた薄墨色の雲は、西南西の風に運ばれて、夕方迄には大分姿を隠してしまつて、夜には空は名残なくはれ渡つて、星斗爛漫月皎々翌日の快晴を思はしめる。今年になつてから已に半月、徒に山を遠望するのみで未だ一步も近づき得なかつた自分は、もう矢も楯もたまらない様な氣がする。二十日迄に仕上げる約束の仕事を一晚でやつて了つてから、手近の地圖十枚許りとリュックサックなどを取揃へて、何時でも出發の出来る用意をする。

十六日の朝、神経が緊張して居たせいか、日常よりも少し早く目がさめる。早速庭の小丘に上つて見ると、此處から望まれる山は残りなく現れ

て、偉大なる吸引力を以て自分を引よせる。同行の約もなければ、もう俗用に引留められることもない自由な自分は、直に出立ときめる。

幸中央線の二番列車に間に合つて、割合に空虚な室に腰を下した自分は、先づ地圖を擴げて旅程を考へる。出發が急であつたのと、降雪の關係上昨年未の計畫等は全然實行され得ない今日、高度の割合に少くて眺望のよい山地を、氣のむいたままに歩いて見たいのが主ではあるが、大體に於ては武州の西南境を目がけて居るのだ。しかし地圖を見ると兎角わるい癖で、旅程はそれからそれへと延長する。同行者か天候かが檢束して呉れない以上、奔馬の如き自分には到底いゝ加減な所から引かへすなどいふ神妙な考は浮ばない。切符は淺川迄である。まゝよ久しぶりで高尾山へでも登つて見たら先の考もつくだらうと、萬事臨機應變主義の自分は、八王子、上野原、五日市の地圖だけ衣囊に入れて置いて、あとは皆リュックサックに入れる。今度はその代りに『山岳』の秩父號を出して讀む。一人旅の自分に嚮導となつて呉れるのは

此の號に載て居る武藏通志で、同伴となるのは先輩諸君の執筆された秩父紀行や感想等である。

疾くないことを以て特徴とする中央線の汽車も、何時か東中野を通りすぎて中野に近づく、武藏野に特色を與へる、樺の巨樹や杉林の間から、秩父の山々が顔を出す。左は御前や大岳あたりで限られるが、直その右に仙元峠附近の高い峰がいくつとなく重り合ひ、有馬山は銀の大屏風の如く、其の右端は急に鳥窪峠に落ち込んで、復直に一千三百米突に近い一峰を起し、僅に凹んで更に武甲山を起して居る。汽車が進むにつれて、其の東に大霧山や笠山が、低いながらも相當の威嚴を以て蟠つて居るのが、冬枯れた武藏野の雜木林などの間から明に認め得られるのは、一層山へ行くといふ氣分を興奮させる。

立川を出てから汽車の左側を見ると、丹澤山塊の山々が、北面に雪をなすりつけた膚を露して何となく威嚇する様に見える。多摩川の鐵橋の上は例によつて秩父の山々を眺めるによいが、其の直西の淺川の鐵橋も敢て悪くはない。尤も雲取や大



む望み(左)山麓及び右岸行連りよ(峠下案)峠田和 下 (山信家は景遠の手右)観音の峠佛小 上

菩薩連嶺の方を望むには多摩川の鐵橋の方が遙に勝つてゐる。

淺川に著いたのは十一時頃であつた。レインコウトの上に重からぬリュックサックを背負つて出かける。甲州街道の大道を西に進むと、正月のせいか盛装した村の女子供が暢氣さうに遊んで居る。午に近い日は暑い程強い光線を投げて、軽いといへ荷を負た背には、汗が滲み出ようとして居る。

淺川で降りた旅客の大部分は高尾行であるらしかつた。自分も其の一人であるのだが、それにしては仰山にすぎないでたちを、村人は異様な目をして見送るのである。幅の廣い街道を四組五組隊伍をなして行く『參詣』の人々は、大抵駒下駄穿で、尻を端折つた脚には紺のバツチをはき、肩には小さい風呂敷包か瓢箪位をかけて居る。そして歸りには笹の先についた高尾煎餅をかついで、赤ら顔して大聲に難談でもしながら淺川驛のプラットフチームに行列して上り列車を待つに定まつて居る。斯いふ人達は冬の間は來まいと思つたのが不覺で、現に一二町先をぞろ／＼揃つて行くのを見

ると悲觀せずには居られない。

『參詣』の連中も可なり達者に歩いて行く。しかし山へかゝる頃には多分一緒になることだらう。うつかりすると『よく御參詣で』といふ様な文句をきつかけに話しかけられて、うまく切り抜けないと、やれ時局がどうだとか、現内閣がどうしたの等のうちはまだよいが、誰が鐵で儲けて成金になつたとか、休戦で船成金が没落したとか、聞き度くもない噂を聞かせて呉れて、折角都會を離れて山に入り込んだ自分の感興を氷點以下に冷してしまふ。

山麓の登り口まではまだ十町餘もたらう、然らば長脚をふるつて參詣連を追越してしまはふかと、策將にならんとする時、フト右に現れたのは舊甲州街道の路である。自分は算う小佛川に沿うて此の道を辿らうと右折して行く。見廻すと幸なるかな此の路を行く者は自分一人、只前方に七十許の村人が、訪問の途上と見えて紋付の羽織に絹のバツチをはいて、杖を頼に霜ぞけのする日向路を行く許り。自分は何となく虎口を逃れた様な、安

神と同時に晴々した気分になつて、足掻も軽く山へ山へと志す。淺川驛から三十分程で、蛇澤の分れ道に著いた。自分は此處から高尾山に登つて、彼の參詣連に出逢ふのは好ましからぬので、眞直に小佛道を取ることにする。摺差の部落であつたか新築の家屋が多い。何でも一兩年前焼けたのださうで、その故でか消防の設備が大層嚴重らしく見えた。

此の部落を過ると間もなく道は急に左折して、景信山から出た山坡の鼻を匝る様になる。右からは景信の裏から流出す小下澤が小佛川に合流する。その上を横切る鐵道のガードの下を、澤に沿つて棧道然たる板道が掛つて居る。自分は線路に上つて近路をする、赤土の小坂路が霜ごけに滑るので、いつか額に汗が出て来る。

小佛の部落を過ぎたのは丁度十二時であつた。已に汽車の中で腹の虫を賣收してしまつてある自分は、平氣で行程を續ける。もとは甲州街道の一栗驛であつたのだが、今は主に養蠶で生活を立てて居るらしく、家構なども相當であるのは嬉しい。

村を離れて十分許り行くと城山の方から出て来る小澤に、ワサビの試植がしてあると見えて、南多摩郡農會山葵試作地と記した標木が立て居る。その右を十二三步上ると、有名な小佛山寶珠寺がある。行基菩薩の草創といふことであれば、彼是一千二百年近くの歴史を有する古刹故（高尾山は聖武天皇の天平十六年即ち西曆七四四年に同じく行基僧正が開いた處といふから、寶珠寺も其の頃の開基と考へられる）、何か什寶とする處の物もあらうかと案内を乞ふたが、二年程前住職が代つたので、それまでは如何であつたか知れないが、今は何物もなしといふので空しく本道に引かへして先を急ぐ。

此處から三四十歩も上ると右から小澤が来る。大久保澤とか呼ぶもので、景信の中腹に植林してある杉材を出す爲めに、可なり奥まで棧道が出来て居る。自分は十幾年か前景信山の頂上から、東に引く尾根を傳ひ、南に切れて此の澤に降りて来たことがあつた、其頃植ゑてあつた杉の若木は、今頃丁度伐採される順なのであらう。自然に放置

された杉の樹齡には人間は到底及ばないが、人間の手に育てられた杉は果敢ないものである。

大久保を後にして上ると、路は漸く傾斜を増して来る、右にも左にも杉が植ゑてあつて、其の蔭に氣の早い落の臺が一つ顔を出して居る。小佛川の上流に注ぐ幾つかの細流を越え、本流の源を左に下瞰して上ると、やがて路は之曲し始める。頗るど關東の平原は狭い小佛川のヴァレイの彼方に展開して、八王子の人家は肉眼にも明である。さすが大東京は淡紫の雲に包まれて、市街は模糊として一々指適することは出来ないが、其の中には虚偽や偽善がコンデンスされて居るのかと思ふと、自分はどう東の方を眺めるのが恐ろしくなつて、片時も早く峠の上から、西に自由の山岳を望みたいと、息もつかないで駆け上る。街道は鞍部を東北から西南に向つて斜に横切るので、峠の上は細長い平地をなして居る。著いたのは午後零時五十分。

明治二十一年測量の二萬分一の圖には、此處に數軒の人家を記してある。又明治十七年發行のハ

ンドブックフオアジャパンには茶屋が二軒あると書いてある。又明治二十一年測量同二十九年修正の五萬分一の圖には道路の東側に二箇の人家が記してある。自分が十何年か前に初めて此處に來た時には、百姓屋であつたか炭焼小屋であつたか、わびしい家が一軒あつたが、今は全く人烟のたえた、如何にも荒寥たる景色となつて居る。それでも西側に桑が少し許り植ゑてあつたが、多分相州の農民が培ふ處のものだらう。峠の上で昔を語る唯一のものは、南へよつた端に立つ四尺許りの標石で、梵字の下に高尾山道、側に寛政七^{乙卯}歲三月日、甲州郡内領、下谷村中、世話人三澤宇兵衛と深く刻んである。彼是一百二十四年の風雨に曝されて、此の嶺上に道しるべとなつて居るのだが、文字には時折朱を差すものと見えて、其の色は鮮である。

やつと山らしい所へ來て、何やら故郷へでも歸つた様な氣がする自分は、霜どけにぬれた路のわきの草株の上に尻を載せて、脊中の荷物を投出すや否や双眼鏡で西を眺める。富士關とか富士嶺な

どの異稱のあるだけに、道志の山々の背後に峠つ富嶽は、只一掴みに出来さうに近く見える。しかし自分の心を第一に惹つけたのは、八面玲瓏の富士ではなくて、笹子峠の上に現はれた扁べったい三角形の山だ。銀よりも白い雪に蔽はれた胴腹を、龍が爪で引掻いた様な大ガレを幾筋か見せて居る白峰山脈の白河内岳（二八一二米）は即ちそれである。其の直左には三〇四七米突の荒川岳が、それもべつと雪をなすりつけた膚を天空に聳やかして、觸つたら手が切れさうだ。最高点から其の北の測量標石のある峯へのつながりが、恐ろしく幅廣く見えて、宛然農鳥山の頂上に似て居る。絶巔から北荒川岳へ續く尾根に、ポツンと銀釘の頭の様に持つて居るのは、恐らく大井川の東俣と北俣とそれから荒川の南谷との三方へ水を振分ける邊の岩峰であらうが、あの峰の南面であつたかスイスアルプスにでもありさうな壯大な岩壁が北俣の上流に臨んで直立して居るのだ。荒川岳の左は笹子から南へ續く尾根が立はだかつて邪魔をして居るが、それがだら／＼と摺張峠に低下する

ど、二八六五米突の蝙蝠岳が得たりと顔を出す。蝙蝠の直左には小河内岳が幽に見えて、雪の光も鮮でない。小河内の直左に微に頭だけ出す雪の峰があるが、多分は西河内へ續く尾根の一部でもあらう。鶴ヶ鳥屋と大幡山とはほど重なつてしまふが、其の直右に金字塔形の尖峰が雪に輝くのは、三一四六米突の惡澤岳で、此處から見える赤石山系中の最高なるものである。是等の高い峰は、今日もあの鋭い光を以て、三百萬の人間がウヨ／＼して、中には乗れもしない電車に鈴生りになつたり、虎の嘯く様な蠻聲を出す自動車に蹴飛ばされて居る東京市をのぞいて居るのだらう。

大井川の奥や富士川の源に聳立する山々を一通り眺めてから、双眼鏡を膝に置いてホットして額の汗を拭つた。午少し下つた許りの日はちりちり照りつけて、寒中とは到底思へない位、景信の方からソヨ／＼吹いて来る冷たい風も丁度心持がよい程である。リュックサックを引寄せて蜜柑を出して、バスケットと一緒に頬張りながら、今度は手近の山々を眺める。笹子峠の直右には瀧子

山（一五九一米突）が頂上に一寸鉦目を入れて、戸隠から見た焼山の模型と言た風に控へる。それが鎮西ヶ丸の連脈へ續く低い所の前に扇山（一一三九米突）が、近い故かいやに物々しく頑張る。一千七百米突内外の峰が屏風の様に續いて、其の北の端が急に低まつて湯ノ澤峠となつてから、其の直東北に赤屋ノ丸から黒岳山（一九八九米突）につながるあたり、又それから雁ヶ腹摺山（一八八〇米突）を東に派出して、其の尾根が南に引くところにはボツリと高まつたのが一五一四米突の姥子山であらう。丸岳（一七七七米突）は權現山（一二一二）の蔭となつて見えないが、黒岳山の北肩雁ヶ腹摺はその右に現はれる。それから右に續いて二〇一四米突の峰を最高點とする小金澤山の長大な脈が見え、一度低まつてから小菅大菩薩峠及其の北の二峰を起し、再び圓んで今謂ふ大菩薩峠となつてから、其の右には妙見山から此の連嶺の北鎮二〇五七米突と註さるゝ大菩薩岳へ連るのが、何れも深く雪を被つて、銀で鑄た波濤の如く立並んで居る。

山の景色に見とれて、小一時間も費してしまつた。リュックサックを背負ひ正してから、小佛峠を西に下り初めたのは一時四十五分。下りにかゝることもう足は相模に入る。初めは一寸急で、日蔭には霜柱が未だ解けずに居る上を、無遠慮にザク／＼降りて行くと、右の方には景信から陣場につゞく尾根が漸く其の全容を現して来る。十五分も下ると傾斜が少しは緩になつて、一軒の百姓家が現はれる、其のトタンに足下から犬が飛出して恐ろしく吠えつくので、犬除を兼ねて地名でも聞かうと、其の百姓家に入ると、驚く可し奥座敷の鴨居の上には、通常の家なら三峰山の御札でもあらうといふ處を、これは又何の爲か、毒々しい押繪のついた十四五枚の大きな羽子板が、ずらりとかけ並べてある。主人夫妻（？）はまたひどく不愛想な人達で、わかり切て居る土地の名など聞糺すは怪しからんと言た顔付き、成程此の主にして此犬ありかと、怖氣をふるつて、それでも敬しく禮をして出かける。此處は中峠と呼ぶのださうな。

道は畑の間を眞直に行て、それから急に左に之

曲して下る。右から小澤が一つ現れたが、その狭い谷に棕櫚が澤山栽植してあつて、四周とは著しくかけ離れた光景を呈して居る。何となく香港あたりへでも行た様に感ずるが、シュロは勿論熱帶植物ではない。

左手の谷は城山の方からの水を綜めて、終りは右のシュロの澤と合流するのだが、此の谷間には彼の鐵道が敷れてあるので、隧道の口からは薄霞の様にたえず煤烟を風のまに／＼吐き出して居るが、其の不調和なこと到底シュロなどの比に非ずだ。

二時十五分底澤に下りついた。細い流れが古生層の黒っぽい岩の上を流れて、時には小さい瀑をかけて居る處もある。澤の右岸を鐵道に沿うて五六分も下ると、今の甲州街道に出る。桂橋といふ木橋で底澤を左岸に渡ると、人家が三四軒あつて、千木良村に屬するのだと思ふ。だら／＼と上ると、直に桂川の谷が眼前に展けて、對岸には間ノ山が標高四百米突の山としてはちとえら過る位に控へる。街道を二三丁行くと、左手に善勝寺とい

ふ寺が赤松の間に見える、その入口の所から右に桑畑の間を行くと、今度は急に路がわるくなつて、オートミールの中でも歩いたらこんなかと思はれる位。鎮守の社の側を通つて、短い木橋を渡ると、右手にはもう人家が並んで居る。社から一丁半も來てから右に曲つて復一丁程も行くと、忽桂川の岸に出るが、北岸だけに南の日を受けて、隘い路は幸に乾いて居る。

川原まで七十米突許りある絶壁とも稱す可き崖を、細い徑を傳うて下つて行くと、眼下には渡守の小舎が見える。此處は千木良村の字原村の下に當るので、渡しを俗に原下の渡しと呼ぶさうな。渡守の親爺は眼も口も引鉤た、見るからに恐ろしい人間で、夕暮などに一人きりで渡して貰ふのはちと薄氣味がわるい位。著いたのは二時四十五分で、まだ日暮には間もあるが、少時躊躇して居る中に、幸ひ一人の同船者が出來た。

石 老 山

原下の渡しで同船した人は此の界限に住むものと見えて、地理に精しい上に甚だ親切で、その御

蔭で奥秋から間ノ山を越えることに決める。桂川の右岸の土も石も皆凍つてカチ／＼した急な路を、自分が先になつて昇つて行く。足駄履きの連れはこんな路に馴れて居るのか、いやに曲りくねつた路をスタ／＼上るので、兎角靴の滑り勝な自分とは後から追はれる様になつて、息もつかずに直上七十米突許りの崖を駆る様にして上ると、間ノ山の北麓の寒さうな斜面に、奥秋の人家が現はれる。部落の西端に近い人家の間から、間ノ山から流れ出る細い谷の左岸を、眞上に見えるモミソを目當にして上れと教へられて、此の若い嚮導者と右左に袂を別つたのは、丁度三時であつた。篋で引いた山の清水が農家の前の桶に溢れるのを一掬して、一と息入れ乍ら立留る。奥秋の主部は此の谷の右岸にあるらしく、その方から蓄音機の響が聞えて来る。今浪花節が終つたところで、引つゞいて越後獅子が始まる。曲こそ違へ、こんな麗かな午後にはグラモフ・ホウンを聞くと、何やら日曜日に英國の田舎へでも行た様な気がする。しかし今日は木曜日だ、さう／＼日本の田舎は毎日日曜な

んだつて。

地圖に記してない細い路を辿つて、澤の左岸に沿ふて狭い谷に入る。暫く行くと路が二岐して、左のは澤に沿ふて杉林の中に入る。自分は教つた通り右にとつて、少し上ると目標のモミソの所に出た。こゝから頂上までは一本道と聞いて居るので安神して、雜木やス、キの間を上ると、左手の澤を距てた對岸に犬の聲がする。見ると二三頭の獵犬が主人をおき去りにしてス、キの斜面をかけ上つて居る。鳥などは一羽も居さうもない此の小山に來ては、犬も中々に退屈なのだらう。里から二十分許りで尾根の上に著いた。石老山は正面に現はれて、標高は無論其の背後に聳える丹澤山塊には比べもならないが、間ノ山よりは三百米突も多いだけに、可なりな高さを保つて居る。道は幾筋もあるが、少し左に廻つてから南に下る。ノイバラやサルトリイバラが折々ズボンをつへて引戻すが、路は細いながらも明瞭故、南を指してひた下りに下る。山頂から二十分程で鼠坂に著いて、厚木街道を横斷する橋の袂に出た。橋を

渡れば篠原へ通する道となるのだらうが、左角の農家で炭俵を編で居る老婆に道を聞いて直前の小徑を下つて本道に合した。これは與瀬驛で甲州街道から分岐して、厚木を経て藤澤に通する縣道なので、道幅も廣く立派なものであるが、鼠坂で間ノ山と石老山との裾が衝突して小さな分水嶺をなすので、共に桂川に落ちる水ではあるが、此處で西と東に分れることになる。街道を東に下り氣味に辿ると、五分許りで右側に寛政七年に建てた石老山と記した標石の立つ所に達する。此處を右に曲つて、一旦小溝まで急に下つてかち一寸した山坡を霜柱をふみ鳴して登ると、やがて關口の部落が石老山の東北麓に點在するのを見る。石老山塊は可なり偉大に見えて、それから東南に當る大體同じ程の高さの山（地圖に六七六米突の標點を記せるもの）に續いて、思つたよりもいかめしく構えて居る。示道標をたよりに關口の部落から石老山顯鏡寺の裏門をさして、雜木に挟まれた坂路を上ると、間もなく山腹に建てられた古刹に達する。厚木街道から半時間程かゝつた。

庫裡に入て荷物を置いてから、双眼鏡だけを肩にして直に奥の院に向ふ。山門を出ると直ぐ其の右に偉大な石窟があつて、中には冷水が點々と小石桶の中に滴下して居る。例によつて金剛水とか何とかいふ名をつけられて、小さな竹柄杓が備へてある。これを出ると右の方に可なりな大きな公孫樹があつて、それに大さ幾何とかいふ様なことを記した札が、關口村の青年會の手によつて建てられてある。其の他では讓葉や椎や何々櫻と言つた名木には皆札があつて、其の由緒因縁古事來歴やら、事實と同一かどうか保證の限りではないが、明細な寸法書などが書添えてある。しかし是等の名木よりも興味のあるのは、彼の大石窟を始めとして山中所々に露はれて居る巨石で、辨慶の何とか石とか、鏡岩とか天狗岩とかいつた大石が、數限りなく存在する。何れも一見の價值あるもので、東京の縁日でさへ見られる讓葉や公孫樹の比ではない。岩質は此の山塊を構成する礫岩であるが、斯様な大きな岩塊が風化もせずに露出して居るのは面白いと思ふ。古生層の石灰岩が主であつた小

佛峠をこえて來た眼には、尙更面白く感じたが、後で考へると間ノ山も亦礫岩であつた様に思はれる。

顯鏡寺から四丁許りで奥の院に達する。そこには屋根岩とか名けられた大石の下に飯綱神社の小祠がある。信州の飯綱山では今は何を祭神としてあるか覺えないが、少くも此處では羽團扇を紋所としてある以上は、高尾山で崇むるものと同じく天狗であるに相違ない。奥の院から少し進むと、路は右に折れて、巨岩の上に百尺亭々たる赤松が一株ある、側に小札をたて「巖上の松」と命名してある。此處から上はもう大木はなくて、山は主にス、キや小さな雜木位が生へて居るに過ぎない。しかし昔は自然にか又は植林されてかは知る由もないが、兎に角巨樹鬱蒼たる山であつたらしく、其の名残として山頂に近く大木の枯れた幹が見えて居る。

樹木がなくなると共に心に浮んだのは山頂の眺望で、恐らくは高尾の見晴山に勝るも劣るまいと想像したので、時間はあまり早くはないが絶頂に

昇ることゝきめてしまう。幸ひ小徑が明について居るので、それを辿つて一二丁上ると、此處でも見晴臺を建てるのかして、小さな平坦な地を選んで地ならしをしてある。東から北へかけての眺望は無論よいが、此處らでは到底我慢が出来ないから、山頂を目がけて突進する。右には桂川の谷を下瞰し、其の彼方に連亘する山脈を眺めながら、兎も角も頂上へと急ぐ。路は大體に於て歩きよいが、折々例の礫岩が霏爛して小砂利となつて居るので、足が後へ戻る所がある。初めは路が大體西を指して居るが、十二三丁も上ると漸く西南々に向ひ初めて、概して尾根の西側を搦みながら上る事になる。一二ヶ所焚火の跡などがあつたが、樹木がなのいであまり山らしい感じが起らない。漸く頂上に近づいて傾斜が増して來ると、山の北面には去歳の雪の消残りが、所々にこびりついて居る。流石に小佛よりは高いことが知れる。路はやがて陸測五萬に記した「石」「老」兩字の間を通り、約六百七十米突の所を、「老」の字を頂く六百八十米突の圈の東南に沿ふて行くことになる。

初めは此の圈の所が頂上らしく見えたので、路から離れて其の頂に上つて三角點を索めやうとした時、尙小鞍部を距て、前面に高い峰があるのを見て、急いで急坂を駈下りて最高點を目がけて可なり急な傾斜を上りきると、路はもう牧馬^{まきめ}の方に下る許りで、此處が石老山塊の最高點海拔七百米突の地なることを知つた。時に午後五時十五分。以前は登山といふと山の大小高低に拘はらず、大抵午前中に山頂に達するのが普通であつた様に記憶するが、去年の夏以來兎角午後になつてから山嶺に立つ機會が多く、鹽見岳の三時半はまだよいとして、北岳や仙丈岳の午後五時に至つてはちと遅すぎる感があつたが、今年の初出としての最初の絶巔も亦決して早い方ではない。しかし石老山ならば山も小さいから大して心配もないが、日の短い此の頃ではいくら暢氣な自分でもあまりゆつくりしても居られない。

先づ眼の前に現はれたのは、道志川を夾んで峠つ山々で、其の背後に聳立する富嶽は申す迄もない。大群山から毘廬ヶ岳(蛭ヶ岳)に續くあたりに

は、黒い雲が卷いて、黒つばい山廬を半以上も蔽つた雪が凄い光を放つた居る。大山の北背にも雪は中々に少なくない。僅ではあるが小佛峠よりも南に寄つて居るが爲に、南都留の山々が重疊して赤石山系の尤物を隠してしまふが、瀧子山から大菩薩岳に連なる長大な連嶺は、生憎光線の工合が悪くて細かい皺は分明しないが、小佛で見ると雄大な感じを與へる。奥秩父の山々は一五二七米突の幅廣な三頭山が頑張るので見えないが、大洞山の直東から梅澤山、雲取山へかけての連脈から、下つては七石山から入奥山(陸測地圖の鷹ノ巢山)に續くあたりは、遺憾なく望むことが出来る。近くは三頭から高尾へ續く細長い脈は極めて明瞭で、只三國山以西の鶴川と南秋川との間に介在する部分が少し豎になるのが缺點である。所謂御前山塊に屬する大岳山は、陣場ヶ峰をこえて一寸頭を出す、御前山自身に至つては連行峰の彼方に極微に峰頭を見せて、辛じて其の存在を示して居るにすぎない。峠を東に轉ずると、夕靄に包まれた相模野を背景として、相模川の雄大な谷が

打展けて居る。左には大平山から七國峠に連なる多摩川と相模川の分水嶺が城壁の如くに現はれ、其の南を相模川が悠然として流れる。其の右岸に嶋の如く顯然たる小山は根小屋の城山であらう。近くは道志川が桂川に合する所に架したペンキ塗の橋も手に取る様に見える。其の先には川和の燈火であらうか二ツ三ツちら／＼眼につくが、空を仰ぐともう宵の明星が輝いて居る。

足もどのひどく暗くならない中に下山しようと思つたが、最高點よりも西北によつた少し低い峰にある筈の三角標石を捜して見やうと、御苦勞にも其の方に足を向ける。枯薄やら小灌木やらに交つて赤松などのある峰頭をあちこち索めたが、櫓は存在しないし薄暗がりではあるので、どう／＼發見し得ない。しかし標石に無限の執著があるのでもないから直に斷念して歸路につくとした。凍つた雪の上や砂礫のザラ／＼して居る所は兎角足を奪はれ勝で、半以上は駄足で下りて來たので存外時間の方では捗が行き、彼の岩上の松に來たのが五時三十分。その少し下から右に打れて、往

路とは違ふ路をとつて寺に歸著したのは同四十分であつた。庫裡に入て汗を拭ふて居ると、渴いた喉には持つて來いといふ冷たい茶を供されたので序に空腹をも醫して置かうと、佛前にでもありさうな大燭臺の下で、行厨の残りを食べてしまふ。十五夜の月はもう上つたと見えて、障子の隙から皓々どさし込んで居る。

食事をしながら考へて見ると、同じく天狗が祀つてあるにしては石老山は高尾山よりも面白い様だ。山麓を除いては樹木のないのは遺憾千萬ではあるが、山が高尾よりも複雑で、頂上から峰傳ひに東南に續く六七六米突の峰にも行かれるし、又茅戸であるが爲に中腹以上の眺望殊に相模川の谷を下瞰する處は申分がない。加之高尾の様に氣違ひみた參詣者がぞろ／＼來ないのも嬉しい。矢張寺が山麓にあるだけに吾々にとつては餘計に有難味があるのだらう。

新編相模國風土記稿を見るに、下の如き記事がある。少し長いが後遊者の爲にもと思つて、茲に引用することにした。著者に迷惑を及ぼさなければ幸である。(木暮)

石老 勢幾呂字。古戦録ニ石瀧ト記ス。 山 山ノ中腹ニ顯鏡寺及岩窟虚空藏堂アリ。抑山ノ大較ヲ謂ハ、東方初地ヨリ一板橋ヲ渡リ、總門ニ入ル。是ヨリシテ磐石往々ニ兀立シ、巖徑ヲ攀チ躋ルコト八町計、一寺アリ、是ヲ顯鏡寺ト云。夫ヨリ虚空藏堂ニ至ル。岩窟ニ 窟口三丈許。高六尺。深三間餘。 虚空藏ヲ安置ス。石像長七寸、香州界ノ扁額ヲ掲ク。事跡詳ナラズト云ヘドモ、寺記ニ據レバ、仁壽元年草創ノ地ナリ。例祭二月十三日。武相甲ハ勿論、他ノ州郡ニ及マデ、祈請スルモノ多ク群參セリ。靈驗著ルキ由ヲ傳ヘテ、小兒蟲留加持ノ守護符ヲ出セリ。是ガタメニ參詣ノ徒常ニ路ニ相望メリ。岩窟ノ側ニ三靈水 手向水。金剛二神木。地木杉。水。無名水。 アリ。是ヨリ而上ハ増々盤回崇峻、或ハ水ヲ横タヘ、或ハ石ヲ蹈テ登ル事八町許ニシテ、頂ニ至ル。一祠ヲ立ツ、扇額ヲ掲タリ。 一面三行ニ愛宕大權現、無繩大權現、正石王大權現ト並ベテ。拜殿ヲ設ク。結構機閣ニシテ三方ニ櫓ヲ設ク。 祠後ノ盤巖殆ンド厦屋ノ如シ。左ニ徑アリ、木ヲ横ヘテ登ル事數十百歩、一祠アリ。 金毘羅ヲ祭ル。 凡山足ヨリ山上ニ至ルマデ、奇枚舉ニ遑アラズ、最其

名アルモノハ、駒立岩 高三丈五尺。横五丈五尺。 屏風岩 高三間。横三丈。 八方石 高五丈四尺。横二丈。 雷電石 高三丈。横一丈五尺。 大試岩 高一丈五尺。横一丈。 小試岩 高二丈。横三間。 天狗岩 高三丈。横一丈五尺。 蓮華石 高一丈。横二丈。 鏡石 高三丈五尺。横二丈。 吉野石 高三丈。横一丈五尺。 ツムキ石 高二丈。横一丈五尺。 女石 高二丈三寸。横一丈五寸。 阿呼石 二一ハ方三丈。横三丈。 凡是等ナリ。殊類異形絶珍恠アリ、山ノ名石老ト呼モ亦宜ナラズヤ。實ニ縣内 津久井縣。 ノ一奇境ナリ。

看板は出ては居るが品物はないといふので繪葉書は買へず、せめて寺の縁起か山の案内記の有無でも聞糺さうと思つたが、佳職夫妻は何やら多忙らしかつたので遠慮することゝし、只厚く謝禮をして此處を出たのは正六時であつた。月あかりに照された小徑を再び關口に出て、やがて厚木街道に合したのは六時二十分であつた。今夜は劍舞の催しがあるとかで、青年會館らしい貧弱な建物へと子供等が四方から集まつて来る。鼠坂の部落には旅宿はないので、此の附近では東阿津へ出るか北與瀬に行かねば宿泊の便はない。自分の考では甲州街道の古驛吉野に赴かうと、縣道を北へく

と下り氣味に進む。月は明るいが未だ高く昇らないので、間ノ山の陰になつて街道には一向に光りが届かない。併し縣道は其幅三間もあること故無論迷ふ虞もないと安神して、只道のよささうな所を拾ひながら歩いて行く。右は間ノ山の裾の崖であるが、左のは小い溪流が數間の下に道に沿うて流れて居る。その一支流にでもかけてあるのか、油の切れた水車の音が、靜な夜の氣を貫いて響いて来る。誰か絞殺される様な悲愴な音で、それが木かげから聞えるのが、昨日完結した許りの綺堂の「人形の影」を想起させていやな氣になる。自分足早に街道を下つて行くと、行手には桂川の河原が月光に照し出されて、砂礫の間を勝瀬に通する路がそれと認められる。陸測五萬の地圖では此の街道がやがてはそこへ出る筈故、只餘念なく進行を續けて居る中に、何時か桂川に架した長蛇の如き吊橋に出てしまつた。月影に地圖を見ても一向に要領を得ないので、まゝよと橋を渡つてから、左岸の桑畑の間を屈曲する街道を辿ると、道は漸く上り氣味になつて、左曲右折の後終に與瀬

に出てしまつた。時に正七時。

偶然與瀬に到着したものの、此處に泊ては翌日の行動にやゝ不便を感ずるので、斷然吉野に向ふことゝして、幸近道を教はつたので崖を下りて直に川岸に出た。川に沿うた廣い道を川上に數丁行くど、鮎漁案内の招牌などを掲げた家が二三軒あつて、もう直に勝瀬の渡場である。月は漸く高くなつて、靜寂を桂川の流れを照し、舟の動搖と共に立つ金波銀波の美しさは、此の世のものとも思はれなかつた。霜を含むだ空氣は、夏の水氣あるものと異つて、體中の神經を盡く鋭敏にせずには置かない。間もなく對岸に達して舟を捨て、勝瀬の部落に入つたが、吉野へは再び桂川を渡る必要がある。携帶の地圖に倚るのが何やら不安になつてしまつたので、月光に憧れて夜路を徘徊して居た青年に教へられて、難なく吉野の渡場に到着した。此處は前の程好景ではない様であるが、月光はあらゆるものを美化してしまつて、目なれた桂川とは思はれない位である。さうく先年久しぶりで歸朝した折、下の關から夜行へ乗た處が、丁

度満月の晩で、瀬戸内海に沿うて走る汽車の窓から深更まで美しい月景色を讚美して、やつぱり日本は美しい國だと、歐洲から途連れになつた日本人と一緒にゐて賞讃したが、翌朝日が出てから京都へ著いた處が、いやもう見すばらしい穢なげな市街で、加之變にうすのろい人間共が生ぬるつこい言葉で會話をしたり、京都大學といふ名ばかりえらさうで、實は和製のビスケット見た様な、バラック式建物の中に曳すり込まれて、全くうんざりしたことが幽に記憶に残つて居る。何事も月夜に限るものとつく／＼考へさせられてしまつた。

渡船や何やで手間取つたので、吉野に著いたのは七時半をまはつて居た。それでも未だ宵の口なので往來して居る人も大分ある。それに道を教へられて當驛第一等の旅宿だといふ中村屋を、驛の西端に索めて入込むと、これは御生憎様今夜はもう遅いので風呂を抜いてしまつた、折角なれど郵便局の少し下手の何々屋へ行つて呉れまいかといふ御挨拶。ひどく古驛の面目を發揮したものだと思

つたが、萬一他の宿にも風呂がなかつたら復戻つて來て泊めて貰ふことに約束して、兎にも角にもど教へられた家を尋ねる。此處でも旅客は一人もなくて、臺所を片付けてそろ／＼寝ようといふところ、加之風呂は愚か食物もないと宣告されて、す／＼またさつきの家に舞戻つた。

それでも中村屋では大層親切に待遇して呉れて、早速湯を沸すやら飯を温めるやら始める。其の間に自分は顔や手を洗つてまづ炬燵に入つて足を温める。冷たい空氣の中を耳が凍るかと思はれる様な思ひをして夜路を辿つて來た揚句に、炬燵にあたりながら温い晩飯を食つたのですつかり蘇生の思をしてしまつた。あとで冷たい生鶏卵を喰ると寒中にストウツにあたり乍らアイスクリームを食た昔の事を思ひ出す。一時休んで地圖を見ながら翌日の行程を大體定めてしまつてから、二階の室に引上げて温いそして特筆の値ある清潔な寢具に體を包んだ時には、何となく此の宿が自分の爲めにかうして存在して居るのかの様に思はれてならなかつた。

生 藤 山

古いところでは農商務省地質調査所の東京圖幅を始め、測量部の輯製二十萬に、武、甲、相三州の境に當つて三國山と記してあつたものが、陸測五萬(五日市)が出づるに及んで生藤山と改まつてしまつた、のみならず其の名の讀み方さへ吾々のサークルでは近頃迄不明であつた。此の邊の地理を記したもので生藤山の名の見えて居るのは、自分の知つて居る處では例の武藏通志で「山岳」第十一年第一號一二二頁、軍茶利といふ山の異稱としてあつて、而も三國山とは別に取扱つてある。同書によると此の附近には尙茅丸山、連行峰などの峰があるといふ。さあさうなるともう直に行て見なくなる。勿論石老山の岩や樹の様には等の峰頭に一々札が立て居て、自分の様な無鐵砲な人間が一人で出かけてもいきなりわかる譯でもないが、それ程種々の峰が區別し得るとなると一寸其の地だけでも見て置き度い。昨日も小佛峠から此の連脈を傳つて見たかつたのだが、時間が遅かつたので、まづ陣場ヶ峰か遠くも和田峠まで達すれば

よい方なので、殊に陣場迄は時間がかゝる割合に平凡であつたことの記憶があるから、横道をして石老山へそれてしまつたのだが、今日は是非共生藤山をつきとめて見たいといふ希望がある。

停車場前の何々館などといふのと異つて、古驛の宿では早立ちなどを望むのは無理でもあるし、寒いのに早く飛起るのもちと恐縮なので、時間は萬事先方まかせといふことにして置く。それでも六時半には起きて焚付けたらしいから、七時になつたので温い床からはひ出すことにする。下で火を燃すと恐ろしく烟る二階なので、急いで下へ降りて見ると、もう日が山の端にさして、天氣の申分ないことを示して居る。表へ出て見ると昨夜降つた霜は雪の如くに白く、水鉢の面には厚氷が張りつめて居る。洗面を済すともう炬燵に火が入て居るので、早速あたることにすると、宿の娘が後から羽織を著せて呉れる。東京の生活から考へると朝から炬燵に入るなどは實に贅澤な話だ。吾々の如きものは寒くともやつと手の先を火鉢にかざす外は、寒中だとして何等暖房装置のない室内にふ

るえて居なければならぬのだ。左なくばずつと高尙なガストウツか電氣ストウツを用ひることになるが、料金が法外に高いのは別問題としても、室内の器具や造作は甚しく損する上、辻村君の言草ではないが喜ぶのは天井裏の鼠ばかり。日本の家屋には矢張炬燵が相當して居るのだ。それを體裁を氣にしたり見得を張たりして用ひずに居る都會の生活は先づ愚なものだと思はれる。

炬燵の中で朝飯を食つたりなどして、ひどく氣が落著いてしまつたので、宿を出たのは八時半になつてしまつた。國道から右に切れて澤井に通ずる道の角まで送つて貰つて、五六間坂路を上ると右から轍のある可なり幅の廣い道が来る。和田峠を馬力が通ると宿で聞いたのはちと誇大に過ぎると思つたが、兎に角和田の部落までは荷車の通ふ程のよい路である。鐵道の踏切をこえると路は澤井川の左岸に沿うて下り一方になる。二三丁も行くと右側の崖に金比羅などの石碑が建ててあつて、そのわきから温い清水が湯氣を立てゝ湧出して居る。澤井川の河原には田が少し許り出來て居

る、そして其の下流を街道が横切るあたりは數十丈の懸崖で、極小規模の靜の樣になつて居るあたりは、草木の葉のある頃は一寸見るに堪ゆる景であらう。吉野から二十分許で澤井川を渡つて日野の部落に入る。旭は平和な村落に暖かい光を投げかけて、如何にも新春らしい氣持になる。此の邊では大人も子供も今日は破魔弓を作るに忙しい。雄竹を割て弓を造り、簀などに生て居る箱根竹を四本そろへて矢を造り、之を恭しく山の神に上るので、二十一日の未明に四方に向つて射るのだといふ。今しも向の農家から一組の萬歳が出て來ると、四五人集まつて日向ぼつこをして居た若者達が、萬歳サンは初めてだから何か御目出度い物を安くやつて貰はうと言ひながら錢をやる、二人は眞面目で何か謳ひ出す。日野の鎮守御岳神社は左手の山腹にあつて、數十階の石磴の上に立派な鳥居が立つて居る。御岳神社の直手前から左に小徑があつて、丘をこえて關野に達する間道だといふ。

日野から數丁上流には中里といふ何となく感じ

の悪い部落があるが、これを過ぎるとやがて右から栃谷川が出て来て、澤井川に合流する所に字落合の部落がある。澤井川の右岸にある鎮守の春日神社の側には小學校があつて、始業時間に間もないのか大勢の子供が橋を渡つて行く。これを見るとどうしたものか急に自分の小學時代を思ひ出す、そしてその頃よく學校で出鱈目を教はつたことを思浮べる。中學校で習つた出鱈目の分量は尙更多い様だが、子供の時から頭にしみ込んで居る誤謬の一つは、日本の氣候に關することであらう。今時そんな馬鹿を教へる學校は日本にはたんとあるまいが、吾々の時代にはよく海洋的氣候で四時春の如しだとか、又は極めて温和であるとかいふことを吹込まれたものだが、これは只に自分の通つた學校許りではないと見えて、今の中年以上の人は大抵平然として日本の氣候の温和なことを口にして居る、中にはさう言はないと氣が濟まない様なものもあるらしい。日本の責任ある御役所の鐵道院で、遊覽外客の爲に出版した「遊覽日本旅客指南」といふ支那文のものを拜見すると、氣候と

いふ條下に次の如く記してある。日本之氣候。均屬溫和。絶無嚴寒酷暑之甚。しかし段々先の方を讀んで見ると、流石に事實を白狀しない譯にも行かないと見えて、以臘正二月。爲冬期。此季除各地温泉及沿海温暖之地數處外。概皆寒冷である。春は無論よいに相違ないが、夏の所はかうだ、以六七及八月爲夏期。而六月雖稍覺炎熱。加以梅雨。而天氣陰鬱。人心或爲不爽。則於七八月及九月上旬時。或登山林。或居海濱。自可納涼而忘暑。これではあまり温和ではない様だ。尙念の爲に同様の書物で英文のもの (JAPAN: Travelers' Handy Guide) を見ると The climate is generally mild all the year round と書出して置いて、其の二三行下には It is too cold in January and February except at same winter resorts…… とある、そして In July, August, and the first half of September, the heat is intense; people flee to mountain and seaside resorts と書いて、初めの mild という形容詞を完膚なく打壊してある。しかし斯様な記事は、自分が今書いて居る批評と同様に決して惡意や無責任を以て爲されたも

のではなくて、必ずや unintentionally に書かれたもので、平たく言へば cannot help writing so なのである。子供の時から再三再四さう教へ込まれるものだから、もうそれがすっかり頭の中へ染込んで居て、日本の氣候のことを書くとなると、恰も instinctively に「温和」と書いてしまふが、これは決して其の文字通りの意味ではないのだ。教育の効果も亦偉大なるものと思はざるを得ない。

朽谷川を小さな木橋で渡つたのは九時十五分過ぎであつた。此處で路が二岐して、一つはどこまでも澤井川について和田に出るものと、一つは國境の尾根をこえて（といふと大層意味あり氣に聞えるが）武州の案下^{あんげ}に出るもので、之を明王峠と呼ぶのである。自分は依然澤井川に沿うて上ると、間もなく上澤井の部落に來る。此處からは正面の前山の間に生藤山の方が現はれる。自分は早速上野原と五日市との地圖を展べて見て居ると、杖をつきながら通りかゝつた老人が話しかける。山へ行くのだといふのを聞いて昔三國山あたりへ登つた話を始めるので、これ幸と正面に槍ヶ岳然と聳

える茅戸の山を尋ねると、それが豫て名ばかり聞いて居た茅丸だといふので、自分は跳上らない許りにして喜んだ。其の左（即ち西）の肩にある鋸の齒寧ろ鮫の齒の様な凸起の中腹に、昔から津座^{つざ}明神が勧請してあつて、其の祠へは繩で下らなければ容易に達せられないものだといふ。三國山はそのずつと西によつたところにあるので、茅丸よりは低く、頂上には丁寧なもので三國の境界の杭が立てあるといふ。生憎此處からは前山の陰になつて三國山は見えないので、單に談話だけでは分明し難い。軍茶利様はその三國に續いた所であると言ふので、頻りに拇指を山に見立てゝ説明して呉れるが、いくら聞いても要領を得ない。しかし茅丸の右（東）に續く連行はそれと指示して貰つたので直に分明してしまふ。自分は此の老人に厚く謝して一と足先に行く、別れる臨んで私は今年七十一歳にもなるのだから、言つた事には嘘偽はないと保證して呉れた。

上澤井から數丁進むと、本流は稍右に曲り、小流が左から合流する、其の少し上手で道は木橋を

渡ることになる。地圖では和田に行く道はどこまでも流れの左岸に通じて居るが、近頃は新道が出来て、此處（字上河原^{かみがはら}）で一度右岸に移つて間もなく左岸に渡り返す様になつて居る。先程の老人は此處から左に切れて下岩^{しもいわ}から上岩^{かみいわ}を経て三國に登れとすゝめて呉れたが、自分^{おれ}は少し本流に沿うて進んだら、或は三國山を下から眺めることが出来はしまいかと考へたので、橋上に地圖を展べて一覽した上、兎も角も和田に向ふことにする。其の序に茅丸、連行等の峰を地圖上に摸索して見ると、五日市圖幅に生藤山九九〇、七米突の記號のある所で、その數字の尾端の右に當つて道路が國界の記號の南に記してある峰が茅丸に該當し、其の右東に到つて此の道路が急に左折する處が連行の北裏に當るので、此の峰は五日市と上野原との兩圖に跨つて居る。高距は一千米突を少し超えるが、茅丸よりは少し許り高い様に思はれる。三國山の本體は地圖に標石の記號のある箇所ではなくて、それよりは少し西に寄て居る。三頭山から東南に派出した長い屋根が、武甲の境を走つて三

國山に達し、此處からはまた武相の境を走つて主脈は陣場や景信山から小佛峠を経て高尾^{たけびし}の西の城山^{やましろ}に續き、多摩川と馬入川との分水嶺を形作るが、武甲の境では大日峠（笛吹峠）の東の丸山（一〇九八米突）迄はよく一千米突以上の高度を保つに反し、それ以後では漸く低くなつて丸山の直東の一峰と其の又東の笹平尾根（一〇〇五米突）とのみが僅に一千米突以上である。此の脈は栗坂峠の附近で最も低下するが、それ以後では漸く高度を恢復し、武相境の茅丸、連行に到つて掉尾の勇を奮つて再び僅なりとも一千米突を突破して居る。そして連行峰は實に武相境の最高峰である。上河原から先は路は漸く爪先上りとなるが、谷が狹まるので山間に入たといふ感じがして来る。右は陣場ヶ峰から西南に凸出する村界の尾根であるが、左には谷を距てゝ小山の中腹に點在する農家が見える。上河原から二十分許上ると、下岩から和田に通ずる道路が對岸に現れて、それが流れを渡る少し手前に小學校らしい家屋が眼につく。その少し上手で左から佐野川（又鎌澤）が和田川

と合流して居る。此の邊まで来れば三國山が顔を出しさうなものと考へて居たが、對岸の山裾に遮られて姿を顯さず、遂に其の希望は水泡に期してしまつた。合流點の西岸にはこんもりした森があつて、中には鎮守の八幡祠があるといふ。此處からあと數丁で和田の部落である。行手には立派な道が左曲右折して國界の屋根へ上るのが見える。自分はそれを和田峠の道かと怪んで、折柄來合せた青年に尋ねると、和田峠の北數丁の地點を過る醍醐峠であると教へて呉れた。勿論これは地圖には記入してないもので、和田の部落を出て間もなく案下峠の道とわかれ、案下峠が谷間を行くのと異つて明るい山のヒラを上る様になつてゐる。此處に言ふ案下峠とは所謂和田峠のことで、案下に通するところからかく呼ぶのだが、小原町の底澤から案下に越える道にも案下峠と謂ふ名がある。此の外尙相模の北境から案下に達する峠は、朽谷川に沿うて上る明王峠と、陣場ヶ峰の直南東を通る南郷峠とがある。明王は峰の名にとつたもので、南郷は陣場のおつかへしが南郷だといふ處から斯

様な名を得たものだといふ説明を聞いた。若し案下で聞糺したら是等の峠には更に別の名がつけられて居ることだらうが、未だ其の機會のないのを遺憾とする。(其の後此の邊を再探して大に得る處があつたから、委細は次號に記す考へである)。

兎に角和田迄來たこと故、此處から案下峠なり醍醐峠なりの道によつて境界の屋根に出て、それを傳つて生藤山の方に行て見たくもあつたのだが、小いながらも佐野川の狭い谷が何となく氣を引いたので、急に方向變換をやつて和田川を右岸に渡ることにする。一旦急に川まで下つて復急に對岸に上ると、山腹には平坦な路が佐野川の左岸に通じてゐる。顧て東を望むと根張りのある陣場ヶ峰が直目睫の間に迫る。やがて佐野川を渡つて鎌澤の人家が現はれると、北には連行峰から茅丸山一帯の地が仰がれるが、三國山は依然として姿を見せない。此處で山の様子を尋ねると昔し軍茶利様を勸請した峰は三國山の西に當るやゝ低いものであるが、今は其の祠を鷺山とやま即ち佐野川と境川との分水嶺の尾根で、三國を経て檜原村に通ずる

道が南北に走つてゐる尾根へ移して、此處を軍茶利様と崇めてあるといふことが判り、又生藤山とは三國山と同一だといふことをも教へて貰つた。

此處から數丁鎌澤の右岸を上り、熊野神社の側から西に折れて小流を左に見乍ら上ると登里といふ平和な小部落に出る。時計はもう十一時半を指して、日向の暑いことは到底寒中とは想像もつかない。路傍には南天がまるで野生の様な状を呈して生へてゐるが、其の赤い實は鳥も啄去らないのか累々として美しい。山にはカシハの木が澤山あるが、半野生的と思はれた。清水が絶えず溢れてゐる井戸で冷い水を思ふさま飲んでやつと甦た思をして、序に辨當をとも考へたが、日向が如何にも暑いのに避暑して日蔭を索めながら登里の南の坂路を登ると、此處からは北に茅丸から連行へ續く峰、それから東にまはつて醍醐峠が判然と顯はれ、案下峠は陣場の北の山蔭に隱るゝ邊りが、丁度真南から照る日に一木一草まで明に看取出来る程である。日蔭ではないが山の端で涼い風が吹くと、路傍に大木の幹が二ツ三ツ轉してあるので、

これ幸と此處で休憩することにする。本來登里から直西に墓地の傍の小徑を登ると軍茶利様に出る筈に聞いて居たが、偶然こゝに登つて眺望のよいのに却て其の僥倖を喜んだ。此の道は古くから佐野川と上岩との交通路で、其の中途から分れて三國山をこえて檜原村に出る主要な道であるから、古い五萬の地圖にも立派に記してある。

散々眺望を貪つてから零時五分いよいよ出發する。小し上つてから右に曲ると忽ち南が展けて、富嶽と其の麓に蟠る群山が一望に集るのは愉快である。大體西を指して下り氣味に山腹を傳ふと、下岩からの道に會する。此處に馬頭觀音の如き小石佛が立て居て、右側には「右 さの川道 享和三癸亥歲」左側には「左 飛の原みたけ道 十二月日」云々と刻んである。自分は年代崇拜家ではないが、斯様な山路に百十五年も前に立てられた道しるべが、そのまゝに遺つて居るのに出逢ふのは寔に嬉しい氣がする。

上岩よりの道に合してからは大體北に向つて登るのであるが、右の方の眺がない代りに左には大

菩薩の連嶺が現はれて、其の前に立はだかる扇山と權現山が極めて分明である。殊に權現山は甚だ雄大で、其の北裏には残雪斑々たるものがある。少し行くと道が復二岐して、そこにも古い小石が置かれて右山道、左ひのはら道と深く刻まれて居る。此の邊からは路が幾本にも分れてはまた合するが、その中で極右に寄たものは山路らしく、濫ニ生藤山ニ於テ草木ヲ探ルベカラズ云々の標木さへ眼についた。此の杭には生藤にセイトウと振假名があつたが、シャウトウと云ふ方が正しいと考へられる。上るに従つて道は尾根を通る様になるので、木立を通して右の方陣場から生藤山に連る方が見えて来る、しかし三國山は今自分の登つて行く尾根の蔭となつて全く望むことが出来ない。枯れた薄やカシハなどの雜木の間にはノイバラが大分あつて、雪解に滑つてあはてゝ掴むとひどい目にあふ。九百米突の圈に入つてから間も無く相甲兩州の境になるのだが、此の邊からは左右の眺望が益々よくなると共に傾斜も少くなるので、山を眺めながら歩いても左まで足元の用心はいらな

い。それでも上り一方なのと午少し過の日を背負つて居るので暑いこと甚しい。時折カシハの蔭などにある残雪を口に入れると、丁度夏の土用中に高山の上で残雪を得て元氣を恢復するのと同じ様な心持になる。

佐野川と井戸澤の分水嶺のカシハや若いミヅナラなどが雜生してゐる尾根を、散々登つていよいよ少し下りとなると、正面に現れたのは久戀の三國山で、三頭山から東南に引いた武州西南境の長い尾根に此の甲相境の尾根が丁字形に繼がる所に、土饅頭の様な形で、頂に笠松が一本ある小山が夫である。其の直右には例の三角點のある峰が少し豎になり、一旦回んでから茅丸の尖峰となる。三國山にはミヅナラが多く、中には可なりの老木も見える。自分はもう嬉しくなつて雪に滑る路を駆降ると、小鞍部があつて右側には直接佐野川に下る間道の下り口でゝもあるか標木が一本立て居る。檜原へ越える馬道は三國山の南側を通つて、其の次の三角點のある峰の北側を廻り、再び茅丸の南腹を眞一文字に横切つてから復も連行へ續く

方から北側を縫うて行く。自分は三國山の絶頂に登らうと、馬道から別れる小徑を求むると、其處には何を祀つたのか骰子形の高さ一尺餘の石祠があつて、神酒でも捧げたものか小さい竹筒などが五つ六つ、中には新しいものも見えたのは、今でも參詣者のある証據である。茅丸の西腹に祀つた津座明神の祠を後年此の嶺上に安置したことがあると耳にしたから、或は此の小石籠が即ちそれであるかどうかが後來闡明を要することゝ思ふ。(其の後これは現今では山王大明神と崇められてあることが分明した)。

若いミヅナラや其他の雜木の間を廿間許も上ると、直に頂上の笠松の下に著いた。時に午後一時三十分。自分は直にあたりをあるき廻つて國界の標木を求めたが、遂に其の片影をだも認むることが出来なかつた。しかし地勢から按じてこれが三國の界にあることについては毫末も疑を挟むの餘地はないのだから、安神して再び笠松の根元に腰を下して一休する。眺望は茅丸其他で東の方を遮斷される外、北、西、南にかけては實に雄大であ

る。しかし同じ連脈の小佛峠と違つて赤石山系の方が眼に入らないのは残念である。一と通り遠景を眺め終つてから近處の地勢を見る。土饅頭の如き形をした三國山は小さい峰で、直其の東に連るのは南又は北から遠望すると大岳山頂から望んだ日光の女貌山然たる形の峰である、これの西端の凸點に九九〇、七と測れた三角點があつて、三國山よりは三十米突近くも高いであらう。此の峰の東には二つ三つの鋸齒をこえて直に茅丸に連り、更に稍下つて頭の平かな峰を経て、それよりも高い連行に續くのである。此の茅丸と連行との間の峰はロウグチと聞いたがそれにあてる漢字は不明である。三國山の西では連脈が西北に折れて一度グット低まり、更に隆起して、三國山よりは少し低い、頂上の扁平なそして一株の大きなミヅナラのある軍茶利山となるのである。行政上から言へば連行、ロウグチ、茅丸、其の西の一峰は武相の境に立ち、軍茶利は明に武甲の境に位するものである。

事の序を以て解決して置く必要のあるのは例の

生藤といふ名稱である。若し地圖上に生藤山と記して測點を置いてある峰に此の名を専有させることゝすれば造作はないのだが、さうすると此の名を以て軍茶利山の異稱とする武藏通志の記事に牴觸する。そこで郡村誌を見ると左の如き記事がある。

三國山 又三國峠或ハ三國岳ニ作ル 南部ニアリ高三百八十丈五尺

嶺上ヨリ三分シテ北ハ本村○檜字南郷ニ東南

ハ相州津久井郡佐野川村字生藤山ニ西ハ甲州

都留郡桐原村ニ屬ス

軍茶利山 シヤウリヤマ 佐野川ニテハ生藤山ト云 同方部ニアリ高三百八十四

丈九尺峰頭ヨリ兩分シテ北ハ本村○檜字南郷

ニ南ハ佐野川村字生藤山ニ屬ス

茅丸山已午ノ間ニアリ高三百九十九丈九尺峯上

ヨリ兩分シテ北ハ本村字南郷ニ南ハ佐野川村

字生藤山ニ屬ス

因是觀之生藤山といふのは決して單獨な峰の稱呼ではなくて、茅丸及びその以西三國山に至るあたりの山峰をかく總稱するものだらうと想像するに難くない。現に前も掲げた通り下岩から三國に通

する道と佐野川から三國に赴く道とが合する少し上手に生藤山ニ於テ濫ニ草木ヲ探ルベカラズ云々の標木を存することから見ても生藤山が只一個の峰の名でないことが知れる、只上記の郡村誌を見て疑問の起るのは、此に謂ふ軍茶利山なるものが、自分が先に述べた武甲界の山とは別のものかと考へられることである。尙こゝに注意すべきは軍茶利を勸請したのは相州佐野川や甲州井戸村でやつたことで、此の郡村誌は武州檜原村で調製したものであるから、其の間に多少の誤が潜入し得ないとは限らないことである。兎に角此の邊の山名は今後尙精細に調査する餘地の存することは言ふ迄もないのである。(其の後武、甲、相三國界の連山を再探りて、是等の名稱や峰頭の高距を調べたから、其の詳細は次號の誌上に披瀝する考へである)。

今日は月の出も少しは遅れる筈であるから山上に長居は不得策故、一時四十分再び結束して三國の山頂を東に下つた。これは三國山の直東で道が二岐して、一は茅丸から連行の方へ、一は急に北へと澤を下るものがあるから、若しや分岐點に示

道標でもありはしまいかと考へたからである。然し其處には何物もなくて、下る方の路はよくふめてはゐるが恐らく炭焼小屋へでも通ずるものと考へるより外仕方はなかつた。自分はこれから茅丸に上つて見たかつたが、時間に餘裕のなかつたのと、西方に見える山々に引つけられたので、三國の南を廻つてから西北に武甲の境を辿ることゝした。三國の西側を下り氣味に進むと正面にミヅナラを戴く軍茶利山が見えて、其の背後にはそれよりも少し高い無名の一峰がある。左右の草木は茂つてはゐるが路はよく踏めて居るので迷ふ恐れは少しもない。左の方の山腹にはミヅナラが大分あつて、それを炭や薪にする爲に樵夫が入込むと見えて二三の細徑が縦横に走つて居る。右は矢澤の支流軍茶利澤に注ぐスズガヲとかいふ小澤であるが、其の一部には少數の桑が植ゑてあつた様に臘氣に記憶する。北側には残雪が大分あつて兎角滑り易い。谷間には炭竈が在ると見えて烟が立上る。軍茶利山の頂上を過るのだらうと考へて居た路は漸く山の北裏に向ふので、左へ簲を排して登らう

としたが、宛然十國峠附近の山の様にハコネダケが繁つて居るので、遂に斷念して路を行くことにする。竹にたより乍ら滑らない様に足元に注意して進むと、雪の上に明に印された人跡と犬の蹠跡とを發見した。恐らく獵師でも通つたものであらう。雪は凍てかり／＼してゐるので、自分の足跡は一向明瞭につかない處を以て見ると、恐らく此の草鞋の足跡は雪の軟い時分に通つたもののゝであらう。軍茶利山と其の直西の無名の一峰は北裏を廻つてしまつたので頂上を越えずにしまつたが、振かへつて見ると山頂を過る路も確に存在する。次に現はれるのは熊倉山であるが、地圖上では路が恐ろしく南を廻る様に記してあるに拘はらず、自分はそれ程の迂回をせずに南側を割合に緩な上りでス、キなどを分けて登つた。これから先は枯薄の上に積つた雪を蹴散しながら路の有無にはかまはずに尾根通りを行く。例の獵師と犬の足跡は折々目に觸れるが、それが無い所には山鳥の足跡が大分にある。熊倉山からの下りは中々急で、此處を滑らずに緩歩出来る人があつたらえらいもの

だらうと考へながら、後から突飛ばされる様な思をして下る。折々立留つては前方の眺望を楽しみながら、半ば駈る様にして降りて行く。高距が少くなるに連れて、南秋川と北秋川とに挟まれる浅間尾根が段々せり出す様に高まつて来る。最後にまた小隆起をこえて眞直にス、キの中を下ると、栗坂峠の立派な道に出た。二時四十分。其處には上川乗の青年會の建てた小さな標木があつて、基本標木を距る二十四町四十八間と記してある。右を見ると自分の下りて來た方向に左官林道といふ小標木がある。三國から熊倉山へかけての武州側を一般に官林と呼んで居る様だが、主として闊葉樹が主と見えて此の頃では大森林とも思へない程のさみしい姿である。

栗坂峠は此の連脈中三國以西での最低所と謂つてもよい位で人馬の通行も盛にあるものと見えて道もよく修繕されてゐる。暫く犬や山鳥や兎の足跡ばかりを見ながら歩いて居た揚句に、急に足駄や靴の跡を見ると都會へでも來た様な氣がして少少有難迷惑の氣味だ。道は其の直西の隆起を半周

して再び鞍部へ出る様になつて居るので、差當りこれについてかち／＼凍つて居る道を西北に下り氣味に三丁許り行くと鞍部に出た。此處で先づ目に著くのは老杉三四株、巨大な梅、檜、ミヅナラ、ブナ等の巨樹で、そのあるものには注連を張つて明に神木なることを示してある。杉の根元に石の小祠があつて、其の傍には可なり大きな石碑に馬頭尊と刻んである。祠の側には近頃植ゑられたのかアスナロの若木も見えた。祠の南に小平地があつて、その南は橢圓形の隆起であるが、昔からこの邊には栗樹が多かつたので、峠の名もそれによつて起つたのだが、十年許り前にも大分伐つたといふから其の結果でもあらう老木はあまり見當らなかつた。石祠は即ち淺間明神を祀つたもので、武甲の境にあるので境の宮と稱すといふことが甲斐國志に出て居る（山川部第十六 中）。武州側から登りつめた所には近年上川乗で建てた大きな標木があつて、これには左上野原方面の道、右三二山西原方面の道と記し、上野原道に面した方には右檜原五日市方面の道と認めてある。又老檜の幹

には墨黒々と三二山ヨリ二十九丁十二間と書いてある。念の爲に申添えて置くが、三二山とは山名ではなくて、桐原村字猪丸附近の一部落で、其處には旅舎もある。(此の鞍部から三二山に下る路に淺間峠といふ名があるらしい)。

急な傾斜を駆ける様に降りて来て足がぐ／＼して了つたので、境の宮の所で休憩して一息入れる。さすがは寒中だけあつて未を下るご日の力も弱くなつて、じつとしてゐると薄ら寒い。自分は此處から更に國界の尾根を傳て三頭の方に近づきたかつたのだが、熊倉山から望見する處を以てすると大日峠迄でさへ随分の距離があつて、而も大同小異の隆起を上下すると例の仙丈鹽見間の馬鹿尾根に伯仲するらしい、眺望も始終大同小異だらうとも考へたし(惡澤の方が見えたとにしても夕暮に近づく光線では到底判然と認め得られない)、それに日暮れて旅舎なしといふ様な所に下り著くのも閉口なので、縦走を斷念して檜原に下ること決定した。さうなれば時間にも少しは餘裕が出来るのでゆつくり休んで兵糧をつめ込み、吉野で

仕入れた蜜柑を平げでリュックサックを軽くしてしまつた。

上川乗に向つて境の宮を出發したのは三時十五分。道には一丁毎に標木があつて上川乗からの距離が示してある。四五丁下つてから右に瞰てゐた熊倉澤を離れて左に坂本澤を見下し乍ら降る。此の谷にも炭焼が入つて居て大分木を伐たらしい。境の宮から十四五丁も略々尾根傳ひに來た道は急に右に折れて、白褐色に崩れた山王澤に面した斜面を之曲して下つて行くと、目の下には南秋川の左岸に建てられた上川乗の人家が現はれる。道は終に山王澤を横切るが、水は此處では地下を潜行して流れるらしい。彌々南秋川の川原に出る時例の水は再び地表に現はれてワサビの作つてある間を流れてゐる。丈夫な丸太橋で南秋川を渡つて對岸に上ると、此處には彼の里程標の元杭があつて國境より二十四丁四十八間と記してある、三時五十五分。其の少し上手には美しい杉林の中に伊弉冊尊を祀つた立派な鎮守の社が見えてゐる。道路はよく修理されて荷車が自由に通行し得る程であ

る。村には可なりな人家があるが旅舎は一軒もなく、此の附近では下は檜原本宿か元郷迄、上は三里か數馬の小字猿倉まで行かなくては旅宿はないといふ。就中本宿の橋本屋が最良のものと聞いたので、約二里半の道を膝栗毛に鞭をあてることにする。

下流に向て二三町も下ると、上川乗の部落を兩斷するマンナリ澤が淺間尾根から流れ出して南秋川に注ぐので、そこには促橋と名けられた可なりな木橋が掛つてゐる。部落が盡きると復左から不動澤が南秋川に注ぐ所に不動の瀑といふ小瀑布を懸けてゐる。これから山足をひと周りとすると滑石橋を以て本流を右岸に渡り、又直にミカイシ（見返？）橋によつて左岸に渡り返す。不動瀑から此の邊へかけての景は決して捨てたものではない。間もなく下川乗で、此處では川の右岸にも人家があつて、何處に通ずるのか南に山をこえる小徑も見える。道はドウガハ橋で更に本流を右岸に渡ると、そこには鉅石を削つて富嶽の山靈を崇めた碑が立てゐる。下るに従つて谷が稍開けて來るが、

そこには立派な無名の橋が架してあつて、これを渡ると間もなく出野澤にある出野の小部落になる。此處から道は少し爪先上りとなつて復河に下るが、景は嘆美する程でなくとも悪いとは言へない。道が山の鼻を廻らうとする所に、新しく建てられた農業補習學校があつて、その裏手で奥深く見える矢澤が合流してゐる。道は稍下り氣味になつて、左から流出す大太澤の小橋を渡ると直もう出畑の部落に來る。此の邊は可なり下流の面影が見えて、人家も稍密に立列んでゐる。やがて橋入と呼ぶ澤に架した又土橋を渡ると柏木野の部落で連行峰の裏から矢澤の右岸に派立した長大な尾根を傳つて來る甲州間道は此處で南秋川を渡つて檜原道に合するのである。時針は遠慮なく進んでもう五時を指してゐる。山上と違つて谷間では足元が大分暗くなつて來る。此處から生藤山の峰續きが僅か見えるが、どの部分であるのか見極められない、恐らくは茅丸の北裏あたりではなからうかと思ふ。土地の者に尋ねると三國山の方だといふ、軍茶利はといふとそれはもつと西に寄た官

林の方だと教へて呉れたが、茅丸、連行に至つては聞いたこともない様な顔をする。

柏木野を出て急ぎ足で下つて行くと、四五人連の獵夫が數頭の犬をつれて來るのにあふ。其の二人許りは土地の案内であるらしい。今夜から此邊へ陣取つてゐて明朝早く山へ入るのだらうが、山へ來てまであんな殺生をして何が面白いのだらうか自分には想像がつかない。笹平へ來ることも五時二十分を過ぎて、右側の低い所にある人家から燈火が漏れて來る。道幅は大さう廣くなつたが恐ろしく溼るので泥の中から顔を出してゐる石の上を飛び飛びに歩かうとするが、城ヶ峰の續きで西を遮られてゐるので、夕暮の薄光が届かないから歩が中々捗らない。十六夜の月もそろ／＼上るだらうが、東は白杵山の脈が聳るので、宵暗も同然である。南秋川は醍醐峠の方から流れ出すコザカシ川が合流する爲水量も多く從て川幅も廣くなる。折々景のよささうな所もあるが、夜目には判然としないので割愛して道を急ぐ。五時半笹野へ來る。山間の小平地で人家も可なりある様だが自

分は先を急ぐので素通りする。道は川に沿うて隨分の曲折があるが、概してだら／＼下りなので一向に骨は折れない。折々正面の谷間が開けると、馬頭刈山から西南に派出してのる岩峰が有數の高山らしく顔を出す。用達しだか遊びだか知らないが宿の方へぶら／＼出かける人に遭ふが、自分は無遠慮に追越してしまつて、正六時橋本屋の敷居を跨いだ。

秋川の上流では檜原村の本宿が最成つて居る。その唯一の旅宿も實際宿屋らしい感じを與へる。下駄履や靴よりも草鞋の客が多いと見えて、土間には泥だらけな草鞋がずらりと並列してゐる。いつ見ても脱ぎ捨てた草鞋程穢くろしい感じを與へるものはたんとあるまい。自分は洗足の世話はないから靴の手入れがすむと直に二階の室に通る。床には獵銃の囊だのリックサックに類似した品物だのが散亂してゐるので開糺して見ると、「何鐵砲打が泊つてゐるのですが今夜は山へ出かけて留守ですからかまひません」といふ挨拶だ。段々聞いて見ると、さつき途上で逢つた連中の一

人であるらしい。自分はその「鐵砲打」の空巢へ入つた譯になるのかと思ふと可笑しくなる。今夜は幸風呂に入れたが、其の浴室は至急改造を要するものたること申す迄もない。室へ戻るともう月光が白く射して、障子の隙間から氷の様な風が吹込んで来る。海拔僅に一千尺許であるが、ひどく山間に入た様な氣がする。其の上夕食に出た土臭い山の芋のどろろに至つては野趣最横溢たるものがあつた。

洋燈の下で地圖を一通り見たり、在京の友人に今日の報告を發してから、もう用がないので雨戸を閉て貰つて寝ることにする。恐ろしく堅くて重い夜著を被つて横になると、往來を飴屋が太鼓を敲いて流して来る。いくら月夜でも此の寒いのに精を出すにも程があると思つて居ると、村はづれ迄行てはまた戻つて来ること再三再四どころではなくて終夜に及び、翌朝四時迄自分を苦しめ通した。あとで聞くとこれは火の番ださうだが、静夜では三里も響く太鼓を鳴して數分毎に廻つて来るのでは、神經が二た通りや三通り鈍いのでは

直に目が覺めてしまうから、要するに寝ずに用心して居ろといふことになる。これでは電車の警鐘よりは餘程利目があるだらうが、こんな村に泊り合せた者こそ迷惑千萬なことである。加之自分はあまり太鼓の音は好まない、角力の太鼓、飴屋の太鼓、日蓮宗の團扇太鼓に至つては大々的に嫌だ。

(武田久吉)

机上談山

◇昨夏自分は横濱で講演をする事を頼まれて、「登山の注意」といふ題で聊か辯じて見た。此頃の様

に登山が盛に行はれ、それにつれて山中の設備其他も大層便利になつた今日、登山の準備にくだくだしい注意を述べるのは、雞肋ささへも行かぬ事とは思つたが、念には念を入れる方が間違が少な

いと思つたからなのである。

◇其講演に於て述べた事は、從來語られた注意事項の内、設備が改まり、登山具が變つた等の爲に改廢すべしと思つた點に、然るべく變更を加へた

だけで、取立てゝ云ふ程の事もないが、其終りに自分は、自分から登山者への注意を附加へて置いたことがある。

◇それは主として、登山道德とも云ふべき事柄である。其話の一節に於て自分は斯様な意味の事を述べた。「富士登山者が、砂走を降る際に、多少の砂が伴はれて落ちる、しかし其砂は一夜の内に全部もこの所へ歸つてしまつて、富士の砂は爲に少しも減らぬと云ふ言ひ傳へがある。富士の山靈が、山中の砂一粒でも山を去つて下界へ降る事を惜む事は、斯くの如くである。富士の山靈の心は、即吾人の祖先が此山に對する尊敬の念を些か具體化したものであり、又此の砂戻りの話は、富士のみならず諸方の山にある事から推すと、吾々の祖先には、山を崇み、山を敬ひ、山中の一木一草は勿論砂一粒さへも、故無くして下界に下すまいと云ふ考へがあつたに相違ない。然るに登山者にして往々故無きに山の衣たる木を切り、草を採り、岩石を毀つ者があるのは、實に祖先の考へと裏腹であつて、心ある人の所爲としては首肯し難い事で

はあるまいか云々」といふのである。

◇充分に考へ抜いて云つたのではなく、當座頭に浮んだまゝを話したのであるから、條理は些か弱からうが、兎に角自分には、故なくして岩石草木を毀損する事は決して譽むべき行爲であるとは考ひ得られないのである。

◇またこんな事をも云た。「山に行くとき往々神や佛の像又は祠がある。これは山靈の集る所で、實に崇敬すべき中心である。其處を穢し、其物を損ずる所爲は、常識ある人のなす可からざることなるは勿論、萬一にも斯の如き行爲を敢てする者に遭遇した場合には、宜ろしく之を忠告し若しくは訓戒されんことを望む云々」。

◇道端の地藏に完全なのは殆無い。小供の惡戯ではあらうが、極悪い事であると思ふ。木を折り草を抜き、犬を打ち雞を蹴る。其殺伐な殘忍な小供は皆惡少年である。佛を尊ぶ心は無くとも、人の尊むものを破るのは、言はゞそれを尊む人の頭を踏むのも同じである。これを戒め之を取締らぬのは、放任もあまりに過ぎると思ふ。萬一之を不善

でないと思認める者があらば、惡事の共犯者と呼ばれるのを避ける事は出来まい。

◇まだ話した事は澤山あつたが、これだけの事に就てこゝで少々敷衍して置きたい。近頃登山者が數に於て増加した、此事は、日本山岳會の同人に向つて慶賀すべき事だと、云ふ様な御世辭を再々ならず耳にした事がある。しかしこれは本會の主旨が曲解された爲に見當違の御譽にあづかつたのではないかと自分は思ふ。山岳に關する研究をするには、勿論種々の方面から進みたいのであつて、多くの同志のある事を喜ぶのは勿論である。從て登山の盛況は快い事には思ふ、然し目下の實況を見聞すると聊か危懼を懷かざるを得ないのは遺憾である。

◇山に登る者は必目的を持て居ねばならぬとは自分は思はない、何處から如何登つて、何を見たか空々たる人は、如何にも他人に何の響をも與へない、然しそれで其人が満足して居られるならばそれもよろしからう。然し近年山に登る人の中に無意識ではあらうが他人——眞面目の登山者——に

迷惑を蒙らせるやうな行爲が増加したといふ風聞を、耳にするだけでも寔になげかしいことである。

◇岩石草木は山神の衣である、それを取捨て、山神を赤裸々にする、事が學術研究の爲とあれば、それは忍びもしやう、葛城山の神は醜き姿を恥ぢて、小角の怒をも怖れずに晝は隠れたと云ふ。我の心に山神を容れる以上は、山神は美しく飾らねばならぬ。杖に差間へて、木の枝一本伐りたいのさへ、山神に祈つてその許を得て後に取るべきであらう、無斷で伐つてはなるまい。

◇學術研究の資料と云ふ名が、往々口實に使はれるのは遺憾至極である。平生は自然科學の研究などには餘り御熱心でない方々が、登山する時に限つて甲も乙も一ぱしの研究家になりました様な顔をして、草木岩石の嫌なく手當り次第に採集するのは滑稽である。それもまだよいとして何とか博物學會の會員と稱する青年團が、白馬山で植物を採つて、重荷に耐へずして歸途に棄てたと云ふ話を一昨年聽いた。斯の如きは實に山神に對して

亦甚しいのみならず、一方には學術の進歩に害あつて益なきことである。元來小、中學校、師範學校等で、高山植物等の採集を奨励する如きは、決して我が意を得た事ではない。平地に無い博物の標品を學校に具へたことで、それが生徒の常識養成に何の足しになるであらうか疑問である。動物だとして左様である。雷鳥を獵した者が處罰されなかつたのは、實に聖代の恥であると思ふ、新聞紙等に記文をのせて雷鳥を捕た話を書く者の如き、決して放任すべきでは無いのであるのに。岩石に就ても勿論である。

◆學術研究の名を悪用して、自己の非を掩ふのは餘りに窮策ではあるまいか、殊に學術云々を口にする人の行爲としては嗤笑に値する。動物、植物、礦物を山から濫に拉し去るのは一時の快は得られやうが、折角の美しい山も赤裸にしては後來汗を流して登る樂は絶えてしまふ。山に登つて山靈を感得し、絶大な己れの勞力に對する報償を得ようとなら、吾人は豫め其覺悟を要するや言を俟たない。

◆鳳凰山の地藏佛は、人工の品ではないが、天然の石佛である。人工の品にも増して尊敬の中心であらう。是は實に山靈の具體化である。この岩に登り、此佛を泥足の下に踏む事は、例へば祠に入て神鏡に唾し、寺に入て本尊に尿するの類であるとも見られよう。假令無神論者であるとも亦爲すを憚るべき事ではあるまいか。自分は地藏佛の頂に登つた者があると思ふ度に、その眞でない事を望むだ。記行に文の華として偽を嘗く事は或は恕すべし、しかし此の如き天然の石佛等に強ひて攀ぢ登ることは遠慮して貰ひたいのである。

◆地藏岳に登り、觀音岳に登る事は如何と云ふ人があらうと思ふ、これは地藏の堂に入るのである。觀音の堂に詣づるのである。山に登るのである以上崇敬の念を有たねばならぬは勿論の事であるが、それさへあれば差支へはあるまい。山名に憚る事ではない。總ての山は其山神の廟宇であると思ふ事は決して忘れてはならぬ事である。

◆山の品を下界へ下す事が不可である如く、下界の品は長く山に置くべからずであると思ふ、山に

よつては昔は山麓で草鞋を昇降共に更めさせて、上下の土砂の混る事を防いだのもある位である。登山の糧食を用意する者は、もし山靈を敬ふ念さへあれば、食事や焚火の跡片付は當然爲すべきであると思ふ。

◇登山者に便益を與へる爲の設備は、決して悪い事では無いから、充分に爲すべきである。が然し山靈を穢さぬ様の用意が無くてはならぬ。林道が開かれ、小屋が出来、旅舎が出来て、登山の面白味の減じた山は多々ある。其道や其の家を作る人達に、充分崇山の心があつたなら、そんな結果にはならぬ様に設備が出来た筈なのである。

◇自分は山岳保護を唱へたい。山岳保護は山靈保護である。小島鳥水氏が前に富士山保護論を唱へられたが、富士山に向つて大砲を發射する如き事が、意識ある日本人の所爲とは思ひ得ない事、自分も同感である。大裾野に立つ大煙突や、ケーブルカーの設計や、實に此日本の唯一座を、日本人が毀ち去らんとして居る事は甚多い。然し保護を要するものは富士山ばかりでは無い。多くの山々

は、心なき人達の爲に年々穢されて居るのである。此傾向は我々が慶賀どころか、大に悲しまねばならぬ事である。

◇山名を大切に扱はぬと云ふ事も、山靈に對する一種の侮辱である。地圖や紀行文に於て、地名の誤つて居るのを見ると、引破つて捨てたくならざるを得ない。登路でも左様である。地形でも左様である。山に對して、多くの人があまりに無頓着であると自分は思ふ。

◇紀行文を讀む人に注意すべき事が澤山ある。其内の一つを述べて置きたい。其紀行文の年代と、其筆者の在つた状況とを出来るだけ考へてほしいものである。山の様子は年々變る、自分は、自分が嘗て登つた山の記文を讀で、如何考へても同じ山だと思へなかつた経験が折々ある。年と共に山の有様が變つた爲の事もあるが、又記文に混る其人の感じが、自分と共鳴しないが爲の事も少なく無いと思ふ。自分が同じ場所を二度歩いて、天候が違ふと、種々の事が大變違つて感じられる事から推しても、寧ろ後者が有力なのではあるまいか。

◇原口氏の「赤石白峰山脈縦横記」に就て、第十三年第一號九十頁に木暮氏が批評を物された。自分はそれに更に一二の蛇足を附加へたい。此書の表題は、或は「山岳」第五百三十六頁の「白峰及び赤石山脈縦横記」から導かれたのではあるまいかと思ふ。原口氏が折々「山岳」を見られたと考へられる事實は、此書の中所々に「山岳」から引抜いた材料がある事から自分は左様推斷する。處で「山岳」に掲げられた記文の表題は、確か初めは「白峰山脈を横斷して赤石山脈を縦走するの記」と云ふ題であつたかと思ふ、一寸樂屋話になるが、第五年第一號の編輯會の折に、小島君が此表題は長過ぎるから何とか縮めたいと云ひ出して、結局一番其記文に無責任な自分の當座の愚案が採用されて、前記の如くになつたので、縦横と云ふ成語が無い事は當時から知れて居た事で、中村君が大に氣にされた事を覺えて居る。今更取消しもならず又取消さねばならぬ程の事ではあるまいが、自分の推斷が當つて居るとなると、もと自分にも責任が出て來る事故、外から御叱言が出ない内に、茲

で右第五年九十頁にある記文の表題は不當であると表明して置く事とする。

◇厚口氏の該著には、大日本山岳會と云ふ會が存在する如くに書いてある。然し其れが藏版とせられた寫眞を見、其れの幹事と指された人の名前を讀むと、「大」の字は削らねばならぬものだと思ふ。會の名稱は假令尊敬の意からであるとしても、大角力や大景物と一緒にして、無暗に大の字を冠せて戴くと、却つて難有迷惑で種々の理由から恐縮せざるを得ない。尙本會の稱呼はニッポンサンガククワイであつて、ニホンサンガククワイでないと思ふ事を序に附言しておく。

◇原口氏の該著二十六頁に『……即空氣は上層に於て著しく其の濃度を減する。爲に太陽の赤外光線（即熱線）は夫れを傳導する空氣の量が少いので能く其所に留る事が出來ず、紫外光線（即化學線）が比較的多く作用する事となる……』と書かれたのは、何か據所があるのかは知らないが眞實ではあるまいと思ふ。「濃度」「赤外光線」「紫外光線」は夫々「密度」「赤外線」「紫外線」と書

換へた方が穩かである(氣體の濃度と云ふ術語は甚珍であるし、視覺に感じないものに光の名を用ひるのは不當だらうと思はれるから)と思ふが、原のまゝでもどうやら意味は通らうが、しかし空氣が熱線を傳導すると云ふのは、あまりに物理學を無視した記し方ではあるまいか。熱線が一種の幅射線である事や、空氣が熱の良好なる不導體である事は、中學校を通られた人が充分知て居る筈の事で、「誤り」といふ逃げ口上はドンナ點の甘い先生でも採用はしてくれさうもないと思ふ。而して此文句を平たく解釋して考へて見ると「太陽から熱線が來るとして、其の熱線を——他所へ——傳へて行くものが無い」としたら、其所に熱線が留つて、其所の空氣が熱を吸収して、其所の溫度が高くなる事になつて、著者の論旨とは正反對の結果にならねばならぬ事と思へる。高所に於て紫外線の比較的多い理由は、説明のつく事ではあるが、著者の記述とは全く別な方法に據らねばなるまい。尙化學作用は、其總てが紫外線の爲に勵まされるものでは無いと云ふ事も留意してほしい。

尙、又手近い事を云へば、赤い色の鮮明に見えるには、赤い色の光が必要で、紫外線なんかはいくらあつても赤が無くては無効だと云ふ様な事も考へてほしい事に思はれる。

◇机上談山の一篇を今度だけ借りて、自分の放言の場所にした、何でも山に關する事ならよい筈だから。(梅澤親光)

高山植物雜記(三)

七 ミネザクラ。本邦に野生する櫻品十二の中で、高距の最多い地點に産するものは此のミネザクラである。其の分布は南は赤石山系の高峰から北は陸奥の岩木山に及び、更に津輕海峽をこえて渡島、後志、石狩の山地にさへ見ることがある。北日本では海拔四五千尺の地に生ずるが、中部日本では六千尺以上の地に多く、時にはよく八千尺以上の地にさへ稀ではない。花期は低い産地では五月中旬から蕾が綻び初めるが、高山上で殊に残雪の消ゆることの遅い谷合などでは時に八月の初めにさ

へその花を見ることさへある程で、一番遅くまで花を見得る種類である。

此のサクラは概形がマメザクラに似て居るが爲に、以前はそれと誤認されて、往々マメザクラとして取扱はれて居たのである。然るに去る明治三十四年頃松村博士は之を精査してその同一ならぬことを看破され、植物學雜誌第十九卷九十九頁に於て之を一新種とし *Prunus nipponica* なる學名を附して發表されたのであつた。しかしその當時和名の發表がなかつたが爲に、此の種がマメザクラに似て大形であるといふ處から、牧野富太郎氏はこれにオホマメザクラなる新稱を附し、これが可なり廣く吾々の間に用ひらるゝ様になつた。つい近年に至つてこれにタカネザクラといふ和名を附した人もあつて、この兩名が此サクラの和名として用ひられて居たのだが、理科大學に保存されてある古い標品を見ると、中にミネザクラなる和名のあるものがあつて、此の名が此の植物に名せられた最古のものであることが明となつたので、これを正名として他の二つを異稱とすることにな

たのである。

扱此のサクラの形狀はといふと、高距の少い地では樹の高さよく一丈五六尺にさへ達するが、高山の上では大抵一丈内外にすぎず、時には甚しく短縮して僅々數尺に過ぎないものもある。春新葉の開くと同時に伸長した枝は無毛であつて、初めは淡褐色を呈し後灰色となるが、翌々年になると皮層は剝脱してしまひ、後は美しい栗色の光澤ある樹皮に蔽はれることになる。此の點は本種がマメザクラとは著しく違ふところで、マメザクラでは三年目でも依然として灰褐色を呈してゐる。されば熟鍊した眼ならば此の二種を板のみで識別すること不可能ではない。

葉は花と同時に出で、花時には可なりの大さに達する。表裏両面に微毛があるが、葉柄は全く無毛であることマメザクラと大に異つて居る。充分成長した葉は小さくても長さ一寸幅五分はあるが、大なるものでは長さ二寸五分幅一寸三分程になる。葉縁には深い切込みがあつて、其の各々には更に細かい鋸齒を有することマメザクラ、チ

ウジザクラ又はミヤマザクラと同様である。花芽が開くと中から一乃至三個の花の出ることチャウジザクラと同様であるが、マメザクラでは二個以上の花が現はれることは決してないと申してよい。花は淡紅色を帯び、其の直徑は七八分程ある。花梗や萼は平滑であるが、梗には稀に微毛を見ることがある。萼片の縁はマメザクラでは全縁であるが、ミネザクラでは疎鋸齒を具へて居る。果實は長さ三分程になり、色は黒紫色であつて、其味甚苦味強く、餘程熟したものでなくては口に難い程である。

八 チシマダクラ。早池峰、岩手、八甲田の如き内地北部の高山を初め、北海道では有名なマカカリスプリヤ、南千島のエトルブ島等に産し、更に樺太のス、ヤ山中だとかチベサニあたりにも生ずることを知られて居るサクラである。樹は高さは約一丈程になり、枝は前に掲げたミネザクラと同様で三年目からは紫黒色に變ずる。葉も概形甚だよく似て居るが、往々更に大形となつて長さ四幅二寸に達することさへある。葉柄は同じく短くて

三四分を算するに過ぎないが、褐色の長い毛を生ずることミネザクラと異つてゐる。此の外尙充分成熟した葉でも主な脈の上には同様に毛がある。花は白色に微に淡紅色を帯び、一花芽より二三個繖房花序をなし、通例葉に先立つて現はれる。其の際花梗は僅々三四分で、同じく毛を蒙つてゐるが、花がすむと伸長して一寸以上となり、時には毛が殆んど落去ることがある。萼にも毛が疎にあつて、其の裂片はミネザクラの様に縁に疎鋸齒がある。充分開いた花は直徑八分内外を算し、ミネザクラに於けるよりも少し大きい。

チシマザクラは此の如くミネザクラに近似した櫻品であるが、これが初めてエトルブ島で採集された時、宮部博士はこれを *Prunus Cerceoides* var. *kuriensis* として發表されたが、十年程前に小泉博士は之をマメザクラの變種と考定された。其の頃自分はチシマザクラがマメザクラとも又チャウジザクラ(即ち *P. Cerceoides*) とも異なる點を認め、寧ろ特立の一種とした方が宜しからうと考へ、植物學雜誌第二十四卷一一頁に *Prunus kuriensis* 々

して記載して置いた。其の後シニナイダーといふ學者は硫黃山産の標品を手にするに及んで再びチャウジザクラの變種と考へ、後更に特立種として之に *P. iwocana* なる學名を與へた。其の後小泉博士は岩手山に採集された標品を取てミネザクラの有毛の變種なりと考へ、これに *P. nipponica* var. *pubescens* といふ假名を附したりして、チャウジザクラには種々の學名が出来たが、最近に至つてウ井ルスンといふ米國の學者が更に改變を試み *P. nipponica* var. *kurilensis* といふ學名の組合せを作つた。此の人の説によると、初め宮部博士が *P. Ceraceidos* の變種と考へられたのは尤なことで、同博士が此の學名に當る植物と思ひ込んだものはチャウジザクラではなくて、實はミネザクラの標本であつたのだといふ、故にウ井ルサンの説は宮部博士の説に一致するもので、これだけ調査した結果として、チャウジザクラの學名を *Prunus nipponica* var. *kurilensis* Wils. と變更してしまつた。要するに之を學名製造家の立場から言ふと宜しく漁夫の利を得た譯になる。(武田久吉)

山岳彙報(三)

△常念山脈の冬登山

(前畧) 御會員中にて本月末スキー登山御企に付御照會の趣拜承仕候烏川方面の案内者としては南安曇郡西穂高村大字牧小字庚申堂、寺島今朝市と申す者同方面の地理に委敷候へば同人へ御照會相成候はゞ細大御便宜相計り可申と存候同人は多年獵夫として雪中登山の經驗も有之案内人としては更に御懸念なき人物に御座候但し積雪の調子がスキー跋涉に適し候や否や頗る疑敷御座候尙ほ本月二日當地日本銀行支店員伊藤英三郎氏スキーにて武石峠を跋涉せられ候に付同氏へ御聞合せ相成候へば大畧様子相分り可申と存候。

(大正八年三月十二日信鐵、登山部 中村五一郎)
△松本より島々自動車運轉

陳者愈々登山の期に入り北アルプスの關門たる白骨上高地兩温泉浴客も過般來登山するもの益々多く弊社營業の乗合自動車にて輸送仕居候。
當會社の營業は松本、島々間の乗合自動車にして

毎日午前三時より松本驛着の列車と連絡を取り運轉致し居り候此の線路は御承知の如く從來は馬車を以て輸送致し約五里の里程を半日を費やし候處自動車は一時間未滿にて一日を以て優に兩温泉に到達するを得時間の經濟上と賃銀の廉價とに依り往復するものの殆ど全部は乗車仕候。

登山時期と共に當會社にては特に山岳登山案内部を設置し登山者の便に資したき考へに有之貴誌御發行上にも御一報下され候はゞ時々の調査事項に就き御報告申上べく御案内申上候。尙御參考迄に左に掲載仕候。

松本より終點迄(十里) 壹人 壹圓

にして尙貸切にて隨時運轉を致し貸自動車も營業仕候間獨り島々間のみならず孰れの方面にも運轉仕候。

松本市新伊勢町(驛前)

松本自動車運輸株式會社

(記者曰)此自動車は通路の關係上島々の手前迄にして其村迄は通らぬ由なり。

登山案内者(三)

本欄は登山案内者の改善に資し、一方登山者の參考として特設せるものにして、廣く同好諸君の材料を賜らん事を乞ふ。(係り)

◇白馬岳登山案内者組合

今般當細野區に於て、別紙の通り白馬岳登山案内組合を組織致し、白馬岳を中心として各方面の縦走横斷等の御希望に應じ、確實に御案内致し度候。付ては廣く貴會有力諸賢の御盡力を蒙り、益益登山者の増進を促し度く、吾々組合は此に大々的改革を試み、登山者の便宜を計ひ、且又鄭重を旨とし、善良なる案内者を養成致す心得に御座候間、何卒從前に幾倍の御盡力御引立を切望御願ひ申上候。

大正八年一月廿四日

北 城 村 細 野

白馬登山案内組合事務所

丸 山 岩 司

◇白馬岳登山案内者組合規約

- 一、組合ヲ白馬岳登山案内者組合ト名付ク
- 一、組合ハ白馬岳ヲ中心トシ各方面ヘバ登山案内者ノ強力ヲ以テ組織ス
- 一、組合ハ善良ニシテ敏捷ナル理想的案内者ノ養成ト登山ニ樞要ナル設備ノ完成ヲ以テ目的トナス
- 一、組合事務所ヲ細野區ニ置ク
- 一、組合ニハ主任一名、會計一名、幹事若干名ヲ置キ一切ノ事務ヲ處理シ尙本組合設立贊助者ヲ顧問トス
- 一、組合總會集會等ハ主要ト認メタル場合若クハ組合員五名以上相當ノ理由ニヨリ請求シタル時之ヲ催ス
- 一、組合規約ノ改正共同事業ノ計畫等起リタル場合ニハ役員豫メ之ヲ協議シ總會ヲ開キ賛否ヲ求め多數決ヲトル事
- 一、登山者ヨリ案内強力雇傭ノ需メアルトキハ其指名ヲ主任ニ委セ其供給ニ澁滞アルマジキ事
- 一、加入者ハ登山者ノ荷物ノ負擔ヲナシ其他登山

者ノ爲メ一切ノ勞務ヲナスモノトス

- 一、加入者ハ出發歸宅ノ日ハ事務所ニ立寄リ在否ヲ明ラカニスベキ事

- 一、案内者強力ノ荷物負擔重量ハ約八貫目以内トス

- 一、賃金 一日金九拾錢

他方面縦走横斷ノ場合ハ相當割増ヲ受ク

- 外ニ山中一切ノ生活ニ要スル資料ハ客ノ負擔タル事

但シ賃金ハ年々登山期前ニ一同協議ノ上一般勞働賃金ニ準ジ相當ト認メタル額ニ決定スルモノトス

- 一、加入者ハ以上ノ各項ニ違背アルトキハ組合協議ノ上相當ノ制裁ヲ加ヘ除名スル事アルベシ

- 一、事業基本金積立、共同山小屋設備一切、共同請負事業

◇組合案内者強力心得

- 一、案内者強力ハ純朴ニシテ善良ナル山人ノ氣風ヲ重ジ不徳義ノ行爲アルマジキ事
- 一、登山者ニ對シテハ出來得ル限り親切丁寧ヲ旨トシテ其意志ニ背カズ總テノ勞務ニ忠實ナル事
- 一、規定ノ賃金以上ノ暴利ヲ貪ラザル事

◎雜 錄 登山案内者(二)

一、山中ニ於テハ家族的和樂ヲナシ各爭事口論等ヲ起サ、ル事

一、案内者強力ハ責任ヲ自覺シテ過失ナキ様注意ヲ怠ラザル事

一、案内者強力ハ經驗淺キ強力ノ爲メニ懇切指導ヲナシ後繼者トシテ良案内者養成ニ勉務スベキ事

一、宿泊地ハイヅレモ清潔ヲ保チ後ヨリ來ル登山者ニ不快ノ念ヲ起サシメザル様ニナス事

一、迷ヒ易キ通路或ハ藪茂キ場所等ニハ臨機ノ方法ヲ以テ目標切開キヲ作り置ク事

一、濃霧或ハ暴風雨ノ歩行ニハ絶エズ登山客ノ傍ヲ離レズ呼應シツ、行動ヲ取ル事

一、山中ニテ偶然出會シタル他ノ登山組ニ對シテハ相當ノ敬意ヲ以テ之ニ挨拶ヲナシ若シ質問等アリシ場合ニハ懇切ニ回答ヲ爲スベキ事

一、仲間ノ中ニ負傷者及ビ病人等アリシ場合ハ登山客ニ計リ出來得ル限りノ方法ヲ以テ看護ヲナシ慰安ヲ與フル事

一、濫リニ樹木ヲ伐採シ鳥獸ヲ害シ故意ニ岩石ヲ

崩落セシメザル事

一、主要高山植物ノ繁殖ヲ保護シ濫採セシメザル事

一、善良ナル白馬岳案内者ノ名實ヲ舉グル様心懸クベキ事

一本組合員姓名年齢及熟路

丸山 德 重 四	丸山 利 雄 四
丸山 糸 彌 三	丸山市 三 郎 三
丸山 德 司 三	丸山 文 一 郎 三
丸山 岩 司 四	丸山 元 次 郎 三
太谷 庄 衛 元	丸山 七 左 衛 門 三
丸山 勇 次 郎 三	高 橋 宗 吉 三
太谷 豐 吉 三	丸山 儀 重 三
丸山 政 治 六	丸山 榮 十 三
丸山 武 四 二	倉 科 由 治 元
丸山 善 治 三	高 橋 福 壽 三
丸山 靜 男 二	太 谷 定 雄 元
横山 留 吉 七	高 橋 喜 市 七
丸山 由 松 三	

右の中各方面縦走横斷熟練者

(一) 白馬岳を中心として針の本迄の縦走熟練者
五名

(二) 白馬岳より歸路大黒を經越中劍山立山方面
横斷熟練者六名

(三) 白馬岳より祖母谷を經て越中愛本通り熟練
者十名

(四) 白馬岳より越中猫又谷を經通する熟練者二
名

(五) 白馬岳より越後糸魚川迄の熟練者組合員全
部

(六) 白馬岳より柳又經通小川間熟練者三名

二、案内申込は當事務所に直接御通達下され度願
上候

三、組合の役員及其住所は只今の處正式總會致さ
ず候故近々に執行通報致す可く候(本組合は細
野區を中心として北城村一般有志者を以て組合
員となす心得にて活動致し居り候)

四、組合設立に付ては北城村役場へも又北城村巡
査部長派出所へも充分御相談交渉致し置き候

◇鳥川口と有明口組合

兩組合共信濃山岳會々員の援助と庇護に依りて
成立せるものにして、同會は其監督の地位にあ
るものと云ふべし。斯くの如き計畫の各地に起
らん事を希望して止まず。

◇鳥川口(一ノ澤)登山案内者組合規約

第一條 本組合ヲ鳥川口(一ノ澤)登山案内者
組合ト稱ス

第二條 本組合ハ鳥川口一ノ澤ヨリ各方面ヘ登
山スル者ノ案内人及ビ強力者ヲ以テ組織ス

第三條 本組合ハ登山案内人ノ養成、善良ナル
氣風ノ涵養及ビ一般登山者の利便ヲ圖ルヲ以テ
目的トス

第四條 組合加入者ハ山岳保護ヲ念トシテ登山
者ノ案内、荷物ノ負擔其他登山者ノ需メニ應ジ
一切ノ勞務ヲ爲スモノトス

第五條 組合事務所ヲ南安曇郡西穂高村字牧區
小字荒神堂、寺嶋今朝一方ニ置ク

第六條 本組合ニ事務主任一名、相談役若干名、

世話役若干名ヲ置キ總テノ事項ヲ處理ス

第七條 組合ノ集會ハ主任ノ適宜ニ依リ隨時之ヲ開ク

第八條 組合ノ事業、其他協議事項ハ總テ座談的ニ熟議シ組合員ノ多數決ニ依リテ遂行ス

第九條 組合加入者ハ他ノ登山地ヨリ招致サレタル場合ハ主任ノ認諾ヲ經ズシテ之ニ應ズルコトヲ得ズ

第十條 登山客ヨリ案内人及ビ強力ノ需メアルトキハ主任ハ臨機之ヲ撰擇指名スルモノトス

第十一條 加入者ハ組合基本金トシテ一年一人金五拾錢宛ヲ積立ツルモノトス、其ノ積立方法ト納期ハ主任、相談役協議ノ上之ヲ定ム

第十二條 加入者ニ推獎スベキ行爲アルトキハ主任、相談役協議ノ上基本金中ヨリ相當ト認ムル額ヲ支出シ之ヲ賞與ス

第十三條 加入者登山中、不慮ノ災難ニ遭ヒタルトキハ主任、相談役協議ノ上、基本金中ヨリ相當ト認ムル額ヲ支出シ之ヲ見舞トシテ贈ル

第十四條 案内人及ビ強力ノ荷物負擔重量ハ一人

凡ソ八貫目以内トス、但シ時宜ニ依リ此ノ限リニアラズ

第十五條 主務案内ノ任ヲ受ケタル者ハ其組ノ先達トシ他ノ強力ハ先達ノ指揮ニ從ヒ互ニ同僚ノ德義ヲ重ンズルモノトス

第十六條 賃金ハ毎年登山期ノ初メニ於テ協定シ加入者ハ固ク之ヲ守リ登山客ニ對シ約束以外ノ要求ヲ爲スベカラズ

入山中生活ニ必要ナル資料ハ雇傭セル登山客ノ負擔トス

下山シテ任務終了ノトキ、其解傭地ヨリ歸宅スルノ道程半日以上ヲ費ストキハ相當ノ歸途旅費又ハ日當ヲ申受クルモノトス

第十七條 加入者出發ノ日及ビ歸宅ノ日ハ必ズ事務所ニ報告シ其在否ヲ明カニスルコト

登山期中、病氣ノ場合ハ速ニ事務所ニ申出ヅルコトヲ要ス

第十八條 山中ノ出來事、行程路ノ難易、水ノ有無、露營地ノ適否其他ノ注意事項ハ下山後直チニ事務所ニ報告シ登山者一般ノ利便ニ資スルコ

ト

第十九條 加入者ニシテ此ノ規約ニ違背シタルト
キハ組合員協議ノ上相當ノ制裁ヲ加ヘ其甚シキ
者ニ對シテハ脫退ヲ命ズルコトアルベシ
第二十條 本規約ハ組合員過半數ノ同意ヲ得テ變
更スルコトヲ得

大正八年六月二十日

鳥川口一ノ澤登山案内者組合

主 任	寺 嶋 今 朝 一
相 談 役	宮 嶋 金 一
同	牧 伊 三 郎
世 話 役	小 林 喜 作
同	藤 原 爲 市
同	田 中 伊 十
同	寺 嶋 萬 彌
同	増 田 八 十 吉
同	増 田 傳 市
同	長 田 小 十 郎
同	寺 嶋 松 市

大正八年ノ協定貸金

◎雜

錄

登山案内者(三)

一日一人

金貳圓也

◇有明口登山案内者組合規約

- 一、本組合ハ有明口登山案内者組合ト稱シ事務所
ヲ赤沼千尋宅ニ置ク
- 二、本組合ハ有明口ニ於ケル登山案内者及ビ、強
力ヲ以テ組織ス
- 三、本組合ハ理想的案内者ノ養成及一般登山者
ノ利便ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 四、加入者ハ登山ノ案内及荷物ノ負擔ヲナシ登山
者ノ爲メニ一切ノ勞働ヲナス
- 五、本組合ハ主務者一名相談役四名ヲ置キ總テノ
事務ヲ處理ス別ニ山岳研究先輩ヲ顧問トナシ登
山ニ關スル一切ノ指導ヲ受ク
- 六、組合ノ集會ハ主任ノ適宜ニヨリ隨時是ヲ開ク
- 七、本規約改正ノ必要及其他組合ニ關スル事業ノ
計畫起リタル場合ハ主任相談役豫メ之ヲ協議シ
組合ノ總會ニ諮リテ之ヲ決定ス
- 八、當組合ニ他ノ登山地ヨリ需要アリタル場合ニ
ハ主任相談役熟議ノ上人員ヲ選擇シテ主任指名

スルモノトス決シテ組合員單獨行為ニ出デザルモノトス

九、他ノ登山組合ヨリ招キニ應ジタル時ハ先方ノ組合規約ヲ遵守シ其ノ責任ヲ全ウシ當組合ノ名ヲ恥カシメザル事

十、加入者ハ一ケ年一人金五拾錢宛ヲ基本金トシテ積立ツル事

十一、本組合加入者ニシテ特筆スベキ善行為及登山者ニ満足ヲ與ヘ特ニ推獎サレシ場合ニハ總會ノ際之ヲ發表シ基本金中ヨリ相當ノ賞ヲ與フル事アルベシ

十二、加入者入山中若シ不慮ノ災難ヲ蒙リタル者アル時ハ主任相談役協議ノ上相當ノ見舞金ヲ基本金中ヨリ支出ス

十三、案内者及強力ノ荷物ノ負擔重量ハ通例七貫匁内外トス、但シ時宜ニ依リ此ノ限リニアラズ

十四、登山者若クハ主任ヨリ案内ノ任ヲ受ケタルモノハ其組ノ先達トシ他ノ強力ハ其ノ指揮ニ從ヒ先達ノ言動ニ對シ異議ヲ差挾マザル事

十五、賃金ハ毎年登山期ノ初メニ於テ之ヲ協定ス

先達金 貳圓 大正八年度ノ標準
強力 金壹圓八拾錢

外ニ山中生活ノ一切ノ資料ハ登山者ノ負擔トス(一)、有明驛ヨリ中房温泉迄ハ規定日傭ノ半分以上高地温泉、一日市場驛迄ハ一日ノ賃金ヲ申受ク荷物ノ輕重ニ依リ登山者ト相談ノ上相當賃金ヲ申受クルコトアルベシ

(二)、北安大町方面室堂五色原、立山温泉ヨリノ歸途ハ二日ノ賃金ヲ及信濃鐵道安曇追分、大町ノ往復ノ汽車賃ヲ申受ク

其他ハ歸路日程ニ應ジ相當ト認メタル日傭ヲ申受ルモノトス

十六、加入者出發ノ日歸宅ノ日ハ必ズ事務所ニ立寄り其在否ヲ明カニスル事

十七、山中ノ出來事行程等ハ成可ク速ニ詳シク事務所ニ報告シ次回登山者ノ便ヲ謀ル事

十八、加入者ニシテ以上ノ條項ニ違反シタル時ハ組合協議ノ上相當ノ制裁ヲ加ヘ退會ヲ命ズル事アルベシ

大正八年六月

信州南安曇郡有明村新屋赤沼千尋方

有明口登山案内者組合

◇有明口登山案内組合員心得

心得

- 一、案内者強力は純朴にして善良なる山人の氣風を重んじ不徳義の行爲あるまじき事。
- 一、登山者に對しては出來得る限り親切丁寧を旨とし其意志に背かず總ての勞務に忠實なるべき事。

一、規定賃金以上の暴利を貪らざる事。

一、山中に於ては家族的和樂をなし各々争ひ事、

口論事等は慎むべき事。

一、先達は責任を自覺し細心にして過失なき様注意すべき事。

一、先達は必ず山に經驗多き者なれば強力は能く命に反せず従ひ先達は經驗淺き強力の爲めに懇切に指導をなし將來の後繼者として良案内者の養成に努むべき事。

一、宿泊地に於いては他の登山者の迷惑になる行爲等は必ず慎み飲酒をなして暴に陥らざる様注

意すべし。

一、宿泊地はいづれも清潔にして汚穢を止めざる様心懸け後より來る登山者に不快の念を起さしめざる事。

一、濃霧或は暴風雨の歩行には絶えず旅客の傍を離れず互に呼應しつゝ行動をとる事。

一、山中にて偶然邂逅せる他の登山者に對しては相當の敬意を以て之に挨拶を爲し若し質問等ありし場合には懇切に回答をなすべき事。

一、仲間の中に負傷者病人等の生じたる場合には登山客に計り出來得る限りの方法を以て看護をなし慰安を與ふる事。

一、濫りに樹木を伐採し鳥獸を害し故意に岩石を崩落せしめざる事。

一、善良なる有明口案内者の名實を擧ぐる様心懸くべき事。

以上

◇大町組合の公定賃金

拜啓愈々御清康之御儀奉賀上候陳ば去る二十日當組合總會に於て案内者強力賃金を貳圓貳拾錢と協

定仕候處其後に至り一般勞働賃金の値上有之夫れとの比衡上更に値増しを要求する者多數にて種々調定を試み案内者のみ金貳圓五拾錢に改訂仕候段御了承被下度不取敢御通知申上候

大正八年六月廿七日

信州 大町

大町登山案内者組合

◇甲斐柳澤近況

本誌第十三年第二號一二二頁に柳澤の人夫を紹介せしが、大正八年七月會員影山寅造氏は、同地を出發點として、水石春吉、同林八、横内逸平の三名を具し、白峰山脈及赤石山脈を跋涉され、同地の人夫其の他に關して委細に報告されたるを以て、左に之を基として近況を報ず可し。

昨年予等は柳澤にて同地第一流の案内者として知らるる水石孫太郎に面會して山中の模様等に就きて聞糺し、且つ其の息春吉又は林八の何れかを案内者として雇傭せんとせしも、孫太郎は野呂川

入に漁業從事中にて面會する事を得ず、春吉及林八は共に某氏に雇傭されて在らず、只野呂川の廣河原にて遭遇の際數語を交へたるに過ぎず。予等下山後柳澤にて春吉林八等に柳澤の人夫に關して交渉せんとせしも、恰も旅舎小池方の主人重病に罹りて、爲に同地に滞在すること不可能となり、倉惶日野春に赴きて歸京の途に著きたれば、柳澤の人夫に關しては、只登山の前日小池淺吉と協議して、以後同地より登山する人の爲に大體の方針を定めたるに過ぎざりしは實に遺憾とする處なり。當時予等は、大町の例に倣ひ、登山者は旅舎を通じて案内及人夫を雇傭するとせば、旅舎に於ても宿泊の準備をなすことを得、且つ登山客の爲に直接利益を得ることが、雜貨業を主とせる小池方が旅宿業にも更に大なる興味を惹起して、幾分なりとも改良の念を起さしむ可きかと想像したりしなり。然しながら予等の理想は而く簡單に實現し得るものに非ずして、それと同時に柳澤に於ては、差當り旅舎を主とせすして案内人夫を主となす方反て得策なること明瞭となりしを以て、後來同地

を出發點として選定さるゝの士は、寧ろ左の點に留意さるゝを以て至便なりとせんか。

一、案内及人夫雇傭に關しては直接柳澤の水石春吉（林八は其の弟）に照會し、他の登山客と衝突せざる様時日を定むること。

一、案内及人夫の有無により、出發時日確定後、案内者より旅舎に其旨通知を依頼するも可。

一、小池淺吉は雜貨店、旅宿、運送業等を兼業とする故、理論上便利無比なれど、同店にて販賣する物品は在柳澤同業者中第一の高價なる事（其の爲に年中病人絶えずとは里人の評なり）旅舎としては甚だ不潔にして、且食物粗惡到底口に難き事、但し案内一同親切なるは心地宜しけれど、これは同地一般の人情なる可し。

一、本年頃より他に旅宿專業の家出來る由なれば、その方萬事につき宜しからんか。

一、從來春吉及び林八は相共に山に入るの習慣なる由なれど、駒ヶ岳、鳳凰山附近を除けば、春吉又は林八以外に案内者として信頼するに足る可き者無之により、登山客は他の迷惑とならざる様

此の兩人を同時に拉し去らざる様、自らも行動に注意すると共に、右兩人にも其の旨を諭し、若し案内者不要なる場合には、普通の人夫を使用する様留意されん事を望む。

一、昨年予等が使用せる三名中、島吉は林八の弟なれども、元來石茸採を職とせる爲、登山案内者としては簡易なる地を除けば不適當なること、牛田義次は質朴にして且つ山地に入るを好める好漢なれば、鳳凰山（北御室を経て）駒ヶ岳方面（大武川上流、尾白川上流）等ならば案内者としても不適當に非ず、且つ體格強大にして膂力あり、横内逸平に至りては元來日野春とかの者にして土方を業とせしも、故ありて近年柳澤に轉住したるなれば、山地に馴れざると共に實直ならず、終日不平を漏しながら常に不愉快なる行爲をなし、又野營地に於ても兎角懶怠の風あり。予等は食事は野營の時の外は大抵人夫と分離して行動したれば、左まで不快を感じざりしも、終日相伍して歩行するは希はざる處なり。

一、柳澤より仙丈及び野呂川右岸の山岳に登山

する場合には、目下信賴するに足る案内者は春吉及び林八二名に過ぎざれば、同時に二組以上の登山隊が柳澤に遭遇する時は、勢ひ不熟練なる案内を雇ふか(予等の場合の如く)、或は不潔なる旅舎に滞在を餘儀なくさるゝ虞なしとせざれば、出發前に十分の打合せをなす必要あり。

一、柳澤に新設さる、(或はされたる?)旅舎の模様不明なるも、同時に十名以上の登山客の宿泊は困難多きを覺悟せざる可からず、勿論登山に多人数團體をなすは、萬事につき不得策なるは、常に柳澤方面のみに限らず、出來得る限り避くるを上乗とす。

因みに記す、駒ヶ岳七丈の小屋は、物價騰貴の影響を受け、營業困難なるが爲め、本年限り閉鎖す可しと聞けり、若しこれにして實行されんか、登山者には不便少なからざる可く、同山及其の連山を跋涉せんとするの士は、豫めその實否を確め置くは必要なる事なる可し。(武田久吉氏報)



雜報

◇富士登山の魁 七月一日の富士山開きに先だち例年六月下旬より學生の登山隊を見るの例であるが、今年は五日早くも山口縣吉敷郡秋穗村眞言宗福泉寺住職原田亮殿同郡秋穗二島村眞正院住職白井眞澄同村上田大賢の三氏、大宮口より登山の途に就き二合目まで辛うじて登つたが夫より上は積雪二尺に及んで到底登れず五六兩日を同所の石室に明かし七日下山した、是れ本年最初の富士登山隊である。(沼津(八、六、八、報知))

◇日本アルプス初登山 日本アルプス初登山の途にある信濃山岳會幹事手塚準一郎氏は三日夜は大瀧澤の岩窟に露營し四日朝常念嶽に登山したるが十時頃より雨繁く總て雪に變じ本年は残雪多く目下雪解の時期にて雪の下は地熱の爲に解けて空洞となり又雪の上は柔かくカンザキは利かず身體雪中に埋没する爲一步も進む能はず露營に適する所なきより斷然下山し五日島々に赴き六日上高地に至り七日槍ヶ嶽に登る事に決したり。(松本)(八、六、七、愛知)

◇燕、常念方面先登登山一行無事下山す 日本銀行松本支店、松本聯隊區司令部有志十一名は廿九日日本アルプスの中房温泉を出發し燕嶽、大天井、常念嶽等を突破し漸く同夜松本に歸着せり之れ本年に於ける同方面登山の先登にして二の俣の小

屋の如きは未だ積雪中にありと。(松本來電)(八、七、一、大、毎)

◇日本アルプスに石室を十箇所新設の長野縣の提案 今回本縣は臨時縣會開會に際し各山岳登山者の便宜を圖り石室新築費五千圓を提案した其石室は合計十ヶ所て其内六ヶ所は日本アルプス連峰の白馬山、乗鞍、大黒、槍ヶ嶽及それに連亘せる二の又て他は下伊那の赤石山、上伊那の駒ヶ嶽諏訪の八ヶ嶽下高井岩菅山で何れも一ヶ所の建設費は五百圓であるが其他にも必要に應じ各所に漸次建設する計畫なりといふ。(長野)(八、六、七、名古屋)

◇山上の物價 日本アルプス連峰の登山者は年々殖えるので長野縣は本年臨時縣會を開き日本北アルプス(白馬から御嶽まで)に七月、日本南アルプス(赤石山脈)に二月、白根山脈に一月、都合

十月の石室を建設することを決議した、松本の信濃山岳會は廢應、一高、京大、三高を初め全國各學校からの照會應答に忙殺され各登山口の物價は日に増し昂騰しつゝある、念の爲め連峰登山口を列擧するこ

白馬岳 北城
立山連峰 大町

◎ 雜 報

大天井——中房(有明口)

檜穗 高——上高地(島々口)

栗 鞍——白骨

御 嶽——水曾福島、上松驛

駒ヶ嶽——水曾福島、伊那町

赤石嶽——飯田

八ヶ岳——茅野

信濃山嶽會 では組合を設けて物價の統一を圖らうとしてゐるけれど交通非難で一概に開うも行ひぬ、一番交通の不便な島々登山口方面では運材伐木發電所の入夫賃一日四圓以上もするから若し登山案内の強力に頼むなら更に増してやらなければならぬ、米一升七十錢以上、半日保證の草鞋が一足十六錢乃至十八錢、一日保たせる草鞋は二十錢以上、味噌が百匁六十錢即ち何も彼も昨年の二倍である島々口に亞いで高價なのは水曾福島方面である御嶽山の中腹から上は

サイダー一本三十五錢 ▲蕎麥、饅頭一杯十八錢 ▲赤飯一杯十八錢 ▲蒲團一枚廿五錢 ▲毛布一枚廿錢 ▲鶏卵一個十五錢 ▲金剛杖一本三十錢 ▲槍笠一枚十八錢

である、北城登山口、有明口などは之に比れば遙に廉く入夫賃一圓八十錢、強力二圓、草鞋十二錢又昨年より登山口となつた島川口は更に二割弱廉い但しこれから

登山の盛期 になれば諸物價は更に上る、草鞋、笠、蓑、食料品のやうなものは松本で仕入れて登山口からは入夫だけ雇ふやうにすれば餘程經濟につくであらう。(松本(八、六、二、報知))

一三二

◇伊吹山頂の觀測所

冬が来るに、北西の方向から身をも肌をも劈くやうな寒い雪風が、濃尾平野の頭の上へ物凄く絶えず訪れて来る。此風を稱して一般に伊吹風と名つけて居る。其風に驅はれる濃尾の平野から北西に聳えて居る、此の風の本家本元たる伊吹山を眺めるに違ひない。其時其伊吹山は雪に包まれて眞白である。雪の早い年は、十一月の末から、翌年の四月下旬若しくは五月中旬頃迄二尺三尺、真冬は一丈二丈と積雪して、頂上と下とは全く交通も通信も總ての物が途絶されて仕舞ふ。其頂上に今年の冬から高空氣象の觀測所が出来、是が日本で最初の高い觀測所である。外國では高い山頂の觀測所は何程でもあるけれど、日本には漸く茨城縣の筑波山に一個所あつて、今迄はが日本最高の觀測所であつた。けれど筑波山は漸く海拔二千六百二十尺に過ぎない、其れに比べると伊吹山は四千五百四十四尺からある、到底比較する處ではない。其四千五百尺からある伊吹の頂上、然も十二月から五月迄、交通も通信も全く途絶する其山頂に觀測所を新設するに到つた徑路、新築するに就ての苦心、そして其觀測所を不便な山頂に新設して、何處仕事をやうとするのであらうか、其觀測所の新設の爲めに受ける登山者の利便と附近村落の影響、其等を實際に見聞する爲の、彦根測候所に琵琶湖の新發見に依りて名の聞えた所長前田末廣氏を訪ひ、更に日本一の最初の高い伊吹山頂の觀測所を訪うて見た。此の觀測所は二等測候所としての總ての設備が整へられる事となつて居る。平地に於ける測候所は日本に何程でもあるけれど、山の天頂の測候所は、四千五百有餘尺の此測候所が始めてである。殊に伊吹山は尾尾に面し

た方向即ち岐阜から濃尾平野は、伊吹山に區切られて伊吹風を送らない限り、暖い氣候を續ける事が出来るけれど、一方北東に面した方、信州一面は、恐ろしい寒さと雪の寒國である。其の寒暖を區切つた大きな山の頂上に設けられた測候所丈、其れ丈其處に備へ着けられた機械に表れる毎日の氣象は、到底想像にも着かない新現象が現はれて、學界の爲に大なる研究材料を貢獻するに違ひない。其測候所には普通二等測候所と同じ機械が据付けられ、氣壓、氣温、水濕（降水、雪量、濕度、水蒸氣張力、蒸發）日照時、風、地震其他の天候の状態が觀測せらるゝ事に成つて居る。建物は殆ど石とコンクリートで造り上げられ、總坪數廿七坪半。其處に事務室、機械室、宿直室、控室、支關等が造られて、今では工事も全く出來上り、もう機械の据ゑ付けを終れば、遅くも十二月の中旬頃から詰切りの所員が入つて、氣象の觀測を始める運びに成つて居る。其の發表される氣象の報告は、濃尾平野のみではなく、スキーに避暑に毎年幾千人の登山者の爲めに、何れ丈の便宜を與へる事であらう。夫等の便宜を與へる爲めに、氣象報告の通信の爲めには、頂上から麓迄夥しい經費を懸けて、もう電線さへも完成されて居る。今目邊からは低い草許りで、立木としては一本の雜木さへない伊吹山に、麓から頂上迄一直線の電信棒が並んだ。そして其上に架設された一本の電線で以て、頂上の測候所と麓の春照村に新設される測候所春照出張事務所と連絡して、頂上の刻々に變つて來る氣象と麓の氣象とを比較し、且是を廣く報告する事に成つて居る。が然しもう頂上には今でも雪があるのである。今月の中旬頃から雪がどん／＼降積つて、麓では

其雪が一丈にも二丈にも成り、恐らくは電信棒も埋まつて了ふに違ひない。其處處で果して電線が持堪へらるゝであらうか、其れは甚だ疑はしい次第である。四合目邊から上は、總て嚴丈な鋼鐵線を用ひてはあるが、此半月程以前二三日各地方に寒さが襲ふた時など、頂上では五六尺の雪が積つて、現在の電線など太さは電信棒より太く、遂に重量に堪へ兼ねて、平常ピンと一杯に張つて居る線が地上に着く程迄に垂れ下つたと云ふ事である。そして無論通話も出來なかつたと云ふ事であるから、行く／＼は地下線にでもしない限り、冬は先づ電話通信は駄目と見て好いであらう。けれど春から秋へ懸けて非常に好い。殊に登山者の爲めに何れ丈便宜であるか知れない。山登りは天候一つである、今迄は通信機關がなかつた爲めに、頂上で暴風雨がして居ても、或は急に途中で暴風雨に逢ふ事も全く知る事の出來ない危險さであつた。其れが頂上に測候所が出來て、刻々に麓へ連絡して、『頂上は今暴風雨なり』とか『本日何時頃雨到る可し』とか、『風強まる可し』とか云ふ豫報が、春照村の事務所は勿論、登山の道々に張り出される筈であるから、日本の斯界の爲めの研究材料と成る許でなく、斯うした便宜も觀測所新設の功で一般に受ける利益の一つである。登山客許でなく、山麓村落即ち春照と伊吹村字上野との受ける影響も又多大なる影響である。殊に山上に於ける蘆築は、非常なる運搬夫と非常なる金とが要つたのである。運搬夫は上野の吉川藤五郎と云ふのが受負つて、毎日々々多い時には四五十人、普通でも十五人や二十人は、絶えず山へ上下した。今度の工事の總ての監督をして居る技手の牧野與四郎氏の話に依ると、今日迄頂

上に要した延人員は二千人位の人夫であつて、其運搬夫の得た金銭は從て莫大な物で、上野では一戸平均餘りとも廿三圓位宛に當つて居る云ふ事であるから、如何に上野が今度の觀測所に力を盡して居るかが判る譯である。其れが爲めに上野では區長高橋善平氏を始め、村民全部繰出で伊吹山の頂上迄立派な新道を作つたのである。今迄は伊吹登山道は四合目から五合目頃までは、可成りな道があつたけれど、其れより上は殆ど一直線の急峻な小道であつた。其れが今度の觀測所新設の爲めに村中で作つた道は、九十九折りに馬の上手い人ならば馬でも通られさうな道である。

道を作つたり幾百人と云ふ人夫が汗水出して運んだ頂上の建物には、果して何れ丈の費用が懸つたであらうか、其れは僅廿七坪半の建物に實に一萬三四千圓から懸つたのであると云ふ。二十七坪半に一萬三四千圓懸つたと云ふ事は一寸想像もされない程である。けれど何しろ四千五百餘尺の頂上に小さい乍ら家を建てて、然も雪に埋つて仕舞ふ冬の半年を立籠らうと云ふのであるから、設備も又充分であらなければならぬし、運搬にも想像以上の金銭と苦心とを要しなければならぬかつたのである。麓の上野が一戸平均廿三四圓、多い家では百圓以上も儲けて居ると云ふ有様であるから、如何に運搬費に金の懸つて居るのかも想像される譯である。其れは雪防の爲め石と混凝土との主なる建築の爲めに、石

材は頂上に何程でもあるけれど、混凝土に要する土砂及セメント等の運搬、一坪に要する其費用が百八十九圓懸つたと云ふ事である。一坪の砂の運搬費が百八十圓と云ふ事も、一寸平地では想像する事の出来ない金高である。其等を見ても如何に木材機械、鐵材、土砂、藥品、燃料、生活品の運搬費が何れ丈要しなければならぬかつたかを想像される譯である。運搬夫は一日に一人一回半の登山をしなければ、金に成らないのである、そして一人先づ平均十二三貫宛で、十六貫擔いだ者は此測候所建設の最初から僅に一人限りより無かつたと云ふ。女も子供も頗る運搬に従事する。頂上で此運搬費を加算すると、田舎の眞中の野菜の生産地であり乍ら、大根一本が十錢位宛に當る、高い米も此處へ來れば又更に高く、一升七八十錢から一圓近くにも成ると云ふ事である。恠うした物は運搬費丈け出せば、無理にも兎に角得る事が出来るけれど、恠うしても得られないのは水である。昨今は頂上に十人餘りの人夫と大工と石工とが起伏して居るので、是れに要する飲料は、一日に餘りとも一石二三斗宛の水が要る。けれど頂上に雪こそあるが水と云ふ物が全くない。止むを得ず目下二人の人夫を水の運搬に使用して、工事に着手した此七月頃から、六合目邊の谷水を絶えず汲み上げさせて居る。今はまだ其れでも足りるのであるが、其れの出来るのはもう僅かの間の事である、總て雪が積り、觀測

所が三階の観測臺丈に残されて、全く雪に埋る頃には、六合目迄下りる處が、戸外へさへも足を踏出す事は出来なくなるのである。其以前に飲料水を汲貯へて置くに云ふ事の出来ない事はないかも知れないが、其れも分量の問題で、四ヶ月五ヶ月の飲料水は、到底貯へて置く、この出来やう筈がない、止むを得ず雪を解かして飲まなければならぬのである。雪を解かすに云ふ事は容易な事のやうであるけれど、此頃の寒い日の雪が五六尺積つた時は、頂上に寝て居る人夫の連中は、水が得られなくて仕事も全く休み小屋の中に閉ぢ籠つて、専ら雪を解かしたに云ふ事であるが、存外不便な物ださうである。此頃の雪に云へば、其雪は今でこそ地面の出るまで解けたけれど、一時は非常な物であつたさうである。伊吹山は前にも書いたやうに、北西の寒國と東南の暖かい國との境界に立つた山である丈、伊吹山に降る雪は西北から降つて来るのかと思ふ位であつて、山の南受けの方が三尺積れば、北受けは六尺積ると云ふ有様である。観測所の屋上に立てられた避雷針が、北方に面した方へ雪がだんだんに吹きつけて、一直線に三寸四寸にも及び、恰度板のやうな格好に成つたと云ふ珍らしい現象も見られるのである。頂上に立つて兩方の村を見下せば、北は稻が漸くまだ刈り懸つた處であるのに、南は全く片着いて居ると云ふ、面白い有様をも此観測所から見る事が出来るのである。濃尾平野

の寒風を避る伊吹山の頂上の事とて、避雷針が板のやうに成つたり、南北村落の稻の出来榮えの斯る相違は、當然の事であるかも知れない。さうした寒暖の境界たる伊吹山の冬は、果して何處に寒いのであらう。前田彦根測候所長の談に依れば、頂上の一月の平均温度が大抵、北海道の函館及青森の攝氏氷點以下三度半位と同じだと云ふ事である。只伊吹山は青森や函館の曇天又は降雪の多いのに比して、晴天が多いので、其れ丈はまだ楽な譯である。けれど是を平地に比較すれば。名古屋及彦根町の攝氏三四度に比すれば、約六七度低く、東京大阪も亦同じ程度の比較である。さうした頂上に冬を籠つて、氣象の研究に盡くさうとするのは可成り辛い仕事である。もう燃料はごん／＼と積込まれて居る、窓の硝子なども二重硝子の嚴丈な物が用ひてはある。恙うした日本一の高山観測所が伊吹山に新設されたに云ふ事は、滋賀縣の爲め學界の爲め名譽な事であるだらうけれど、其れに従事する人々は、可成りな苦痛を感じなければならぬであらう。此寒い頂上の所員の爲めに、小使として上野から人が一人登るさうである。年に二百圓とか三百圓とかに成るさうだからとて大分儲き立てたが、結局もう誰か一人極つたに云ふ。『何程か金に成るたつて、牛年も女房の顔も見ず雪の中に暮すに云ふ事はとてもこも成りませへ』と麓の登山宿の興津館の主人が云つてゐた。恙うして新設さ

れた伊吹山觀測所は、一番最初現在の森滋賀縣知事が持ち出したのであつた。前田末廣氏等も相談に與つて、若し誰れか一人で此費用全部を寄附する人があつたならば云ひ出した處、第一番に寄附しやうと申出たのが長濱町の下郷傳平氏であつた。傳平氏は滋賀縣に於ける屈指の富豪である。第二に出たのが能登川の富豪田付氏であつた。けれど最初から一人にて云ふ話であつたので、田付氏は斷つて下郷氏の寄附に依り、此處に日本最初の高山觀測所が滋賀縣の手に建てられたのである。然し果して此日本一の觀測所が、滋賀縣の手で維持されて行くか否かは、可成りな難問題であつた。其處を見込んで、開始される本年末から來年の維持費全部を、大阪毎日新聞社長の本山氏が寄附する事に成り、此處に於て先づ來年末迄は斯界の研究材料が學界に貢獻せらるゝ事に成つたのである。此所に觀測所が出来れば、登山客も又非常に増加して来るのは當然の事である。其れが爲め今迄頃上には家々云つては茶店一つ無かつたのを、今度新しく二百人位の登山者を收容出來得る石室が造られる筈に成つて居る。經費は約五千圓の豫定で、もう土壁と石材丈は集めてあるが、觀測所の建設の方に追廻されて、まだ丁事には懸つて居ないけれど、是も來年の春には完成される筈になつて居る。日本一の高山觀測所たる伊吹山觀測所は、斯くして落成したのである。濃尾平野に關係の深い伊吹山

の頂上の今後の氣象が、何處に現はれ來るであらうか、學界の爲め如何なる影響を來さうとするか、日本氣象學界の研究材料を如何に豊富ならしめんとするか、其れが爲め登山客が何れだけ便宜を與へらるゝか、總ての點に於て濃尾平野の爲め、伊吹山の爲め廣く日本の學界の爲め、珍らしい初めての高山觀測所は開始されるのにもう日も近いのである。(七、一二、二一四名古屋)



本會規則の改正

現行本會規則は、明治四十三年の制定に係り、會務上、世の趨勢共に、現行規則の改正を必要とし幹事會の審議に次で、現行規則に由り特別會員の賛否を問ひ、茲に其賛同を得て新規則を左記の如く制定せり。

日本山岳會規則

- 第一條 本會ヲ日本山岳會 (Japan Alpine Club) ト名ク
- 第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコ

トアルベシ

- 第四條 本會ハ毎年大會及ビ小集會ヲ開ク

- 第五條 本會ハ會長ヲ戴ズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム

- 第六條 本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム

- 第七條 幹事ハ會員ノ選舉ニヨリ評議員之ヲ決定シ其任期ハ三箇年トス

- 但シ再選ヲ妨ゲズ

- 評議員ハ本會發起人、幹事及ビ元幹事ニシテ現ニ會員タル者ヲ以テコレニ充ツ

- 第九條

本會ハ一地方ニ關スル特別ノ事務ヲ處理セシムル爲メ必要ナル時期ヲ限リ地方委員ヲ置クコトアルベシ地方委員ハ本會幹事之ヲ囑託ス

第十條

本會々員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ本會幹事ノ推薦ニヨルモノトス

第十一條

正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齡、及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付アリ）

第十二條

入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條

入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ルベシ

第十四條

正會員ハ會費年金參圓ヲ前納スベキモノトス

第十五條

本會ハ會員ニ別ニ定ムル處ノ會員章ヲ貸與ス

第十六條

本會々員ニハ「山岳」毎號一部を頒布ス

第十七條

本會々員ハ幹事ノ承認ヲ經テ本會所

第十八條

藏ノ圖書ヲ閱覽スル事ヲ得
本會ハ會員ノ資格ナシト認メタル者ニハ退會ヲ命ズベシ

第十九條

正會員ニシテ會費ヲ納付セズ或ハ滯納シタル者ニハ雜誌ヲ頒布セズ二回ノ督促ヲ受ケテ尙納付セザル時ハ退會ヲ命ズベシ

第二十條

會員ニシテ退會ヲ欲スル時ハ其旨事務所ニ書面ヲ以テ申出ヅベシ

第二十一條

會員退會ノ際ニハ本會ニ會員章ヲ返納スベシ

第二十二條

本會々員ニシテ住所姓名職業ヲ變更シタル時ハ其都度必ズ之ヲ事務所ニ通知スベシ

第二十三條

本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セズ

第二十四條

本會ノ規則ヲ變更スルニハ評議員會ノ決議ニヨルモノトス

附 則

一、本規則ハ大正八年六月一日ヨリ實施ス
一、本規則ニ定ムル會費及ビ入會金ハ大正九年度

ヨリ(大正九年一月一日ヨリ)實施ス

- 一、會費ハ其年度初メニ納付スベク、第一月ヨリ
起算シ半途入會者ト雖モ其全年額ヲ納付スルモ
ノトス

改正規則の説明

△新規則に於て新に設けられたる事

- 一、評議員を設けたる事。(第六條)

- 二、地方委員を設けたる事。(第九條)

從來本會役員としては幹事十三名に於て處理し來りたるも會務の趨勢上、評議員を新に設け、重要な會務に參與する事とせり。

一 地方に關したる事項を特に處理する場合、一幹事に於て出張處理し得ざるが如き場合に處する爲め或時期を限りて地方委員を囑託する事とせり。

△變更されたる事

- 一、幹事の選舉を會員全般に由る事とせる事。(第七條)

- 二、會員別を改めたる事。(第十條)

- 三、會費及び入會金の増額。(第十三條第十四條)

- 四、會員章を貸與する事となせる事。(第十五條第二十一條)

- 五、規則改正に就ては評議員會の議決に由る事とせる事。(第二十四條)

(一) 前規則に於ては特別會員の選舉により幹事を選挙したるも、會員全般の選舉に由り。尙ほ評議員會に其決定權を保留せり。(二) 特別會員を廢し、正會員及び名譽會員の二種とせり。(三) 會費及び入會金の増額は一は所用の經費を得る爲め、他は此れによりて會の基礎を確實ならしめんが爲めに外ならず。(四) 會員章は、従前單に附與したるも今後は、之を貸與する形式に由り退會に際しては必ず返戻あるべき事とせり、此事は現在會員諸君にも適すべきにつき諒承ありたき事。(五) 前規則に於ては全會員の三分二以上の賛成を要したるも、評議員會に其決定權を附與するを以て最も適當と認めたるを以て然かせり。

特別會員を廢止したる事

從來特別會員に對しては、何等特別なる待遇をなさざるの狀態にありたり、會の本旨とする所よりしても、其徒らに名義のみを附與するの不當なるを思ひ、茲に之を廢止して、會員には何等の等差なき事とせり、且つ從來特別會員の選舉に由りたる幹事の選舉も、會員全般に由る事とせり。

會費、入會金の増額

逐次累加し來りし諸物價は、會費の増額を已むなくしたり、只僅かに所用の一部分を増額したるに止り敢て多額を請求するものに非ざるを以て了せられたし、尙ほ入會金の増額は此れに由つて會員としての選擇を十分ならしむる一方法として取れり。

會員章は貸與する事及其變更

從來の會員の退會に際しては、一々會員章の返戻を乞ふべき方法なかりしも、今後退會の場合は總て會員章は必ず會へ返戻さるべき事とせり、此れは既に會員たる諸君にも及ぶべき事にして、今後の新入會者にのみ適用すべき事にあらず、又特別會員の廢止に由り、特別會員章は自然的廢止となれり、從來特別會員たりし諸氏には逐次御引換へ申すべく事務所宛御送附ありたし。

會費計算方法の變更

從來は入會の月より起算し計算したれども、今後は其入會時の如何を問はず、其年度一月より入會せるものと同じく計算し全年額分の納付を乞ふものとす、而して毎年度初めに於て會費は前納せらるべきものとせり、從來半途より起算しつゝありし諸君には逐次計算の上不足分御納付を乞ひ、年度割として整理すべし。

第十二回大會記事

大正八年五月四日午前十時より東京市赤坂區溜池町三會堂に開く、今回は特に山岳地の地圖類の展覽會開催の計畫ありて、講演も右に關したるものを主としたり。

午前十時展覽會場を開く、内外各地の山岳地圖類は各室に充滿し、尙ほ一室は特に陸地測量部より出品されたる、各種地形圖模型等を陳列したり。午後五時半階上大廣間に於て講演あり

第一席 支那四川省義眉山及其附近の地形につ

き 理學士 小林 儀一郎氏

第二席 陸地測量部出版地形圖作製の順序方法

並其使用法

陸地測量部員 木本工兵大尉

第三席 古圖に於ける山の描法(幻燈)

理學博士 山崎直方氏

午後九時半盛會裡に閉會す、會するもの二百餘名たり。

第十二回大會出品目録(順序不同)

今村巳之助氏出品

- 一、朝鮮金剛山内外俯瞰圖
- 二、同略筆跡俯瞰圖、同講演用略地圖
- 三、日光山俯瞰圖、同講演用略地圖
- 四、未踏地俯瞰圖(地形圖を起したるもの)

松田 定久氏出品

陸地測量部滿洲全圖(明治二十三年)

ジャバン、ツースリスト、ビエロー出品

Resorts in Canadian Pacific Rockies, La Route des Alpes Erian-Nice,

Valdres-Route Norway Ligne de Berg n Norvege

A Colorado Summer Resorts in Quebec.

The New high mountain railway

Luzern-Stanshorn-Schweiz

Muolnas Murraigh

Rev. W. H. M. Walton 出品

千九百九年シャクトルトン大尉南極探検の時醫士として同行したる出品者の友人たる E. C. Marshall 氏の手記せる南極圖 一

武田 久吉氏出品

(地圖類)

松浦竹四郎——東西蝦夷山川地理取調圖 二十七冊

(安政六已未、一八五九)

同——蝦夷國境山川地理取調大槪圖 一冊

北海道人發行——二十萬分一北海道地形圖 全三十二圖
(安政七庚申——萬延元年、一八六〇)
(第六刷明治四十年、一九〇七)

林子平——蝦夷國全圖 (天明五年、一七八五)

藤田溫卿——蝦夷國境輿地全圖 (嘉永六發丑、一八五三)

小野寺謙——蝦夷海陸路程全圖 (安政二年、一八五五)

開拓使——北海道國郡圖 (明治己巳二年、一八六九)

著者不明——大日本全圖之內出羽全圖 (明治元年? 一八六八)

橋本謙——陸奥出羽國郡行程全圖 (明治以前)

宮田彦弼——御寶播磨州郡邑輿地全圖 (弘化三、一八四六)

著者不明——大日本九州之圖 (文化十年、一八一三)

同——新刻九州之圖 (文化十年、一八一三)

同——同天明三年信州淺間大燒並上州吾妻郡大變之圖繪

林子平——無人島大小八十餘山之圖 (天明五年、一七八五)

關口備正——府縣改正大日本全圖 (明治九年、一八七六)

地理局地誌課——大日本國全圖 (明治十三年、一八八〇)

著色補記五萬分一地形圖四葉

Bartholomew:—New Reduced Survey:

1. New Forest and Isle of Wight,

2. Bedford, Hertford, etc.

3. Surey

4. Berks and Wilts

(書籍)

Salow and Hawes:—Handbook for Central and Northern Japan, ed 1 (1881)

—ed. 2 (1884)

Chamberlain and Mason—Handbook for Japan, ed 8 (1907)

町田 彦二氏出品

千九百年獨逸國第十一軍團機動演習地圖 十一葉

前川 一郎氏出品

東宮御學問所の御下命により自今製作中の地球儀の一部

野呂 寧氏出品

臺灣森林圖 (說明共)

阿里山鐵道

陸地測量部出品

○地點指示要領 十三枚

○伊太利航空圖 一

○ソイン島敵圖 一

○右平面圖 一

○寫真測量圖 四

○地圖製作法 四

○一等水準線路圖 一

○一等三角網一覽圖

山崎 直方氏出品

北齋筆——支那島敵圖 一

同——東海道名所一覽 一

同——木曾路名所一覽 一

眞秀——關東平野東部島嶼圖 1

同——海陸道中諸譜 1

海陸道中圖繪 1

下野國全圖 1

大日本分境圖上下 2

貞秀——富士山眞形平繪圖 1

ハスビナス火山地圖 1

近江國細見圖 1

校正山城國全圖 1

花落一覽圖 1

江戸古繪圖 1

最新西湖圖 1

Die Alpen von Hoelzel Heiderich 1

Ordnance Survey Oxford 2

Refused for simile of ancient map of Great Britain and Circa A. D. 1300 1

Topografisk kart over kongeriget Norge 30 B. 1

Atlas de Geographie Moderne (La France.) 1

Ordnance Survey of England and Wales 2

Carta Geologica d'Italia 6

Cono Vesuviano 2

Instuto geografico militare 1885 3

opogr. Nebersichts-Karte des Deut. Reiches 2

Karte des Deut. Reiches 7

Handkarte der K. K. Bezirks hauptmannschaft 3

United States Relief Map 1

U. S. Geological Survey 6

紙製富士山模型圖

紙製富士山模型圖

ユングフラウ模型 2

マッターホーン銅製模型 2

スウェン、ヘティン博士西藏旅行スケッチ圖 1

歐亞紙製模型圖(一八六〇年?) 1

青邱圖 2

茨木猪之吉筆——木曾御岳山 1

瑞西地形圖 二十七圖

同書報文及び外國地質圖

農商務省地質調査所出品

本會出品

佐伯藤之助原型——立山劔岳模型 1

本會出品

本會出品

本會出品

本會出品

本會出品

第四回小集會

大正八年六月一日午後一時半所定の會場たる、保々近藤合名會社樓上に高野幹事司會者として開會、左記講演ありたり。

印象的秩父觀

田部重治氏

鳥瞰圖の作り方

今村 巳之助氏

席上新着雜誌の展覽及び、今村氏寄贈の地圖類を頒ち午後四時半閉會せり、來會者左記の如し。

中村孝二郎、近藤茂吉、梅澤親光、田部重治、山本宣治、磯貝藤太郎、郷郁三郎、村越匡次、辻村太郎、戸澤英二、高畑良材、沼井鐵太郎、高橋鑑三郎、堀龜雄、酒井忠一、加山龍之助、忽滑谷安美、高田達也、木暮理太郎、矢田城太郎、内山忠助、大島永明、川口敏郎、濱名増雄、武田久吉、別所梅之助、高野鷹藏、武井眞澄、横山次郎。

外に會員外の來會者あり。

第廿一回有志晚餐會

本會幹事小島鳥水氏の休暇を得て一時歸朝したるを機として、當番幹事は同氏歡迎の意を兼て去る五月廿五日、品川鮫洲、川崎屋に第廿一回晚餐會を開きたり、場所は昔の東海道に沿ひ遠く向地を望む、廣重情調と云ふべく、此れも亦鳥水氏歡迎の意に外ならず。

午前十一時參會するもの左の如し。

小島鳥水、松宮三郎、山本宣治、六鶯保、木暮理太郎、服部正、加山龍之助、鳥山悌成、佐伯藤之助、鈴木益三、濱名増雄、神尾錠吉、高野鷹藏。

大阪に於ける山の會

(第一回茶話會)

會員朝輝記太留氏が教育視察のため渡米せられましたのは昨年の六月でした。そして本年の三月末に無事歸朝せられました。

日頃教へをうける竹下英一氏と談合の上、朝輝君の御話を承らんと、在阪の山岳會員御一同に案内狀を差出しました。

發送しました案内狀の數は五十通、これに對し鄭重なる禮辭を以て出缺の旨を送りました向がべめて五通。

さてその當日になりますと、朝の程から氣づかはれた空が果然晝過ぎから烈しい風雨となりましたにも不拘、ぬれ鼠の様な姿で參會せられた會員が七名と來賓が壹名ありました。

一室に陳列してある朝輝氏の御土産に就いて氏自ら一ツ一ツ説明して居られます、有益な參考資料はあまり數が多くて陳列出來ず、其まゝ机上に山と積み重ねてある中を、熱心な人達は手帖を出して何か書き留めて居られます。

やがてこの學校特有の物理教室で幻燈が初まります、廣い教室に十名たらずの人數で聊か心細い、でも朝輝氏の説明は映畫の進むにつれて熱を加へます、且つ晝の更る度に觀者の眼は好奇に満ちて光ります。

果然幻燈が消えました、機械の故障？、と同時に室内の別な電燈をつけるスイッチを入れましたが駄目でした。

いくら待つても電氣がつきませんから一先づ元の廣間へ戻つて茶を飲み、四方山の話をして居る内に電流が來たとの報せ、早速幻燈の室へ往つてみましたが矢張り駄目でした。

かくて兩三度往復させられました後、愈々今日は駄目として幻燈を次回に譲り、會を閉ぢる事にいたしました。時に午後六時、本日の來會者は左の通りであります。(山口記)

井上傳吉君。政友巖三君。小塚辰次郎君。影山寅造君。山崎彦鷹君。榎谷徹藏君。田中孝雄君(神戸)。竹下英一君。朝輝記太留君。山口季次郎君。(來賓)奥戸善之助氏。

(第二回茶話會)

拜啓陳者前回の茶話會に於て電燈故障のため未完の幻燈講話マウントレニアに就ての續きを致したくと存じ茲に第二次茶話會相催度候間御繰合せ御來會被下度御案内申上候。

一 時 日 六月二十日午後六時より

一 場 所 私立樟蔭高等女學校に於て

一 幻燈講話 (午後七時より同九時まで)

以 上

大正八年六月

發起人 會員 竹 下 英 一

同 山口 季次郎

この案内を往復端書に刷つて在阪會員全部に(五十三枚)差出しましたのは六月十六日でした、そして出席の御返辭を頂きましたのが十六通、缺席の御返辭を頂きましたのが十五通合せて三十一通の御返辭を得ましたが差引二十二通は鐵砲丸となりました。

この日は誠に好晴で梅雨季に珍らしい美しい夜でした、定刻には早や十二三名の會員と五名程の同好者がみえて居ります。

さて愈々幻燈を初めやうと致しましたとき、何うしてもアーク燈がつきません、前回にも失敗したのですから私と朝輝氏とは大まごつき、小使は提燈をさげて走り廻る、少々心得のある方がいろ

いろ検べて下さいましたが何うも原因が分明りません、電燈の會社からも人が來ましたが、同じ箇處を只繰返して調べるばかりです。

その内に私が無鐵砲に玩むだスイッチが効を爲して漸く電流が來ました、そしてアーク燈がつかしました、一同眉を開いて席に就かれましたのが丁度八時でした。

この騒ぎのため豫定の時間を半分に縮められたのですから、幻燈は最大急行で進行します、それもその筈マウントレニアに登られた朝輝氏は氷河のある處まで自動車で往かれたのですもの、幻燈が終つてのち元との廣間へ歸つて雜談を初めましたとき、會員の二三から左の様な問題が提出されました。

即ち當地在住の會員約五十名以上あるが、往年大會の開かれた時以外、曾て交歡の機を得ない尙お互に顔も知らぬ方もある事故、この茶話會を引續き開催しては如何、

といふのであります、それで今日出席された方々全部賛同の上左の様な協約を致しました。

△在阪會員交歡の爲め隨時茶話會を開く事。

△次回開催の時日、場所、幹事、其他必要の事項は前回の席上協定する事。

△経費は出席者の分擔となす事。

△會員外同好者の出席を歓迎す。

但し會員の紹介を要す。

以上の協定に因つて次回の會合日を來る九月中旬と決めました、そして幹事を榎谷氏山口氏に依頼する事にいたしました。

終りに當日の出席者を記して此の報告を終ります。(大正八、六、二十三日山口記)

山本隆三君。宇野武男君。杉浦龍之助君。西井常造君。山中治三郎君。影山寅造君。小塚辰次郎君。高浦吉三郎君。大平千吉君。濱谷泰次郎君。土井達雄君。政友巖三君。榎谷徹藏君。朝輝記太留君。山口季次郎君。(以上會員)
政友重吉氏。田村種次郎氏。井上傳吉氏。植村誠三氏。菊池恒三氏。森脇龍雄氏。(以上同好者來賓)

信濃山岳會と日本アルプス會成立

信濃山岳會は信濃在住の山岳家河野齡藏、矢澤米三郎、牧伊三郎、百瀬慎太郎、井口良一其他の諸氏發起の元に成れり、本會と同じ道を歩む同志として本會は其成立に滿腔慶賀の意を表す、前途洋洋たる同會の愈々隆盛ならん事を祈りて止す。日本アルプス會は社團法人として認可を得て公に發表されたり總ての仕事は丸山尙氏に由れり、吾等は同志として其發展を祈りて止す。

◇ 信濃岳會々則

- 第一條 本會ヲ信濃山岳ト稱ス
 - 第二條 本會ハ山岳ノ保護及ビ山岳ニ關スル一切ノ研究調査並ニ一般登山者ノ便宜ヲ謀ルヲ以テ目的トス
 - 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ研究部、施設部、講演部、出版部ヲ置キ尙ホ其ノ他必要ナル各般ノ事業ヲ行フ
 - 第四條 本會ハ本部事務所ヲ松本市ニ支部ヲ各地ニ置ク
 - 第五條 支部ニ關スル規程ハ支部ニ於テ任意之ヲ定メ本部ノ承認ヲ經ルモノトス
- 本會ノ經費ハ會員ノ會費、一般寄附金及ビ補助費ヲ以テ之ニ充ツ

◎會 報

第六條 本會ヲ分チテ左ノ三種トス

一、正會員 本會ノ目的ヲ賛成シ規定ノ會費ヲ納ムル者トス

二、特別會員 本會ノ事業ヲ賛成シ金五拾圓以上ヲ寄附シタル者トス

三、名譽會員 斯道ノ先覺及ビ本會ノ爲ニ盡力セラルル篤志家ニシテ幹事並ニ評議員會ノ議決ヲ經、總裁之ヲ推薦シタル者トス

第七條 正會員ハ會費トシテ毎年金壹圓ヲ前納スルモノトス 特別會員、名譽會員ヨリハ會費ヲ徵收セズ

第八條 本會々員タラントスル者ハ本會所定ノ入會申込書ニ指定ノ要項ヲ記入シ其年度ノ會費ヲ添テ申込ベシ 入會ノ諾否ハ幹事會之ヲ決ス

第九條 本會々員ニハ所定ノ徽章ヲ交附ス 但シ徽章代ハ其實費ヲ申受ケ

第十條 本會々員ニハ本會發行ノ出版物及ビ寫眞等ヲ實費若クハ無代ヲ以テ頒附スルコトアルベシ

第十一條 本會々員ハ集會ニ出席シ演說講話ヲ爲シ又會員外ノ知友ヲ同伴スルコトヲ得

第十二條 本會々員ハ本會所藏ノ圖書ヲ借覽シ登山用具ヲ使用スルコトヲ得

第十三條 本會々員ハ會務ニ關シテ建議ヲ爲スコトヲ得

第十四條 本會々員ニシテ本會ノ體面ヲ傷クル行爲アリ又ハ會員タル義務ヲ果サザルトキハ幹事及ビ評議員會ノ

第十五條 決議ヲ經會長ノ決裁ヲ得テ除名スルコトアルベシ 本會々員ニシテ登山セントスル者ハ其計劃一班ヲ本部ニ報告スル事ヲ要ス、計劃ノ變更モ亦同ジ、又下山シタル時ハ直チニ其趣キヲ本部ニ報告スベシ

第十六條 本會々員ニシテ住所ヲ移轉シ又ハ改姓改名シタルトキハ其都度必ズ本部ニ通知スベシ

第十七條 退會セントスル者ハ其旨本部ニ申出ヅベシ、退會者ニハ既納ノ金品ヲ返附セズ

第十八條 總裁 一名 知事 赤星典太

副總裁 一名 矢澤米三郎

會長 一名 河野 齡藏

副會長 一名 牧 伊三郎

幹事 一名 井口 眞一其他

評議員 若干名

支部員 若干名

相談役 若干名

第十九條 總裁、副總裁、會長、副會長ハ名譽會員中ヨリ之ヲ推戴ス幹事、評議員ハ正會員中ヨリ之ヲ選舉ス 支部長ハ正會員又ハ特別會員中ヨリ之ヲ推薦ス 相談役ハ正會員特別會員又ハ名譽會員中ヨリ之ヲ推薦ス

第二十條 總裁ハ會務ヲ統裁ス

◆社団法人日本アルプス會定款

第一章 總則

第一節 名稱

第一條 本會ハ之レヲ社団法人日本アルプス會ト稱ス

第二節 目的

第二條 本會ノ目的ハ日本アルプスノ研究、保護、紹介ヲナシ及ビ登山ヲ獎勵シ且其便宜ヲ謀リ以テ國民剛健ノ氣稟ヲ養成セシムルニ在リ

第三節 事業

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左記ノ事業ヲ行フ

一、登山ノ爲メ必要ナル道路、橋梁、指導標、石室、宿泊所等ノ設備ヲナスコト

二、登山案内並ニ人夫ノ養成ヲナスコト

三、日本アルプス特有ノ動植物並ニ風景景勝ノ保護ヲナスコト

四、日本アルプスニ關スル各種ノ出版物ヲ發行スルコト

五、登山及學術ニ關スル各種ノ講演會ヲ開催スルコト

六、日本アルプスニ關スル博物館、圖書館及ビ高地觀測所等ヲ設クルコト

七、其他本會ノ目的ヲ達スル爲メ必要ナル一切ノ事業ヲナスコト

前項各號ノ事業ハ神河内ヲ基點トシテ之レヲ行フ

副總裁ハ總裁ヲ補佐ス

會長ハ會務一切ヲ監督處理ス

副會長ハ會長ヲ補佐ス

幹事ハ本會ノ事務萬般ノ遂行ニ當ル

評議員ハ會務遂行上ノ評議ニ與ル

支部長ハ支部一切ノ事務ヲ處理ス

相談役ハ會務ニ關スル諸般ノ相談ニ應ズ

第二十一條 役員ノ任期ハ幹事及ビ評議員ハ二ヶ年トシ滿期毎ニ改選ス

但再選スルコトヲ得

其他ノ役員ニハ任期ノ制限ヲ設ケズ、幹事及ビ評議員會ノ議決ヲ經テ推薦ス

第二十二條 本會ハ毎年一月、三月、五月、七月、九月、十一月ノ六回例會ヲ開ク、尙ホ時宜ニ依リ臨時大會ヲ開クコトアルベシ

幹事會、評議員ハ必要ニ應ジテ隨時之ヲ開ク

第二十三條 支部會ヲ開キタルトキハ其要項ヲ本部ニ報告スルコトヲ要ス

第二十四條 本則ノ規定ニ明瞭ヲ缺キ或ハ疑議アル場合ノ事項遂行ニ關シテハ幹事會ノ協議ヲ經會長ノ決裁ヲ得テ之ヲ行フモノトス

第二十五條 本則ハ例會若クハ臨時大會ノ協議依ニリ出席者過半數ノ同意ヲ得テ變更スルコトヲ得

第二十六條

長野縣松本市三丁目

◎會 報

第四節 事務所

第四條

本會ハ主タル事務所ヲ東京市麹町區有樂町一丁目三番地ニ置キ支所ヲ長野縣南安曇郡安曇村字神河内國有林四四六八番地ニ置ク猶理事會ノ決議ニヨリ便宜各地ニ支所ヲ設クルコトヲ得
支所ヲ設ケタル時ハ之レヲ主務官廳ニ報告スルモノトス

第二章 資産及會計

第五條

本會設立ノ日ニ於ケル資産ハ左ノ如シ
一、發起人丸山尙、塚原嘉藤兩名ノ寄附ニナル長野縣南安曇郡安曇村字神河内國有林四四六八番地ニ建設セル木造板葺二階建家屋一棟建坪五十五坪外二階坪二十四坪附屬築建具付此見積價格金參千圓也
二、發起人ヨリ贈出セル金額金貳千五百圓也
有志者ノ寄附、會費、資産ノ利子其他ノ雜收入ハ資産ニ編入ス

第六條

本會ノ資産ハ別ニ定ムル本會定款施行細則ニヨリ理事會ノ決議ヲ以テ之レヲ管理及ビ處分ス

第七條

本會ハ評議員ノ決議ニヨリ基本財産ヲ設クルコトヲ得
前項ノ基本財産ハ評議員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ之レヲ處分スルコトヲ得ズ

第八條

會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第九條

本會ノ豫算ハ毎年度理事會ノ決議ヲ以テ之レヲ定メ總

裁ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス

本會ノ決算ハ總裁ノ承認ヲ經テ總會ニ報告スルモノトス

第十條

本會ノ會計ニ關スル細則ハ理事會、評議員會ノ決議ヲ以テ之レヲ定ム

第三章 會 員

第十一條

本會ノ會員ハ左ノ如シ

一、正會員

入會金壹百圓以上ヲ贈出シタル者

二、特別會員

本會ニ對シ多額ノ贈出金ヲ爲シ又ハ特別功勞アル者

三、贊助會員

本會ノ事業ヲ賛スル者ニシテ學識又ハ名望アル者

四、名譽會員

本會ノ事業ヲ翼賛スル者ニシテ學識名望アル者ニ就キ總裁之レヲ推薦シタル者

正會員及特別會員ヲ以テ法律上ノ會員トス

第十二條

加入金貳圓及毎年會費金貳圓宛又ハ一時金參拾圓以上ヲ納ムル者ヲ本會々友トス

會友ノ待遇ハ別ニ之レヲ定ム

第十三條

本會々員又ハ會友タラントスル者ハ其旨理事ニ申告スベシ

第十四條

入會ノ拒否ハ理事會之レヲ決ス
本會ヲ退會セントスル者ハ其旨理事ニ申告スベシ

會費ヲ納入セザル者ハ會員又ハ會友タルノ資格ヲ失フ
本會々員又ハ會友ニシテ本會ニ不利益ナル行爲アリト
認ムル者ハ評議員會ノ決議ニヨリ之レヲ除名ス

第四章 役員

第十五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、總裁 一名 副總裁二名

二、理事 十名以内

三、評議員 若干名

四、監事 三名以内

理事ヲ以テ法律上ノ理事トス

第十六條 總裁、副總裁ハ正會員及特別會員過半數ノ決議ヲ以テ
舉望一世ニ高キ人ヲ推戴ス

第一期ノ理事及ビ監事ハ本會發起人中ヨリ互選シ第二
期以下ハ總裁ノ推薦ニ任ス

評議員ハ又總裁ノ推薦ニ任ズ

總裁ハ本會ヲ總理シ副總裁ハ總裁ヲ輔佐ス

理事ハ總裁及ビ總會ノ指揮ヲ受ケ本會諸般ノ事務ヲ處
理ス

第十七條 理事、監事ノ任期ヲ各五ヶ年評議員ノ任期ハ三ヶ年ト
ス但シ再任ヲ妨グズ

第十八條 總會ハ毎年一回定期總會ヲ開會ス

總會ハ正會員又ハ特別會員ヲ以テ之レヲ組織シ其三分
ノ一以上ノ出席ヲ以テ成立ス

第十九條 總會ハ毎年一回定期總會ヲ開會ス

總會ハ正會員又ハ特別會員ヲ以テ之レヲ組織シ其三分
ノ一以上ノ出席ヲ以テ成立ス

第二十條 理事會ニ於テ必要アリト認メタルトキ又ハ評議員會ノ
請求若クハ會員五分ノ一以上ヨリ會議ノ目的タル事項
ヲ示シテ請求アリタルトキハ臨時總會ヲ開會ス

第二十一條 總會ノ招集ハ十日前に其會議ノ目的タル事項ヲ示シ文
書ヲ以テ之レヲ通知スベシ

第二十二條 總會ノ議長ハ理事中互選ヲ以テ之レヲ決ス

第二十三條 總會ノ議事ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之レヲ決ス但シ
可否同數ナルトキハ議長ノ決スル處ニヨル

第二十四條 評議員會ハ理事會ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ評議
員三分ノ一以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求
アリタルトキ理事之レヲ招集ス

第二十五條 第廿一條乃至第廿三條ノ規定ハ評議員會ニ之レヲ準用
ス

第七章 附則

第廿六條 定款變更ハ會員二分ノ一以上ノ同意ヲ以テ之ヲ行フ

第廿七條 本定款施行細則ハ理事會ニ於テ之ヲ定メ評議員會ノ同
意ヲ經ルコトヲ要ス

右細則ヲ設ケタル時ハ主務官廳ニ報告スルモノトス

大正五年十一月二十日

設 立 者

伊原五郎兵衛

小穴秀一

唐澤俊樹

一五一

◎會

報

設立ノ日大正五年十一月二十日

許可ノ日大正六年十二月二十一日

事務所 東京市麹町區有樂町一丁目參番地

支所 長野縣南安曇郡安曇村字神河內國有林第四四六八番地

社團法人日本アルプス會

總裁 澤 柳 政 太 郎

副總裁 加 藤 正 治

理事ノ氏名住所

東京市麹町區有樂町一丁目參番地

塚 原 嘉 藤

長野縣下伊那郡飯田町

伊 原 五 郎 兵 衛

同 縣更級郡中津村

丸 山 尚

東京市日本橋區數寄屋町拾五番地

降 幡 積

勝 山 勝 司
吉 家 敬 藤
中 澤 重 雄
成 澤 伍 一
倉 山 島
丸 降 幡
小 町 田 梓
鹽 澤 貞 雄

登山消息

同 市小石川區同心町十六番地

小 林 營 成

△Grindelwald は戦争の爲非常なる不景氣にて小学生は寫眞屋より寫眞器を安く買ふ事が出来ました、案内者も今少し早ければ Wengen の方では Jungfrau へ北方では氷河の上の方までに行けるだらうとの事を話して居りました。

夏是非來てくれとの事で約束をしました、尙スイスには獨逸のレンズ中々に御座いまして且つ安く御座候佛英にては目の出る程に御座候昨日は大雪今日快晴にて氷河へ参り申候(瑞西インターラーケンにて八年三月廿二日、黒木三次)

△イシタラークンよりユングフラウが見たさに當リエンゲンに参り申候三月廿日と云ふに雪降りて全くの冬景色に御座候遙に諸兄の健康をスイスの山中より祝す。

(八、三、二二、ウエンゲンにて 黒木三次)

△愈々登山時期となりました益々御健勝の御事と存じます。私も相變らず手紙攻めに遇つて忙しがつて居ります。二十八日に大澤の小屋開きに参りました、松本の山岳會の連中に二三の同行希望者があつたので蓮華まで行つて昨日の五時頃歸宅いたしました、まだスバライシ雪でした。殊に蓮華から見た劍の壯觀は(雪の)素敵さいふ外ありませんでした、櫻さ、駒鳥さ、白樺さいつも乍ら針木は真い所です。

登山組合も方々に出来ました、有明口のは私の友達の新沼千尋といふ君がやつてゐます、此れは大町さんとうまく連絡をとり度い考へてゐます。北條は冬から細野と山木が擦れ合つて、反對の聲をあけてゐますので閉口してゐます。松澤氏の方では今年に細野の奴は誰も使はないと力んでゐるので新しい人夫ばかりでは大黒や祖母谷方面に不都合を感じるだらうと餘計な心配をしてゐます。人夫等を使ふに氣骨がなれたら面倒で困ります、此頃も賃金の協議をした後に不平を言ふのが出来て来て、到頭案内者二圓五十錢人夫二圓二十錢といふ高價にせりあげられました、登山者の方には申譯ない様な氣がしますが全く、世の中が變つた様な今です。如何ともする事が出来ず悲觀です。

針ノ木の標が今満開でした。

明後日から一高の人達がふしかけて來ます。

(八、六、三〇)大町にて 百瀬傳太郎拜

△去六日夜東京をさび出し大菩薩連嶺へ出かけ候、新宿にては近藤様にも目にかけり候七日朝初鹿野に下車、田野をへて焼山に入り、單獨、黒岳山(木暮様より教へられ候、當地にては只黒木といふのみ)に上り、ガンガハラスを縦走して狼平に出で、之より大菩薩峠舊道より小管村池之尻に下り泊、八日、青柳新左衛門を伴ひて大菩薩(大黒茂)に上り鹽山に下り泊翌九日歸京致候、忙しき旅の事さて何れも之ものは無之と申す候へごいさゝかの事は木暮様に御報告申上置候。(八、五、一二 沼井鐵太郎)

△小生六日風雨を冒して上高地へ參申候、同日夕刻より大景風雨と變じ、夜に入りて益にげしく頗る壯觀を極め申候、七日も雨、

◎會 報

梓川の出水は近年稀に見る程にて清水屋の温泉には浸水致したる次第に候、八日朝温度四十九度先は右餘は後便に早々頓首。

(七月八日上高地にて丸山尙)

會務報告

大正八年三月十六日 文部省災害豫防展覽會出品の件につき東京教育博物館に幹事出張す。

同 四月一日 規則改正につき特別會員に協議狀を發す。

同 四月六日 本會事務所に幹事會開催左記の件を議す。

一、大會講演者につき、無効會員章公表の件。

(出席者)木暮、武田、梅澤、高野

同 四月十五日 山岳十三年二號納本

同 二十一日 會員に發送

同 二十一日 大會通知發送

同 五月四日 十二回大會開催

同 五月十一日 小田原辻村幹事郎に於て外人會員の爲め高山植物展覽會を行ふ。

同 六月一日 午後一時半より東京保々近藤合名會社樓上に高野幹事司會者として小集會開催。

同 六月二十九日 長野市 會員河野壽藏氏よりの請托に由りて、

皇太子殿下に同氏の幻燈器に供すべき爲め幻燈器械一切を貸與す。

同 六月十五日 松本市に於て信濃山岳會、日本アルプス學會發

會式舉行につき本會より右發會式に祝電を發す。

同 六月十五日 松本市に於て信濃山岳會、日本アルプス學會發

會式舉行につき本會より右發會式に祝電を發す。

會員諸君に

第六回小集會期日

◇來ル十一月九日（第二日曜）當回に限り第二日

曜日に變更）午後一時より

◇東京市麴町區紀尾井町三番地皆香園（九段八三

八）に於て（電車赤坂見付下車）

◇講演豫定

末 定

幹 事 辻 村 伊 助氏

同

同 武 田 久 吉氏

◇在東京會員諸君には追て講演決定の上御通知す
べし

原稿蒐集所

從來共本誌の原稿は、左記原稿蒐集所宛御送附を
希望しつゝあれど、間々他幹事宛送附さるゝ方々
あり、自今之を勵行あらん事を乞ふ

東京市本郷區蓬萊町三一 木暮理太郎

會費納付につき

本年度會費未納の諸君は此際納入ありたし、御送
金に就ては相成べくは振替口座へ御拂込ありたし

「登山案内者」につき

前々號より掲載しつゝある「登山案内者」欄に就
ては各位よりの御通信を特に希望する所なり、登
山案内者の改善は現在の問題にして將來の題目に
あらざるなり。



大正八年十月十八日印刷
大正八年十月廿二日發行

【定價七拾錢】

新潟縣三島郡深才村深澤

發行兼編輯者

高頭仁兵衛

橫濱市太田町五丁目八十七番地

印刷者

村岡平吉

橫濱市山下町百〇四番地

印刷所

福音印刷合資會社

橫濱市本町四丁目六十七番地

發行所

日本山岳會事務所

高野鷹藏方

(振替貯金口座東京四八二九番)
電話特長本局百七十一番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂



歐洲アルプス產高山植物種子及生品の頒布

明春再び瑞西の山岳に登攀の爲め渡歐を機とし、多年自園に栽培せる歐洲產高山植物生品並びに種子全部二百五十餘種を、本邦に分布せんが爲めに廣く同好者に頒つ。

- ◇生品十二種一組 金 六 圓 (送料共)
- ◇種子十二種一組 金 五 圓 (送料共)

特に御希望の種類に就ては御照會を乞ふ。

神奈川縣小田原町櫻小路(城内辨財天)

辻 村 伊 助

振替口座東京四四九三六
辻村農園電話小田原二二四

NEW MEMBER.

The following new member was admitted into the Club, in April, 1919 :—

J. D. Willis, c/o E. H. Hunter & Co., Kawaguchi, Osaka.

Proposed by H. E. Daunt.

Seconded by B. Nagano and S. Kondo.

ABSENT MEMBERS.

	Admitted.
Felix Dinsdale	June 1914
O. F. Mocock	Oct. 1917
H. Treichler	Nov. 1918
Oswald White	July 1915

JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese part of this number are :—

Shinshiu Iwasugeyama—

By M. Tsujimoto, *Kogakuhakushi*.

Mountains in Kiushiu—

By J. Yatsushiro.

Tanzawa Group—

By E. Tozawa and T. Fujimura.

Komagatake, Senjodake and Hoosan—

By N. Yanagi.

About Gannoharasuriyama—

By H. Takeda, D.I.C., *Rigakuhakushi*.

Small Waterfalls of Nikko Yukawa.

An Old Path to Shirakuzureyama.

Alpine Plant Notes.

The following books have been presented to the Club Library :—

"Norge" By S. Kato, Esq.
 "Inaka," Vol. 10 By H. E. Daunt, Esq.
 The Mountain that was God ... By Yagi, Esq.

CLUB PROCEEDINGS.

THE Third Regular Meeting was held at the Secretary's Office February 2nd, 1 p.m. Mr. S. Kondo presided. Following lectures were given :—

Ascent to Tateyama—By Mr. M. Kamuri.
 Ikoma Cable Car Service—By Mr. T. Z. Takano.
 About the Gannoharasuriyama—By H. Takeda, D.I.C., D. Sc.

About 40 members were present.

The Fourth Regular Meeting was held at the Secretary's Office on June 1st, 1 p.m. Mr. T. Z. Takano presided. Following lectures were given :

Bird-Eye View Sketches of the Mountains and Mountain Districts—
 By Mr. M. Imamura.
 Impression of Chichibu Range—By Mr. J. Tanabe.

About 35 members were present.

The Fifth Regular Meeting was held at the Kaikoen, Shimidzudani Park, Kojimachi-ku, on Sept. 7th, 1919. Dr. Takeda presided. Following lectures were given :

Trip along the Kurobegawa—By Mr. Kogure.
 The Mountains between Tamagawa and Sagami-gawa—By Dr. Takeda.

About 65 members were present. Next meeting will be held at the same place on Nov. 9th, 1919, 1 p.m. Members are entitled to bring their friends.

The Twelfth Annual Meeting was held in the Hall of the Sankaido, Akasaka, Tôkyô, on May 4th. An Exhibition of rare maps of the mountains and mountain regions in Japan and abroad was shown to the public from 10 a.m. to 5 p.m. From 5 p.m. the following lectures were given :

Of the Gabisan, China—By Mr. G. Kobayashi.
 The Military Survey Works—By Capt. Kimoto.
 Descriptions of Mountains in the Ancient Maps—By Prof. Yamazaki.

About 200 attendants.

As for us the exigencies of an inexorable state of having to toil in an open port for a living compelled us to take the quickest route back to civilization, so we had no alternative but to retrace our steps to Daigahara and the railway line. At the Byobuiwa hut we had our second breakfast, and the old caretaker with a face like an ivory netsuke gave us some fresh mushrooms as a parting gift. The Koshiu Komagatake is a fine mountain, and the Daigahara route—given fine weather—is easy for any climber in training.

CLUB LIBRARY.

THE following publications and books have been added to the Club Library since April, 1919:—

Bulletin of the Associated Mountaineering Clubs of North America	New York, 1919.
By-Laws and Register of the American Alpine Club...	New York, 1919.
Bulletins of the American Game Protective Association, Vol. 8, Nos. 1 and 2... ..	New York, 1919.
Summer Programme of the British Columbia Mountaineering Club	Vancouver, 1919.
The Mountaineer, Vol. 11	Seattle, 1918.
The Mountaineer Bulletins, Vol. 9, Nos. 6-9	Seattle, 1919.
The Year Book of the Prairie Club	Chicago, 1919.
The Bulletins of the Prairie Club, Nos. 82-87	Chicago, 1919.
Trail and Timberline, Nos. 1-15	Denver, 1918-1919.
Field and Forest Club Bulletin, July-August	Boston, 1919.
The Bulletin of Geographical Society of Philadelphia, Vol. 17, No. 2	Philadelphia, 1919.
The Mid-Pacific Magazine, Vol. 17, Nos. 3-6 and Vol. 18, Nos. 1-3... ..	Honolulu, 1919.
Appalachia, Vol. 14, No. 3 and No. 4	Boston, 1918-1919.
Mazama, Vol. 5, No. 3	Portland, 1918.
Bird-Lore, Vol. 21, Nos. 1-4	New York, 1919.
Several Publications of the National Association of Audubon Societies	New York, 1915-1916.
Colorado Chautauque Bulletins, Vol. 8, Nos. 3-7	Boulder, 1919.
The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 15, No. 87	Edinburgh, 1919.
The Geographical Journals, Vol. 53, Nos. 1-6, and Vol. 54, No. 1	London, 1919.
The Annual Records of the Ladies' Scottish Climbing Club, Nos. 6-10	Edinburgh, 1913-1918.
La Montagne, Vol. 14, Nos. 129-133 and Vol. 15, Nos. 134-136... ..	Paris, 1918-1919,
Alpina, Nos. 1-4... ..	Madrid, 1918.
Anuario, Club Alpino Español	Madrid, 1919.
Bulletti del C. E. de C., Nos. 285-287	Barcelona, 1918.
Bollettino del C. A. I. Sezione Fiorentina, Vol. 10, Nos. 1-2	Firenze, 1919.
L'Echo des Alpes, Vol. 55, Nos. 1-4	Geneve, 1919.
The Annual Reports of the Tourist and Health Resorts Dept.	Wellington, 1913-1918.

"amidst scenes which exactly filled the ideals of Chinese Art." Alas, no sooner had we reached our goal than great banks of mist began to roll up from the valley of the Norokawa completely shutting off any view of Ho-O-Zan, the Jizodake ridge and Fujisan. Looming to the right of the Norokawa were the triple-topped Shirane, with Kaigane or Kitadake towering above the others, and Akaishisan in a dead straight line behind them. Further still to the right was that fine mountain Senjogadake. To the north-west we were more fortunate. There stretched out in a long line lay the giants of the Northern Alps, many of them being easily recognised by the peculiar formation of each respective peak. Twin-topped Norikura, Yakeyama smoking merrily, Hodaka and its battlemented spires, and Yurigatake, the Spear Peak, as well as the rounded cone of Jonendake—all of them old friends with faces one never tires of looking at. Behind them again lay the magnificent Eboshi Ridge traversed by Messrs. H. E. Daunt and J. G. S. Gausden in July, 1918, Kurodake, the Crystal Mountain, Yakushidake and the Tateyama Range, and further still the Great White Horse Peak and the Lotus Group. A view fit for the gods themselves, and Jupiter himself seated on his Olympian throne never saw a finer sight than this.

We could see no snow on Komagatake so the rains and the sun must have put in a good deal of work that summer.

The date of our climb was August 22nd, 1911. The top of the mountain measuring approximately one hundred square yards in extent and 9,849 feet in height is covered with huge granite boulders lying about in picturesque confusion, whilst the white-robed pilgrim is duly cared for by more than one shrine and several stone monuments. One large monolith standing behind a white stone torii was inscribed with the following in Chinese ideographs, i.e.,

Dainichi Daijo Fudo Myowo, Hoden-Ko.

which inscription can be taken to mean that the stone was erected in honour of Dainichi Nyorai—one of the Buddhist trinities—a personification of wisdom and purity; Fudo, the God of Wisdom, and Myowo, a Wise King or Ruler. Hoden-ko is the name of a pilgrim club. The monument had evidently been erected at their order and expense.

It is possible to descend this mountain on the western side to Kurokawa and Takato in the valley of the Tenryugawa. This difficult route was traversed by the Rev. Walter Weston in the spring of 1903, this particular flank of Komagatake "being extraordinarily steep and covered with virgin forest and seamed with narrow gullies filled with dazzling snow."

It is also possible to reach Ho-O-Zan and the Tsuetate-toge along a ridge leading off the mountain in a southerly direction.

the weather' was gloriously fine, and the stars shone out with tropical brilliancy. After such a long day no time wasted in getting to a complete understanding with the dinner, which consisted of fried Oxford sausages and hot rice assisted by some soul-satisfying and thirst-quenching liquid obtained from a crystal spring in the vicinity. Bivouacs of this kind have their advantages. No one can complain of not getting enough fresh air. Some hot cocoa put the finishing touch to the picture, and soon the entire entourage were lost in the land of dreams. Whilst wandering thus far off the beaten track to the Blue Dragon-fly there appeared a wondrous vision of the Jewelled Hare, the Seven Gods of Luck, the Forty Seven Ronin, and the man from Satsuma dancing the Ise Ondo before Urashima—the fisherboy, Ama-Terasu—the Sun Goddess, and Tanabata-sama—the Spider-Princess, or the Peach Child on the Magpie Bridge which spans the Celestial River flowing through the Plains of Heaven.

Soon after the first streak of dawn had flushed the western sky we were scaling the ladders and chains on the face of the Byobu-iwa cliffs. After this, which is the most interesting part of the climb, we got out into more open and less difficult country. At a point on the ridge some thousand feet below the summit itself a loud report was heard similar to the noise made by an explosion of dynamite, and turning round a large volume of smoke was seen issuing from the crater of Asamayama between fifty and sixty miles away in a north-easterly direction. The smoke rose in a vertical column to a great height and then opened out like an enormous umbrella. There was little or no wind, and the air beautifully clear as the day was gloriously fine. It seemed to us that Vulcan himself had turned on this imposing spectacle for our especial benefit. Japan's crack volcano is well worth seeing when working at super-heated temperatures, and moreover fifty odd miles is quite a safe distance. But to return to our mountain, and to quote with one of the immortals:—

“How faintly flushed, how phantom fair,”

“The Pony Peak was hanging there,”

The summit towered above us shimmering white in the bright sunshine. Magnificent granite cliffs fell away on either side in sheer precipices to torrent-riven mountain glens, the home of the duck-faced deer, monkeys, pheasants, and the speckled trout, never yet trodden by the feet of human beings. Then we quickened the pace to get to the top before any mist and stray clouds should obtain the chance of spoiling a magnificent view. As that crack climber, Mr. T. H. R. Shaw, has written;—

“Upwards along the crest we scrambled over crags and ridges

better climb than the monolith of Ho-O-Zan? It is understood that the usual climbing season for the high mountains of Dai Nippon commences in July, at the end of the nyubai or rainy season, and finishes with the first fall of snow in October, if not earlier. At 5,000-8,000 feet above sea-level the temperature falls to a low point during the nights of autumn, and it would also be a difficult matter to get goriki after the summer months.

The Koshiu Komagatake was the first to claim attention, partly on account of having climbed the Shinshiu mountain namesake standing as it does in close proximity just across the valley of the Skydragon River, and partly because we wished to emulate the feats of the two climbers mentioned in "The Two Komagatakes," and written by Mr. T. H. R. Shaw—see "Inaka," Vol. 1, Chap. xii.

After making a col of Jonendake—the Mountain of the Ever-praying Priest—from the Toyoshina side and descending to the charming valley of the Adzusagawa, we put in a few days at the comfortable Onsen of Kamikochi. Here we annexed "for value received" our fair share of smoked trout, canned apricots and Kirin Beer, as also a fresh 'scalp' from Kasumigatake, which is quite an interesting climb. We also witnessed a very fine eruption of Yake-yama early one beautiful summer morning.

The usual outlet from the climbers' paradise over the Tokugo pass saw us wending our way to the scorching Matsumoto plain, this trek being enlivened somewhat by a stand up fight between two squealing basha-ponies just outside Shimajima.

Right glad we were to leave the sun-baked train the following day at Hinobaru, and to reach Daigahara—a long straggling old world village with brown thatched roofs to the houses—standing near the base of our mountain some three miles or so away. Little time was lost in arranging with a couple of goriki as we had planned to reach the Byobu-iwa hut that day, and although these carriers were merely sturdy farmer lads barely out of their teens, they did yeoman service, and got us there just before the light gave out. To the shrine of Maemiya the path leads through wooded country fairly level in places, but rising gradually when nearing the crossing place of the river called the Ogiragawa. The bridge had been washed away so we had no choice but to ford the stream. After passing this point the track commences to rise sharply and is very steep in parts. The climb to the hut from Daigahara will take about 5 hours. Quite the outstanding feature of the scenery were the rhododendron trees with their evergreen leaves, gnarled trunks and scarlet flowers: whilst a feast of wild raspberries afforded a satisfactory substitute for afternoon tea.

The hut itself when we reached it was found to be minus two walls, and the roof itself was conspicuous by its absence. Luckily

SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS.

PART I.—THE KOMAGATAKE OF KOSHIU.

BY

“BLUE DRAGON-FLY.”

JUST as the pilgrim bending for the first time in front of a sacred shrine so is the mountaineer bringing to fresh peaks his own personal contribution in the way of varied and different emotionality.

Curiosity blended with expectation that received no rude and jolting disappointment was paramount on each separate occasion, and on leaving with regret the pleasurable feeling was experienced of having received a decidedly good run for the money. And in one instance perhaps more so.

The fact that the psychology of mountaineering will never be exhausted must be the excuse for these lines. At the same time the writer feels he cannot do full justice to the subject after a perusal of the Rev. Walter Weston's glowing accounts of his travels and explorations in the Southern Alps of Japan, which is the name generally applied by foreign mountaineers to “the great mountain mass lying between the valleys of those two large rivers the Fujikawa and the Tenryugawa,” and “second only in orographical importance to the Etchū-Hida Mountains,” otherwise known as the Northern Alps. See:—“The Playground of the Far East”—London. John Murray, 1918. On this score alone he therefore craves the indulgence of the critical.

Yet, if the Southern Alps cannot lay claim to the proud title of “Second to None” by reason of numbers thus being in a decided minority, still by reason of the altitude of some of its giant peaks—to wit, Akaishisan, Kaigane, and the Koshū Komagatake, and by reason of the superb mountain scenery of some of its torrent-riven valleys of the Norokawa and the Hayakawa, and the Arakawa as well, there is not much to choose between them: although the absence of the glistening snow slopes of the northern ranges will be remarked on by the lover of Alpine panorama. One may miss the exhilarating feeling of being above the snow line, still the climbing in the Koshū mountains is of the finest; and where in the whole of the Japanese Alps will you find a higher peak than Kaigane, and a

ten mile walk to Kamikochi over the Yakedake-toge we took it very easily indeed and reached our destination about 4 o'clock. Both my knees were painful now, so I decided to rest all the next day at Kamikochi. It was pleasant surprise to meet a friend of mine who, together with his sister, another lady and a gentleman climbed Hodakayama the next day. I believe this is the first time any lady of any nationality has ever been up to the summit of Hodakayama. During my day's spell at Kamikochi, the proprietor Kato, who is also the owner of the Shimizuya at Shijima, told me he was making preparations to cater for foreign guests next year. One can therefore reasonably expect to obtain some of the comforts that have become necessities to us foreigners.

Next morning, at 6 o'clock, I left Kamikochi for Shimajima. It was a muggy day and we did not have a view of Hodakayama as we climbed the Tokugo Toge. Just about a ri ($2\frac{1}{2}$ miles) from Shimajima my right knee became so extremely painful that I could not bend it at the joint. I was glad when we reached the Shimizuya Inn where they had a rikisha waiting, and shortly afterwards I was on my way to Matsumoto. For intending travellers it may be of interest to know that the charge for carrying luggage from Shimajima to Kamikochi is ¥2.50, but the return journey ¥1.20.

The reason being the loss of a day when the 'goriki' goes from Shimajima as it takes a day to return. I had two guides for five days and paid one for the trip ¥8.50 and the other ¥7.50, also ¥1.00, one night's lodging at Kamikochi for both of them. I might also mention that I spent ¥5 at Hirayu and the same amount at Gamada. This included three meals and a night's lodging for myself and two guides, and also food for them for an extra day while we were climbing Norikura and Kasadake. It also included tips. My lodging bill at Kamikochi for three nights and eight meals amounted to ¥4.50. Of course tips were extra. The railway fare from Yokohama to Matsumoto second class, no first class, is ¥3.13.

[The prices mentioned in this article have since been considerably increased.—*Editor.*]

and the guide going ahead had to cut steps as we proceeded. While slowly crossing this part we were startled by hearing a loud crash behind us, and looking round saw a large block of snow rolling down the slope, and a few minutes later a second report told us another block had fallen.

About 9.30 a.m. we reached a spot where we had to crawl along the edge of a precipice. Then similar going to what we had been having and about three hours later found us at the summit. The view was, however, not as clear as from Norikura, as it was nearly noon, and after a rapid survey and a meal we descended to our tent.

One guide having gone on ahead caught a fine mountain trout, which he presented to me, after cooking it by the camp fire. I had eaten all of the fish that I thought could possibly be eaten, when the guide asked me to give him the remainder. I handed the skeleton to him and was surprised to see him eat the head and part of the backbone.

Another struggle through the dense forest and walk over the hills brought us to Gamada. My knee had stood the strain, but now was in a bad way, so we decided to return the next day by the Yakedake-toge to Kamikochi.

My going to the bath at Gamada evidently was an event to the village children as I was followed by quite a little crowd. They all crowded around the entrance until some Japanese bather remonstrated with them. They then moved away, leaving one as a sentry to inform them of my movements. Meanwhile, one enterprising youngster had climbed on the roof where he had an uninterrupted view. On my arising to get out of the bath the one on guard gave the signal by shrilly yelling out "the foreigner is getting out." Immediately there was a rush to get front seats.

When I left the bath some half dozen of the more enterprising children followed me to my room. Their attention was getting somewhat embarrassing when I noticed a vendor of cakes passing by, so hailing him bought a cake for each of my admirers. They acknowledged their thanks by holding the cake to their forehead, and then walked away, for which I was thankful.

It was quite amusing, when the wife of the innkeeper came to make up my bed. I noticed she had laid the lower futons and sheet and then seemed to be at a loss as to what to do next. Then summoning up her courage, she turned to me and asked if I wanted to have some flea powder sprinkled on. Having had past experience, I immediately acquiesced. She then produced a packet from the sleeves of her kimono, and strange to say it worked well, and I had a peaceful night.

Next day was another scorcher, but as we only had about a

force a passage by pushing. To add to our difficulties we had to look where we placed each foot, as underneath were decayed trees. Often in testing the ground with my stick it would sink in right up to the handle. The air was close and humid and by the time we got through after an hour's hard struggling we were all wet through with perspiration.

We now walked along the bank of a river, where the air was fresher. While clambering over a large rock one of the guides noticed a large trout in a clear pool and as we had brought a line with us stopped to try his luck while the other guide and myself sat by looking on. In a few minutes the trout rose to the fly, and a second later was hooked. Now began a struggle, the guide receiving enthusiastic applause and much advice from his audience of two. The trout was however, game, and fought hard for his liberty, and unfortunately for us got it, as the line snapped. A little later we had to ford the river again, and then, discovering a shady little nook near the river, at the foot of Kasadake, we decided to pitch our tent. It was a delightfully pretty spot amongst the trees, and wild flowers grew all around, especially lilies. While one guide went fishing, the other chopped down some trees, and after making a soft bed of boughs and leaves erected our tent. Meanwhile I was lazily stretched out on an immense rock, contemplating and marveling at the titanic forces of nature. It seemed as I was gazing at the rocks as they lay in scattered confusion round me, as if some giant hand had in a fit of anger hurled rock on rock, and then left them piled indiscriminately one on top of the other.

Our fishing friend having returned with empty hands, we decided as the kettle was boiling to have supper while it was still light, and after a substantial meal felt content with ourselves and the world in general as we lay stretched out around the camp fire smoking and yarning, having also a nip or two to keep out the cold. Each told of feats done in the past until yawns told us 'twas time to retire.

Waking early the morning showed all the prospects of another fine day. After breakfast we packed what food was necessary and started on our climb. It was arduous work, as we had to clamber over those immense rocks, but having 'waraji' we made good progress. After three quarters of an hour climbing, we struck snow which although slippery was easier going than over the rocks.

The way now led up a ravine between two immense cliffs of forbidding appearance that seemed to defy the efforts of puny man to scale. We walked alternately over snow and rocks until we came to a large patch of snow which the guides informed me was probably a 20 or 30 ft. deep stretch. A part of the surface of this large stretch of snow had melted and frozen over again, forming ice,

When I entered the bath there must have been some ten or twelve others in it and I was so amused at the antics of some of the older men that I must have remained fully an hour. I noticed a pole in the bath-room which is put to a peculiar use. If any bather wishes to have forty winks while in the bath he lays the pole across the bath, then puts his legs over it, and rests his head against the edge of the bath. He is now ready for his nap, only his head and knees being above water. While one bather of about sixty-five summers was quietly reposing in this way, an old sport of about seventy, turned the cold water on the bald head of the blissfully ignorant sleeper. The gasp and look of pained surprise on his face, when the sleeper felt the icy cold stream on his head was a sight to be remembered. His tormentor was meanwhile holding his sides with laughter and elaborating the success of his joke by doing what is Japanese for a cake walk along the edge of the bath. But he who laughs last laughs best. The old sport, in prancing, forgot about the slipperiness of the floor and suddenly, without any warning, he took a header into the bath, amid the shrieks of laughter from the rest of us. He got up spluttering and tried to smile, but it was a rather feeble attempt.

For my supper that night amid other dishes such as boiled lily, bulbs, etc., I had ptarmigan stew, and rarely have I enjoyed a dish more.

After a good night's rest and another bath in the morning my knee seemed to be slightly better, so we left about 8 o'clock on our way to Gamada and then to Kasadake. It is a pleasant walk to Gamada, winding in and out of a valley first by the side of a river and then gradually ascending and leaving the river until it appears like a streak of silver in a setting of green. The walk was without incident except for my nearly treading on two snakes basking in the sun. It was just over a bridge and I was looking at the rushing torrent when one of the guides suddenly yelled at me. I instantly stopped and turned to find him pointing at my feet, and looking down, saw these two snakes. My next step would have been right on them. I lent my stick to the guide and he threw them into the river. Both, however, swam strongly and reached land. We arrived at Gamada before 11 o'clock and I had another bath to ease my knee, and after the guides had had their food cooked left for Kasadake about 1 o'clock.

We walked along the rails of a timber company for about a ri (2½ miles) and then after fording the river clambered over some large logs ready for transportation. We then struck a forest, which was also densely covered with shrubs and trees and bamboo grass over 6 ft. high. The only way we could get through was by bending low and protecting our faces as best we could with our arms,

peaks, lighting up the whole scene, and also eliminating the nip from the atmosphere. When we reached the summit the guides made their obeisances to the shrine, and then we stood entranced as we turned from side to side to gaze at the glorious view. One could not have wished for a more perfect day, and as far as the eye could see was mountain after mountain. Far away to the right was Asamayama pouring forth a column of dense black smoke and to the left and nearer was Yakegatake belching forth smoke of a lighter hue. All the giants of the Japanese Alps were visible. Amongst the better known mountains were Yurigatake, with its spear-like peak, and nearer, Hodakayama, while to the left was Kasadake, with its forbidding cliffs. Then we turned, and almost behind us we saw in a rift of the clouds the snow-capped peaks of Hakusan. Even as we were looking at this sea of mountains wisps of clouds began to settle on the peaks and gradually shut out our view. We then began our descent by another path and after a scramble down a precipitous slope reached our tent. We had a meal and a short rest, and then struck camp.

Having more time as we descended we had opportunities of admiring the many varieties of wild flowers that grow in profusion on all sides. On reaching the snowfield, where we had stopped for water on the previous day, the guides found traces of a bear that had evidently come for a drink since we had passed. Coming to an old river bed with large rocks, our progress was slow as I had omitted to bring 'waraji' and could with difficulty keep a footing on the smoother rocks with my iron studded boots. Eventually, in trying to jump from one rock to another, I kicked my right knee badly. I was now in a fix, as my left knee was weak from a previous injury, and I was relying on my right knee to carry me through. My knee became worse as we proceeded, so when we reached Hirayu at 2 o'clock we decided to stop instead of going on to Gamada. As we had not had any food since 9 a.m. we were nearly famished, but it was not long before we were satisfying the inner man.

Hirayu possesses a chalybeate hot spring, and shortly after my meal I was in it. I noticed a great difference in the bath house since my previous visit. On the former occasion it was merely a shed in the open and both sexes bathed together, only a bamboo laid across the bath separating the men from the women. This bamboo was very convenient as it could be moved about. If male bathers predominated, it was moved towards the women's half and vice versa when female bathers were more in evidence. But now all had changed, the bath house being quite a spacious building with different baths and rooms for men and women. The bath house serves not only for bathing purposes, but is also the meeting place or village club. Here the villagers meet for their daily gossip.

roof some three years ago on my way from Takayama to Shirahone. I had occasion to compliment the innkeeper on his fine place. It was a decided improvement on his previous house, and the present inn compares favourably with others of this district. After my guides had cooked some food, we started on our climb. We left Hirayu at noon and soon after came across some ruins of an old silver mine, and a little further on we came in sight of a beautiful waterfall with a drop of about two hundred feet. Our path now led around and over this waterfall, and after two hours walking we struck some more ruins of silver mines. Looking over these ruins we found machinery which had evidently not been worth the cost of carting down the mountain when work had been discontinued. In one shed there were large quantities of quartz evidently ready for weighing, as a rusty old weighing machine lay alongside.

It was an extremely hot day and we felt the heat intensely as we plugged along. Water was scarce, but we at last struck some only to find it bitter to the taste. We drank a little, but it did not seem to quench our thirst. At 6 o'clock we had our first glimpse of the peak and shortly afterwards entered a snowfield, at the edge of which we found drinking water. I do not know whether the water I had previously drank disagreed with me or not, but I was feeling far from well. I was feverish and found it hard going. At 7 o'clock we saw it would be impossible to reach the hut at the base of the peak so we decided to pitch our tent in a hollow near a little lake formed by the melting snow. Although it has been hot during the day, it was decidedly cold at this elevation (9,000 ft.) as soon as the sun went down, and our hands were quite numbed until we got the camp fire going. We were in a sorry plight. We had brought no kettle to boil water, because we had expected to reach the hut, where kettles are to be found. I was, however, too tired to worry much, and after eating my frugal meal of two slices of bread and some meat paste, washed down with a cup of cold water, rolled myself in a blanket and fell asleep. I presume the guides turned in soon after I did, as I did not hear them or remember anything till morning.

It was quite cosy in the tent, but on looking out at daybreak, we were greeted by a bleak wind. However, as the prospect of a fine view from the peak were good we had breakfast, which for me was the same as my evening meal, and started to climb the peak. Soon after we left our tent we saw a ptarmigan, which my guide bagged. After a short walk, up and down two hillocks, we came to the base of the peak and as we slowly trudged up we frequently stopped to gaze at the magnificent panorama that was gradually revealing itself. The sun now appeared above the neighbouring

Hodakayama, the most difficult mountain to climb in this district. The descent from the top of the pass to the river Azusagawa is steep and then a walk for about three miles along the river brings us to the 'onsen' (hot spring) at Kamikochi. This 'onsen' is snugly situated in a beautiful valley beside the Azusagawa whose clear waters abound with delicious mountain trout. On its left stand the rugged heights of Hodakayama, towering over the other mountains. In front Kasumidake, and to the right the active volcano Yakegatake belching forth smoke unceasingly.

On one's first visit to Kamikochi, one may be surprised to find only the inn and no other house in sight except a woodcutter's hut. But this adds to the charm. After one visit to this delightful spot, the desire seems to come over one to go again and again. The majestic grandeur of the scenery together with the awful solemnity of the mountains call one irresistibly from the noise and bustle of the city.

On arrival at the inn I renewed my acquaintance with the proprietor Kato, and was soon enjoying the hot spring bath. After a light supper of fish, rice and tinned apricots—(everyone who has been to Kamikochi will remember these tinned apricots inasmuch as they appear at breakfast, tiffin and dinner) Kato introduced me to two guides and I told them of my plans. After discussing my programme and exchanging ideas we decided to leave early next morning for Norikura, stopping at Hirayu for food for the guides. As I was tired, I retired early but, owing to the attention devoted to me by a host of fleas, unfortunately not to sleep, and I was still drowsy when one of my guides called me at 5 o'clock. A bath and breakfast revived me, and we left Kamikochi about 6.30 a.m. We skirted the base of Yakedake, where we saw a hare which one of my guides promptly shot. We were looking forward to a hare stew for dinner, when we met two woodcutters, who informed us that a policeman was making the usual fortnightly visit and happened to be staying at Hirayu. We therefore reluctantly handed the hare to the woodcutters after lopping off its ears, which the guide handed later to the son of the innkeeper at Hirayu. Our path now turned to the right and began to ascend a 'toge' and then through a valley densely grown with trees. It was interesting to see the broad leaves of the bamboo grass covered with fine powdery ash, which had fallen from an eruption of Yakedake only a few days previously. Last year, within a week of my ascent of this volcano, there was an eruption, and again this year, a couple of days before my arrival, it erupted, flames being seen issuing from its crater. The descent into Hirayu is steep, but the path is fairly good.

On arrival at the inn, I was pleasantly surprised by the innkeeper and his son recognising me. I had spent a night under their

informed they had not, as they had never been there before. I immediately produced my Murray's Guide and was able, in a couple of minutes, to tell them the name of the best inn. It was the first time they had ever seen or heard of Murray's and were surprised to learn of a foreign publication containing such detailed information. On arrival at Matsumoto I went to the Marumo Inn and after cautioning the hotel people to be sure to call me at 6 o'clock, promptly retired.

It seemed as if I had just gone to bed, when one of the maids told me it was time to get up. I looked at my watch and it was only five o'clock but it was no use turning over to try and go to sleep again as the maids were opening the 'amado,' and all who have been in Japanese hotels know the noise which accompanies the opening of these wooden shutters.

During breakfast, I enquired the cost of and the length of time occupied in reaching Shimajima. I was told one could go by public bus, hire a bus for oneself only, or go by rikisha. The cost by public bus is 80 sen and takes about $4\frac{1}{2}$ hours. There are several stops, which are apt to try one's patience. If one hires a bus for one's private use it costs about ¥3.50, probably less if one cares to argue, and takes about three hours. But by far the most comfortable method is by rikisha. A moderately good runner will do the distance, about 5 ri ($12\frac{1}{2}$ miles) in $5\frac{1}{2}$ hours, and will charge 80 sen. I decided on a rikisha and settling my bill of ¥1.50 for bed and breakfast and giving the usual tips, left the Marumo Inn at 7 o'clock. On my arrival at the Shimizuya Inn at Shimajima at about 10.30 a.m. I found my 'goriki' waiting for me. He was a fine strapping fellow and carried my rucksack, weighing about 50 pounds, with ease. It may be of interest for intending travellers to know that these men can carry when travelling with a guest about 50 pounds, but when travelling alone and taking their time, they carry as much as 100 pounds.

After a short rest to prepare a 'bento' we left for Kamikochi at 11 o'clock. The walk to Kamikochi is a delightfully pretty one, with a good path for that part of the country, and the distance is about 15 miles. The first five miles is in a valley beside a rushing river, the sound of which together with the freshness of the air, formed a pleasant contrast to the noisy rattle and stuffiness of the train journey the previous day. After leaving a hut some seven miles from Shimajima, the path gradually ascends until further up it becomes quite steep. As one is slowly walking up the zigzag path the sound of the rushing water below becomes softer and softer and finally dies away. Nothing is heard save an occasional twitter of some bird or the gentle rustling of the wind amongst the trees. On the top of the Tokugo Toge (about 7,000 feet) one has a view of

Along came a timber cart. The driver who was leading the horse willingly agreed to carry me. "How much shall I pay you," "Oh I don't want anything." I consulted with the guide who said 15 sen so I settled down to ride the last 5 miles to Gohyakkoku—3 sen per mile or $7\frac{1}{2}$ sen an hour. When we reached Gohyakkoku there was still a mile left to the station where we arrived triumphantly at 6.30. From Gohyakkoku a light railway connects with the Imperial Government Railway at Namerikawa. The following day I bade a reluctant good-bye to my party and returned to Kobe.

OFF THE BEATEN TRACK.

BY

A. G. HEARNE.

A FRIEND and myself having enjoyed our trip amongst the Japanese Alps last year, planned a similar trip this season. We however, decided to take with us this time a tent, so that we could, if necessary, camp on the mountains and not return every night to our headquarters at Kamikochi, or a near-by village.

As we were fortunate last year in having two good guides we wrote, early in June, to the Shimizuya Inn at Shimajima, asking the proprietor to engage them for us. To our surprise and regret we received a reply to the effect that our favourite guide, Zembei Kobayashi, had died in April. Poor old Zembei, he was such a decent chap, alway obliging and good natured, with a continual smile on his weather-beaten face. No matter how far the journey, or how heavy the load, he was always willing. In fact, we got to regard him more as a companion than as a guide.

All our preparations were made when my friend was unexpectedly detained on account of business, and as I could not fit in any other date had, perforce, to go alone. I left Yokohama by the 10.55 a.m. train for Matsumoto and arrived at my destination tired out at 11 p.m. I should think this line holds the record for tunnels there being either fifty-five or six between Yokohama and Matsumoto.

While on the train I had an interesting conversation with two Japanese Army officers who were returning to Kanazawa from a visit to Tokyo. They had both had their first flight in an aeroplane that morning at Tokorozawa and were quite excited over their experience. They alighted at Shiojiri, a few stations from Matsumoto, and on my enquiring whether they had decided on their hotel, was

up was the scene of a early attempt to climb Tsurugi which failed.

Finally we came to the end of the snow in a sort of receiving basin from Bessan, halfway between Tateyama and Tsurugi. We crossed this diagonally, making for the ridge over broken stone. It looked near enough but appearances are deceptive. The time passed and we seemed to be no nearer until I began to think we should never arrive. Then finally, when I had resigned myself to going on all day, the guide turned with a smile and said 'Shall we have a rest?' and I found we were on top. He had brought us out dead on the summit of Bessan, northernmost of the Tateyama group.

From here a track leads along the top over Fujino-ottate and Onanji to the shrine on the summit of Tateyama. Mist had by this time veiled Tsurugi and the distant view and was settling down on Tateyama itself so after a short rest we descended to the Tateyama hut.

Our times were : left 7.30, Tsurugi main stream 9.15, Bessan 1.30, Murodo 4.30.

The guide was anxious to push on from a zealous desire to save my purse but I had had more than enough and insisted on staying.

Sept. 5 : We left at 8.30 on our last stage to Gohyakkoku. We should have started earlier but when all was packed I suddenly missed the carriers. They had gone off to inspect the sulphur beds.

Presently however at 8.30 we were ready to start and the manager of the hut dropt a bombshell. "Going to Gohyakkoku, are you? It is 13 ri and at a ri an hour you will get in at 9.30 to-night. Good-bye. Please come again." The guide looked perturbed and then got a brilliant idea. "They only say that to keep the rate for coolie hire up." However from sundry indication it soon became only too clear that 13 ri it was and we settled down to a day of it.

The path is good in parts—over the flat—and execrable in others—when it descends and reminds one of a dried river course. After several days of going over rocks, the last stretch down to the main road at Fujibashi retains one small stretch of exquisite torture to tender feet—over the Zaimokusaka so called because the rocks have worn in the shape of timber.

From the Murodo to the Bridge is 7 ri and I brought the guide and carriers down to it in 5 hours, much to their astonishment. That left 6 ri along a good road and it was only 1.30. It was then merely a question of plodding. Our pace steadily declined till it can have been little over 2 miles an hour. The guide struck to it manfully but the carriers had dropped away in the rear.

When only 6 miles were left, we sat down and waited for them. The minutes passed and they did not appear but something else did.

stretch through a wood of beeches transports one in imagination to England. Higher the valley becomes wilder. The forces of destruction have been actively at work here and whole sides of the valley have fallen in. 'Young Kurobe' is a distinctly lusty baby.

Apparently it is snow that does the major part of the damage, lying deep on the sides during winter and falling in masses in the spring bringing away with it trees and soil and destroying everything in its path. Even in September great blocks of it were lying in the bed of the river forming a kind of snow bridge under which the stream runs.

In the afternoon we met a party descending from the mine—a Russian and his escort who had come over Tsurugi. Unfortunately I had no Russian and he had little English so we could not say much to each other.

By this time the valley had narrowed in and the river had contracted first to a stream, then to a mountain torrent and we were obviously approaching the source, a semicircle of hills just below Tsurugi Dake. On the rim is perched the mine office which presently came in sight.

A valley on our right opened up to an interesting gap in the ridge known as the Omado or Big Window. There are three of these windows, the other two being Komado (small window) and Sammado (three windows). Each is carpeted in snow.

My idea had been to stay at the office but the guide said that it was doubtful whether there was sufficient accommodation for all of us. Just below was a hut occupied by charcoal carriers. To them the guide applied for shelter. They demurred at first but when we turned to leave changed their minds and gave us a hearty welcome. We left Babadani at 7.30 and arrived at 4.

Sept. 4th: Leaving at 7, a short climb brought us to the mine buildings. On the opposite side is a little plateau with stagnant pools known as the Ikenotaira. Just above is Tsurugi Dake looking tantalisingly near. From the plateau a sharp descent through wood brings one to the bed of a tributary of the Tsurugisawa. Two miles over snow down this and at 9.15 we had joined the main stream of the Tsurugisawa up which we now turned our steps.

The stream had to be waded two or three times and as it was up to the waist at the last ford in spite of the dry summer, this stage might present difficulties after rain. Higher we came on snow again which seems to lie in the valley year in and year out. The going over this snow is remarkably easy though as the valley rises in a kind of series of steps, it is rather steep in parts.

We were here right under Tsurugi Dake which can be climbed up a steep couloir opening on the right. A similar couloir higher

the path follows along the side of this to the mine which is just under the peaks of Karamatsu and Goryu. Magnificent views are obtained, in particular of Tateyama and Tsurugi.

From the mine my intention had been to cross Goryu and climb Kashima Yari but I had to abandon the idea and content myself with climbing Goryu as I was told there was no snow (the only source of water) left on the ridge. We lazed therefore the rest of the day.

At the mine office we were most hospitably received and feasted on a hare—a welcome change from tinned food—and our stay at the mine was one of many bright spots in our little trip.

Sept. 1: I accompanied L. to the pass 2 hours above the mine. Here we parted company in mist interspersed with gusts of wind and rain. L. continued down to Hokujo at 2 and having reached the outskirts of civilisation motored into Omachi thence to return to Kobe via the Central Line.

The road over the pass is a new one and leads within a quarter of an hour of the summit of Karamatsu which we therefore climbed. There was of course little to be seen but temporary lulls in the rain storms gave charming glimpses of heights swimming in cloud.

Sept. 2nd: The weather had cleared and continued fine for the rest of the trip.

The advantage of the Daikoku Mine is its proximity to Karamatsu and Goryu. Karamatsu had taken less than 4 hours and Goryu, with an hour on top, occupied only a little over 3 hours. The ascent is very steep. There is a path which however is very hard in the early stages and extremely slippery after rain. An hour through the forest brings one out on to rock when the slope becomes easier, though the rocks are very sharp under foot. The view is similar to that from Orenge and is more or less complete of all the northern ranges as far as Yurigatake. Facing east one has an unrivalled view of range behind range of the lesser giants to Asama and beyond. From Orenge we had had a lovely view of Fuji.

From Goryu we returned to the mine at noon, left again at 1.30 and were back at Babadani by 4.30.

Sept. 3rd: The following morning I bade good-bye to the Babadani Hut and set out on the last stage of the trip—over Tateyama. As far as the Monkey's Leap we returned by the Kanetsuri path. Just below this the Ko-kurobe or smaller Kurobe runs in. A tungsten and molybdenum mine was discovered in the upper sources a year or so back and the climber derives the benefit in a path which has been constructed up the valley. The condition of this path will depend on the fortune of the mine; it is at present in excellent condition. After a steep preliminary climb to avoid gorges, the path is carried most of the way along the sides of the valley. A delightful

chosen in a little clearing in the creeping pine and the guide and carriers set to with a will to build a shelter.

Nothing could have been finer than the location of this camp. We could sit in the hut and view the neighbouring heights, all except Renge itself, hidden behind Shozu-ga-take. A few steps out from our camp and there in front of us were Tsurugi and Tateyama and in the far distance, Yari, Hodaka and Norikura. We were favoured with clear fine weather during our stay and to stand on this plateau and watch the colouring of these peaks changing with the dawn was a sight to be remembered but not described.

August 28: We set out at 7 to complete the ascent of Orenge. The route follows round the side of the ridge under the heights of Shozudake and Mae Renge. Half way we had a little excitement. As we came round a corner there a quarter of a mile away, was a black object—a bear browsing on the side of the mountain. For some time it was unconscious of our presence. Then it made off, at first slowly and presently in a kind of lumbering gallop down into the valley.

Approached from the west, Orenge at first strikes one as a very "tame" mountain appearing as a simple grassy slope but on a nearer approach it appears anything but tame the eastern face falling away precipitously to the valley. In general all the peaks of the Renge and Tateyama ranges present a bolder appearance on the east side, where they have weathered and where the valleys lie deep in snow, than on the western more protected side, the slopes of which are steep but not devoid of green.

Orenge is known on the eastern side as Hakuba or Shirouma and is more usually ascended from Hokujo, north of Omachi. There is a hut just under the summit. From our camp the ascent occupied $2\frac{1}{2}$ hours and the descent rather less.

August 29: There is little to record of the descent to Babadani which took us nearly 9 hours and was little less fatiguing than the ascent. The whole party was fully tired by the time the stream of the main hot spring at Babadani hove in sight.

August 30: We decided we had earned the right to a lazy day which was opportune as it rained hard. In the afternoon our messenger whom we had sent into Kanetsuri for letters returned and after perusal of his mail, L. decided he must return. Fortunately the path to Daikoku Copper Mine afforded him an alternate means of return via Omachi so it was not necessary to part company immediately.

August 31: Left Babadani 8.30 and reached the mine at 1.15. The time could be shortened if necessary.

The path is a good one. Two hours' climbing brings one on to a spur leading up to Karamatsu Dake in the Renge Range and

though one building remains in fair condition. This we made our headquarters as Babadani was to be our base for the next week.

I have tried to describe the scenery of the Kurobe and abandoned the attempt. Of its kind I have seen little to equal and nothing to beat it. From Aimoto-bashi to Kanetsuri and again from Kanetsuri to Babadani it steadily increases in grandeur. Always steep, the valley walls gradually draw in until at Sarutobi (Monkey Leap) they are said to be only 20 feet across and the river flows through a gorge with sides rising perpendicularly for hundreds of feet. Here the path has had to be cut out of the side of solid rock and the view is magnificent in the extreme.

Near the Sarutobi a tributary, the Kokurobe or Small Kurobe, runs in on the left bank and a little further on the main river is joined on the opposite bank by the Babadani River. The Kurobe is crossed by a suspension bridge (said to be 18 ken) which we found in urgent need of repair. A good number of the cross planks have fallen away and most of the time one had to step gingerly over gaps of 2 and 3 feet. The bridge is suspended from stout wire ropes so that the whole structure gives to the weight.

There is of course no bath-house at Babadani but a hole was scooped out in the sand for us in the course taken by the hot spring on its way to the river. When too hot, the temperature could be moderated by allowing the river water to run in.

August 27: We were up early for our trip to Orenge but what with bathing, eating, packing, etc. we did not get started till 7.30. However as events turned out we had timed it very nicely. A forest path leads for 30 minutes up the Babadani. Thence onwards there is no path but the course of the stream is followed to its source, one or two detours being made through the forest to avoid gorges. Fortunately the guide had already taken half a dozen parties up this season and we had the advantage in a distinct trail. A few minutes after the end of the path were rather ticklish where the trail overhangs the river and there are only the stems of shrubs to cling to for support in case of a missed foothold. Mostly the way is in the bed of the stream and the going is fairly arduous. Above the point where the Iozawa (Sulphur Valley) flows in (9,40) the going becomes easier. At 1.30 we came to the first snow. This was lying in the bed of the stream and over it we were able to make good progress. By this time we had had the ridge in view for some time and presently the guide forsook the stream and struck up the side over grass. This was very steep. Presently mist formed and a shower of rain somewhat damped our spirits but by 4 we were on the spur and at 4.30 had reached a little plateau at 8,000 feet known as the Shozu-ga-taira. Here a camp was

A FORTNIGHT ON THE KUROBE.

BY

OSWALD WHITE.

THE lower Kurobe district has not received the attention it deserves from the climbing world. This is entirely due no doubt to the impression abroad as to its inaccessibility. Yet a footroad has existed for some time past from Aimoto-bashi, where the Kurobe debouches on the plain, for 15 miles or so up to Babadani a tributary, from which it is possible to gain access to the more important peaks at the extreme northern end of the Alps.

When Libeaud and I were planning a summer trip together, we fixed on the lower Kurobe as the scene of our operations in view of the magnificent scenery of the river itself and of the opportunity afford of climbing some of the peaks already referred to. A night train by the Hokuriku line dropped us at Mikkaichi beyond Toyama at 8.30 on August 24th. Here we were met by Mr. Yoshizawa, a teacher of the Uozu Middle School, who has done much to make known the beauties of the Kurobe to the outside world and who had shown great kindness in advising as to routes and guides for us on our present trip. An hour was spent in discussing final details and then we proceeded by basha to Aimoto-bashi at the opening of the Kurobe valley. Where we found our guide and carriers awaiting us. I wish to say here that they proved most efficient and gave the greatest satisfaction. The guide's name and address is Sasaki Sukesaburo, Toyama-ken, Shimonikawagun, Aimoto-mura aza Otozawa.

We left Aimoto-bashi at 1.30. Nine miles up the Kurobe we diverged up a side valley and a mile further arrived at Kuronagi Onsen at 5.30. Here, as at Kanetsuri and Babadani, the great attraction was the hot springs.

August 25: We had had an idea of idling at Kuronagi but changed our minds and at 2 proceeded further up the valley to Kanetsuri Onsen. Here the baths were in an original position—in a natural cave in the rock. As the water was so hot that no one could remain in long, the bathers would go in for a minute, rest on the rocks outside and then go in again.

August 26: We left at 7.35 and arrived at Babadani at 12. There used to be an inn here but it was abandoned a year or so ago

NIPPON SANGAKU KWAI,

(THE JAPAN ALPINE CLUB.)

Premises :

No. 67, Shichôme, Honchô, Yokohama.

Telephone :

Nos. 171 and 5264, Honkyoku.

The object of the Club being the promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it has always welcomed to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

Candidates for admission into this Club must be proposed and seconded by the three members, one of them must be a member of the Council, and it is necessary that such candidates should fill in the official printed blank, with details of ascents made or character of work accomplished by the candidates, and send it to the Club. The admission of candidates will be decided by the members of Council.

Every member, on admission into the Club, be required to pay ¥5 as entrance fee, and ¥3 as annual subscription for the current year, and thereafter a yearly contribution of ¥3, due on the 1st January of each year. (This regulation is effective on and after the 1st January, 1920). All subscriptions are payable in advance, on the 1st January in each year. The Post Office Account of the Club is No. 4,829, Tôkyô.

The privileges of a member include admission to all Ordinary Meetings of the Club, and the use of the Club Library and Maps. Each member is entitled to receive a copy of all the Club's Periodical Publications. No member shall be entitled to vote or enjoy any privilege of the Club while in arrear.

After October 15th, business of the Club will be carried on at No. 6, Fujimichô Shichôme, Kôjimachi-ku, Tôkyô. All communications should be addressed to Dr. H. Takeda. Enquiries requiring a reply should enclose return postage.

CONTENTS.

	PAGE.
A FORTNIGHT ON THE KUROBE—Oswald White . . .	1
OFF THE BEATEN TRACK—A. J. HEARNE . . .	7
SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS—‘Blue Dragon-Fly’	16
CLUB LIBRARY	20
CLUB PROCEEDINGS	21
NEW MEMBER	22
JAPANESE PART OF THE JOURNAL.	22

The Journal of the Japan Alpine Club

SANGAKU

(English Supplement)

Vol. XIII

• • •
1919

No. 3